



贖罪日の儀式と 終末諸事件の順序

あまつましみず

巻頭言

私たちはエレンホワイトが予告した「地球歴史はおおよそ6000年」の最終時代に住んでいます。70～90歳のアドベンチストの多くは5, 60年前に「キリストの御再臨は10数年のうちにある。」と教えられかなりの方がそれを信じました。私はそれを信じて現実その時の生活や将来のプランを「キリストのご再臨は近い」にあわせて計画し試行錯誤してきました。しかし、それから半世紀が過ぎましたが、それぞれが多少の波風はあったとしても、日常の生活は平穏であり目に見えるご再臨の兆しを感知することが出来ない日々を過して来ました。ことに日本では戦争もなく、経済も安定しておりご再臨の兆しを見ることはできないかんきょうかにあります。では多くの方が感じておられるように本当に私たちはまだ100年先のご再臨の時代に住んでいるのでしょうか？

しかし、聖書と証の書を詳しく学ぶとき、「獣」と予告されているローマ法王権は「死ぬほどの傷が癒される」完全復活が目前であることに気付かされます。キリスト御再臨を目前としながら「残りの者」としてのSDA教会は、ラオデキヤ病にかかっています。一方、「獣」の側は「神の戒めを守り、イエスの証」を持っている者達に戦いを挑む準備はほとんど完了しています。サタンはほとんどの教会員を飲み込んでしまい「食いつくすべきもの」すなわち「残りの者」をせん滅する作戦に取り掛かっています。それはすでに多くの教会員がサタンに飲み込まれていることを意味します

1ペテ5:8 「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。」

上記聖句が述べている「食いつくすべきもの」とは「残りの者」であって多くはすでに食われていることを示唆しています。パウロはテサロニケの人々に次のように書き送りました。

2テサ 2:8 ~12 「8 その時(今直前です)になると、不法の者(ローマ法王至上権NO2後期)が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう(ST22)。9 不法の者が来るのは、

サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議、**10** また、あらゆる不義の惑わしを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。**11** そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、**12** こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。」

現代のアドベンチスト教会は「自分らの救となるべき真理」を疑い、それを捨てようとしています。「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送」られたので教会員の多くは「真理を信じないで不義を喜んで」います。それは近年のアドベンチスト新神学の教えの中に見ることが出来ます。米国アンドリュース大学の神学者の一部の者がエレンホワイトを通して与えられた証の書の大事な部分を無効にする学説を提示しています。

それは恩恵期間が終了する前に「生ける義人」が確保しておかなければならない品性の基準に関するものです。聖書は「聖なる者は聖なるままに」と言い、証の書は「罪を犯されなかったキリストの御品性を完全に写していなければならない」と、調査審判を通過できる者の品性の基準をはっきり述べています。

大争闘下P215, 216「真に罪を悔い改め、キリストの血が自分たちの贖いの犠牲であることを信じたものは、みな、天の書物の彼らの名のところに、罪の許し書き込まれる。彼らは、キリストの義にあずかる者となり、**彼らの品性は、神の律法にかなったものとなったので、彼らの罪は、ぬぐい去られ、彼ら自身は、永遠の生命にあずかるにふさわしいものとされるのである。** 主は、預言者イザヤによって、こう宣言しておられる。**「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」**（イザヤ 43：25）。イエスは、次のように言われた。勝利を得る者は、このように**白い衣を着せられるのである。**わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。」

各希望中 p 20「クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において**完全**であられたように、キリストに従う者も、その**生活において完全**でなければならない。」

艱難下p269, 270「神はわれわれの前に最高の理想、完全さえも掲げてくださる。神はご臨在によって絶対に、また完全にわれわれのものとなって下さると同様に、われわれにもこの世において完全に神のものとなるよう求めておられる。あなたがたに関する「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」（I テサロニケ 4：3）。」

実物教訓p331「イエスをながめることによって、いっそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行い、彼らを愛することは、わたしたちにとっては自然に行う本能となる。そして、神の品性と全く同じ品性を自分たちの中に形成する。こうして、神のかたちにまで成長することによって、神を知る能力もますます増加する。」

私たちは1844年より「調査審判と罪の除去」の時代に生かされています。上記引用文は「彼らの品性は、神の律法にかなったものとなったので、彼らの罪は、ぬぐい去られ、」と罪の除去の前に品性が神の律法にかなうものとなるべきことが示されています。「キリストの品性を写す」とは「キリストに似ること」であり、それは「生活において完全」であることを意味します。私たちの宮に住まわれる神は「神の品性と全く同じ品性を自分たちの中に形成」してくださるのです。同じ意味のことを次のようにヨハネは述べています。

1ヨハネ3：9「9すべて神から生れた者は、罪を犯さない。神の種が、その人のうちにとどまっているからである。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができない。」

黙 12:17「龍（サタン）は、女（残りの教会）に対して怒りを発し、女の残りの子（144000人軍勢）ら、すなわち、神の戒め（10戒）を守り、イエスのあかし（エレン・ホワイトの証の書）を持っている者（ギリシャ語 持ち続けている者）たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。」

「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」とヨハネは述べていますが、一体いつの時点を指しているのでしょうか？

バプテスマを受けた時でしょうか？夢や特別な事件の解決を通して、自分は神様に受け入れられている、という確信を持ったときでしょうか？いや違います。大方、その後も、罪を犯しては悔い改めることを繰り返してきたでしょう。恐らく、「罪を犯すことが出来ない」という境地は全ての悔い改めた罪が除去された後のことでしょう。すなわち、恩恵期間が終了する直前から、キリストが再臨される前までの、短い期間のことをヨハネは述べたのでしょう。

「調査審判と罪の除去」は、イエスキリストの贖いによる、再創造の働きを意味します。ダニエル8:14「聖所は清められて、もとの正しい状態に復する」も再創造の働きの預言です。それは、罪を犯すことに慣れた私たちを、アダムが罪を犯す前の状態に「復する」と、言う約束です。この約束こそ、誤謬に満ちたサタンの攻撃に対する「信仰の盾」です。盾を落としたり、奪われないように、日々のみ言葉の学びが大切です。

私たちは「悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。」最後の時代に、生かされていることを、自覚する必要があります。サタンは、教会員のほとんどを飲み込み、講壇の裏でせせら笑っています。黙12:17「龍は、女に対して怒りを発し」は近未来に、神の戒め（10戒）を守り、イエスのあかし（エレン・ホワイトの証の書）を持っている者（ギリシャ語 持ち続けている者）たち」すなわち、**144,000人軍勢が勢ぞろいする時に**サタンは怒るのです。

各時代において神様が事を起こされる時は、神様の教えに忠実な者を選ばれます。ギデオンの招集に応じた、32,000人は淘汰されて、300人が、神の軍隊として選ばれました。戦場を目前にした川を渡河する際に、岸边に座り、水をゆっくり飲んだ者達を捨てられ、川を渡りながら、片手で水をすくって飲ん300人を、神の軍隊の先兵として選ばれました。古来の戦いにおいては先陣功（戦場に一番乗りした者に与えられる恩賞）が与えられる習慣でした。300人は目の前の戦場に一刻も早く着きたいと、岸边で水を飲む時間を惜しんだのです。神はその人の心から沸きあがる想いと姿勢を見て「恐るべきこと、旗を立てた軍勢のような者」の兵士を選ばれるのです。

ミッションパイロットのデービット・ゲーツ氏は、「すべてを神の祭壇の上に置きなさい。その時、神様が全てを導かれ働いて下さいます。」と言います。全盲のベテル治療院の院長であった、チェ・チャスンさんも、おなじように「全てを神の祭壇の上に置きなさい。その時、神様の癒しの力は与えられます。」と、言われます。「すべて」、とはあなたの財産も、あなたの能力も、あなたの時間も、あなたの人生そのものを祭壇の上に置きなさい、とすることを意味します。時は迫っていることを、本書の「贖罪日の儀式と終末諸事件の順序」を通して学んで下さい。

あまつましみず 鎌田紘一

表紙	1	1) レビ16:17	50~55
巻頭言	2~6	2) ミカエルが立ち上がる時	55~57
目次	7~8	ST17-A 雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式	57
イエスのご再臨は間近い	9~13	1) 総括的な贖い	57~59
贖罪日の大祭司の衣装の変遷	14~18	2) 罪の除去	60~63
贖罪日におけるアロンとイエスの御働き表	19	3) 贖罪日の儀式と終末諸事件の関連表ST13~24	64~66
贖罪日の儀式と終末諸事件の順序 危機と勝利表	20	レビ16:18.19の主の前の祭壇は金の香壇です	67~69
贖罪日の儀式と品性の改変との関係表	21	1) 贖罪日に用いられる2つの祭壇	70~73
ST13 大祭司イエスの聖所から至聖所への移行	22~25	2) 罪の除去は一時に行われる	74
ST13 大祭司アロンの聖所から至聖所への移行と		3) 罪の除去のタイミングに関する考え方	74~75
ダニ8:14「2300夕朝預言」との関連	25~28	4) 罪の除去」に関する引用文	75~79
再臨信徒5万人と神の選び——50数人の精鋭	28~31	5) 大いなる君ミカエルが立ちあがります	79~80
ST14-A 真の安息日の提示ハイラム・エドソン	31~33	6) 黙示録12, 13, 17章の7つの頭	81
ST14-C 「私の血、私の血、父よ私の血」	33~34	A) 黙12章の7つの頭	81~82
ST15 大祭司は雄山羊の血を贖罪所に注ぐ	34~50	B) 黙13章の7つの頭	83~86
罪の除去に至る4段階	35	C) 黙17章7つの頭	86~87
1) 「命の書」にその名が記されます。	35~37	預言者の時情報と位置情報を探れ！！	87~91
2) 調査審判と無罪判決の確定	37~40	その他の時と位置情報を示す聖句	91~93
3) 調査審判と無罪判決確定、罪の除去は		ST17-B 恩恵期間終了	93~93
ST17-A 金の香壇で行われる	40~42	7つの封印と7つのラッパの時系列的関係表	93~95
4) 罪の除去は主の前の祭壇で行われる	42~45	調査審判と罪の除去のタイミング	95~97
生ける者の裁き	45~46	黙6:9~11 第五の封印	97~101
1) 後の雨の慰めと罪の除去のタイミング	46~47	封印された	101~102
2) 2種類の「後の雨」	47~49	香炉を投げ捨てる	102~104
3) 144,000人候補	49~50	『ちょっとの間』で罪が除去される	104~107
ST16 大祭司は至聖所から		7つの災害発生のタイミング	107
聖所の金の香壇に向かう	50	ST18 会衆と祭司の罪をアザゼルの山羊に移す	108~110

ST18 サタンへの罪の移行アザゼルに罪を移す 110

罪の除去第2段階

ST19~21 大祭司は正装を脱ぎ全裸になり、洗盤で身を
すすぎ、白衣に着換えて聖所から出てくる 111~115

「調査審判と罪の除去」のタイミング 116~118

イエスのご再臨は間近い

私は今年で80歳の後期高齢者の老人です。「主のご再臨が近い！！。」と聞かされそれを信じて半世紀が過ぎました。この間にアドベンチストの神学者の間に「預言の霊」に関する不信が現れ、その教えは牧師たちの間に浸透し信徒を汚染していきました。その影響は自給伝道者や各地の聖書研究機関にも及び、今日のような「現代の真理」の理解における不一致を招いています。このような、こんがらがりもつれた糸をほぐして、まっすぐな理解を提示することが求められる時代となってきました。現在、SDAの各機関はそれぞれが最後の宣教のための「後の雨の聖霊降下」、すなわち「慰め」が来る、あるいはそれを求めると表明しており、「現代の真理」の理解における不一致を持ちながら「後の雨の聖霊降下」を受けれると信じています。

この状況は、弟子たちが愛して信じたイエスが、十字架に架けられ、葬られ、失意のうちにうなだれている彼らの前に現れるまで、自己過信による不一致に陥り、世間の目を恐れ、縮こまって隠れていた時とよく似ています。キリストが亡くなられた後、彼らは主の護りが信じられず、彼のよみがえりの約束を思い出すことさえもできませんでした。彼らは官憲の襲撃を恐れて二階座敷にひっそりともっていました。そのような失意の中にあった弟子たちの前にイエスは「安かれ」と言って姿を現されたのです。彼らはよみがえられたイエスを目の当たりにしてどんなに喜んだか想像できます。

同じように、1844年の大失望の後、失望に陥っていた再臨信徒の中から選ばれた50数人の者達は、かつての弟子たちがよみがえられたイエスのお姿を目の当たりにして喜んだように、天の至聖所におられるイエスを再発見して喜びました。

それから179年が経過しましたが、我々の理解はその時示された初歩の真理の理解から一步も進んでいません。大失望に陥った再臨信徒の先達に示された至聖所に移られたイエスを、彼らはどのようにして発見したのでしょうか？ 綿密な聖書研究と幻とによって天の至聖所におられるイエスを発見したのです。天よりの啓示によってハイ

ラム・エドソンに天の至聖所が示された後、かれらは「贖罪日の儀式」の学びを通して、至聖所で奉仕しておられる大祭司イエスの働きを理解しました。至聖所におけるイエスの贖罪の働きは「調査審判と罪の除去」が本来の働きですが、全てではありません。贖罪日の儀式における至聖所での雄山羊の血の注ぎは大祭司の動きを示した贖罪日の表ステップ15 (p14表参照) ですが、儀式の終了までにはまだ9ステップが残っています。恩恵期間の終了までにはステップ16と17-Aの2ステップが残っているだけです。このこの二つのステップが象徴している期間に終末諸事件のほとんどがぎっしりと詰まっています。

今までこの残りの2ステップへの学びの機会がなかったわけではありません。コーキーエバンス氏著作の”The Sanctuary Cross”を通して、贖罪日の儀式とキリストの再臨、さらには1000年期に及ぶ諸事件との関連が的確に示されていました。しかし、彼が中卒程度の学歴しかなかったので無視されたのでしょうか？彼の提示に目を向けたものはごく僅かでした。エレン・ホワイト氏も無学歴の方でしたが、神様は彼女を代弁者として選ばれたことを思う時、コーキーエバンス氏もまた神様に用いられたのです。恐らく、贖罪日の儀式を解明することは、SDA各機関における、終末諸事件の順序や意味の理解における、微妙な食い違いを一致に導くでしょう。

「イエスキリストが地上生涯で採られた人性とは？」「後の雨の慰めとは？」「144,000人とは？」「大いなる叫びとは？」「調査審判とは何か？」「罪が除去されることの意味とは？」「印されるとは？」このような「現代の真理」の重要な案件における理解の不一致は、贖罪日の儀式をもう少し深く研究する時、解決に向かうでしょう。

SDA各機関の皆さん自身が、熱心に求めている、と表明している「後の雨」の「慰め」は、かつての弟子たちが受けた、ペンテコステの聖霊降下の再来のことです。弟子たちが目に見える聖霊の、豊かな注ぎを受けたのは、よみがえられ、天から戻られたイエスともう一度、40日間にわたって聖書研究をした後、互いのわだかまりと偏見を捨て、一致した後のことでした。このことについて預言の霊は何と言っているのでしょうか？

患難上 p 12,13 「これら最初の弟子たちには著しい相違点があった。彼らはこの世の教師とならなければならなかったが、性格的にはなはだしく異なるさまざまな型を代表していた。この人たちはゆだねられている仕事を立派に進展させるためには、素質も生活習慣も違うので、**感覚、思想、行動において一致する必要があった。この一致こそ、キリストが確かなものにしたいと目指されたものであった。**」

各希望下 p 333,334 「キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じてご自身に関する事柄を解説された。もしキリストが最初にご自分を彼らにお知らせになったら、彼らの心は満足してしまったであろう。喜びのあまり、彼らはもう何も求めなかったであろう。」

このようにして、贖罪日の儀式の解明が、とても重要なことであることがクローズアップされてきました。中でもST17-Aの働きが「現代の真理」そのものなのです。この働きをレビ記16：18,19が説明しています。

レビ16：18,19 「**18** そして彼は**主の前の祭壇**のもとに出てきて、これがために、あがないをしなければならない、すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取って祭壇の四すみの角につけ、**19** また指をもって七たびその血をその上に注ぎ、イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし聖別しなければならない」

上記聖句が示している働きが、今クローズアップされている働きです。長い間この働きは注目されず放っておかれたため、この儀式の周辺にはサタンがばら播いた、雑草とイバラが生い茂っています。イバラはとげを持っています。それは、「主の前の祭壇」は至聖所の贖罪所の前に、第2の幕を隔てて設置されている金の香壇ではなく、外庭の燔祭の祭壇である、と言う教えもその一つです。しかし、レビ記16章自体がそれを否定しています。

レビ16：12,13 「**12** 主の前の祭壇から炭火を満たした香炉と、細かくひいた香ばしい薫香を両手いっぱい取って、これを**垂幕の内に携え入り**、**13** 主の前で薫香をその火にくべ、薫香の雲に、あかしの箱の上なる贖罪所をおおわせなければならない。こうして、彼は死を免れるであろう」

12節に書かれた「主の前の祭壇」はやはり聖所の金の香壇です。もし外庭の燔祭の祭壇であるなら「垂れ幕のうちに携え入り」と言う文言が示す位置の説明がつきません。この日、大祭司は至聖所に雄牛の血を携えて贖罪所にその血を注ぐことになっていました。彼は至聖所で主の栄光に打たれないために、香炉に香の祭壇で燃やされている炭火を入れ、そのなかに「両手一杯」の薫香の一部を入れて薫香を焚きました。大祭司は薫香の煙を香炉から出しながら、至聖所の垂れ幕をくぐったのです。さらに、香炉と薫香は聖所第一室の金の香壇のわきに置いてありました。この様な訳で「主の前の祭壇」は聖所第1室の金の香壇であると言えます。この問題に対して靈感の書は何と言っているのでしょうか？

人あ上p410「至聖所と神の面前から聖所を隔てているとばりのすぐ前には、金の香の祭壇が置かれていた。祭司は、この祭壇で朝夕香をたき、その角には罪祭の血をつけなければならなかった。そして、この祭壇には大いなる贖罪の日に血が注がれた。」

大争闘下 p 131,132「1年に1度、大いなる贖罪の日に、大祭司は聖所を清めるために至聖所に入った。そこで行われた務めによって、1年間の務めが完了した。贖罪の日に、2頭のやぎが幕屋の入り口に連れてこられ、くじが引かれた (ST11)。「1つのくじは主のため、1つのくじはアザゼルのため」(同16:8)。主のためのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた(ST12)。そして、大祭司は、その血を幕の中に携えていき、贖罪所の上と贖罪所の前に注がなければならなかった (ST15)。血は、幕の前の香壇にも注がなければならなかった。」

靈感の書もはっきりと、贖罪日に金の香壇に血が注がれたと述べています。サタンは50年以上前から、エレン・ホワイト氏の預言者性を否定する神学を、神学者や牧師たちの間に植え付けてきました。彼らがまき散らしたウィルスは瞬く間にアドベンチスト信徒の間に広がり、「恩恵期間終了後の生きている義人にはまだ罪の傾向が残っている」と言う説が、アドベンチストの機関誌に出てくるまでに病状は進行しています。それはその神学が教団の公式見解となりつつあるということを示しています。

私達はもう一度原点に立ち返って、自分たちの信仰の土台を点検する必要があります。レビ16章の贖罪日の儀式を学び直さなければなりません。私はこの4年半、贖罪日の儀式を中心とした学びを進めてきました。そして気付いたことは、大事な基礎的なことの学びをおろそかにして、聖句と証の文の引用文を、それぞれが自分の主張する教理？を擁護（ようご）するために用いたために、今日のような終末諸事件の意味や順序に関する理解において不一致を招いているのです。

不一致をもたらしている論点は

「罪の除去」の意味とタイミング

「後の雨」「後の雨の慰め」の意味とタイミング

「大いなる叫び」の意味とタイミング

「ダニエル12章の3タイムライン」の理解 過去か？未来か？

「聖別」「神の印」の意味と受けるタイミング などです。

私はこの4年半の学びで、これらの理解の相違点をもたらす不一致を解消するには、贖罪日の儀式の解明が重要であることを悟りました。ダニエル書とヨハネ黙示録の各預言のほとんどは聖所 ([the sanctuary](#))に関わるものです。贖罪日の儀式の解明に不一致をもたらしている最も大きな要因は、その日に大祭司が着用した祭服が何であるかの理解が異なっていることに気付きました。

- ・ 儀式の間大祭司は正装であった
 - ・ 儀式の間大祭司は白いリンネルの服装であった
 - ・ 儀式の間大祭司は3度着替えた
- } 一体正しい理解はどれでしょうか？。

次ページ以降に私が学んだ贖罪日の大祭司の衣装のことを展開します。正しい理解と真理による一致に導かれますようにいのります。どうか聖霊様のお助けを祈りながら考察してください

【贖罪日における大祭司の衣装の変遷】

贖罪日の儀式は神様から直接与えられた贖いの教科書です。終末諸事件の順序を正しく理解するカギは贖罪日の儀式を正しく認識することにかかっています。

イエスはアダムの罪からマリヤの子として誕生されるまで天の大祭司であられた

【大祭司アロンのステップ】

- ST 0 外庭の幔幕（まんまく）の門から入場
- ST 1 旋盤で全身をすすぐ（平祭司の祭服着用）
- ST 2 雄牛を屠る。雄牛の血を携えて・・・
- ST 3 洗盤で手足を洗う
- ST 4 香壇から薫香と香炉を持ち出す
- ST 5 至聖所の贖罪所の東と前に雄牛の血を注いだ
- ST 6 燔祭の雄羊を屠る
- ST 7 洗盤で手足を洗う
- ST 8 聖所に入り大祭司の正装を着用
- ST 9 7つの燭台に油を注ぎ灯火を整えた
- ST 10 金の香壇で香を捧げる
- ST 11 くじで主の為の雄山羊を選出
- ST 12 雄山羊を屠り血を携えて至聖所へ向かう
- ST 13 第2の幕を上げ至聖所に入った
- ST 14 贖罪所の前で両手を挙げて祈りを捧げた
- ST 15 **贖罪所の上と前**に雄山羊の血を注いだ
- ST 16 至聖所から聖所に移行、金の香壇にむかった
- ST17-A 雄牛と雄山羊の血を**金の香壇**の角に塗り祭壇に注いだ
- ST17-B 該当するステップが儀式にはない
- ST 18 アザゼルの山羊にイスラエルの罪を移した
- ST 19 エポデの付いた正装と亜麻布の衣服を脱ぎ全裸になる
- ST 20 洗盤で全身を洗い清める
- ST 21 純白の「他の衣」を着て聖所から出た
- ST 22 夕の燔祭を屠り朝の燔祭と一緒に全焼した
- ST 23 罪祭の雄牛と雄山羊の脂肪を燔祭の祭壇で焼却
- ST 24 罪祭の雄牛と雄山羊の皮と肉と汚物を宿営の外で焼却

【大祭司イエスのステップ】

- イエス誕生（イエスとして誕生される前キリストは天の大祭司であられた）
- ヨルダンでのバプテスマ（公生涯の開始）-----
- カルバリーでの十字架の死（第2の死を体験された）
- 三日後のよみがえり-----
- 聖所の金の香壇から香炉を取り炭火を入れ薫香を焚いた。-----
- ご自身の血の功績を携えて天の至聖所で天父と贖罪契約の批准-----
- 40日間弟子達と交われ彼らを再教育された-----
- 第2昇天 弟子たち他大勢の注視の中白い服のまま天に昇られた-----
- 天の聖所における中保の働き開始（AD31～1844）-----
- ペンテコステの聖霊降下（天のイエスが大祭司に就任された合図）
- AD31年から1844年10月22日までの中保の働きを象徴する
- 1833年ウィリアム・ミラーの再臨運動
- 1844年10月22日前夜** -----
- 1844年10月22日** イエスは天の至聖所に入られた -----
- 「私の血、父よ私の血、私の血」と聖徒の贖いを求められる 安息日の提示
- 天の至聖所における調査審判と**無罪判決の告知**（1844～現在）-----
- やがて裁きは生ける義人に移る。イエスは全聖徒の最後の清めに取りかかる**
- 死せる義人、生ける義人の罪の除去**（一時に） **罪の除去第1段階**
- 恩恵期間終了**（黙8：3～5 大祭司イエスは香炉を地に投げつけた）-----
- サタンに聖徒から除去された罪を移す（罪の記録除去） **罪の除去第2段階**
- 大祭司としての裁きと中保の終了を意味する。7つの災害スタート-----
- 日曜休業令 死の法令発布 **ヤコブの悩み**（犯した罪の記憶を思い出せない）-----
- イエスは窮地にある聖徒の救出に向かうため天の宮廷を出発される。
- イエス・キリストのご再臨
- 生き残っている地上の悪人を火で滅ぼされる **第1の死**-----
- 1000年期後サタン勢力を火で焼き滅ぼす **第2の死 罪の除去第3段階**

大祭司
の衣装



外庭

聖所

至聖所

外庭

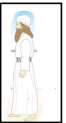
聖所

至聖所

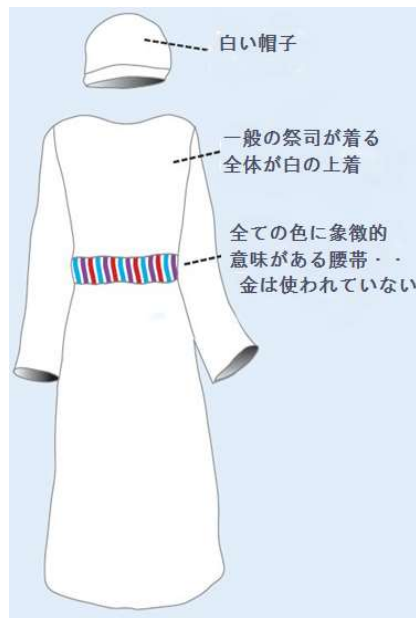
聖所

外庭

宿営外



前ページの表とこのページの表は贖罪日の25行程における大祭司が着用した3種類の衣装の変化を表したものです。



平祭司の祭服

ステップ1~7

レビ16:4 「4 聖なる亜麻布の服を着、亜麻布のももひきをその身にまとい、亜麻布の帯をしめ、亜麻布の帽子をかぶらなければならない。これらは聖なる衣服である。彼は水に身をすすいで、これを着なければならない。」

患難上 p28 「贖罪の象徴的な儀式のときには、祭司長は祭司の服を脱ぎ、一般の祭司の白いリンネルの服を着て務めを行った。」

大祭司の正装

ステップ8~19 聖所 → 至聖所 → 聖所

出エ28:29 「アロンが聖所 (コデッシュ 両室) に入る時は、裁きの胸当にあるイスラエルの子たちの名をその胸に置き、・・・」

初文 p 410~412 「わたしは、1844年の預言的期間が終了した時に、・・・イエスは、立派な衣服を着ておられた。彼の衣服のすその回りには、鈴とざくろ、そしてまた、鈴とざくろがついていた。彼の肩からは、見事な細工を施した胸当がかかっていた。彼が動かれると、これがダイヤモンドのように輝き、胸当に書かれたか、または、刻まれたかと思われる名前のような文字を、浮き上がらせていた。また、主は冠のようなものを頭にかぶっておられた。彼が衣服を完全に整えられた時に、彼は、天使たちにかこまれて、火の車に乗り、第2の幕の中に入って行かれた。」

参照 初文 p 452、

夕の燔祭時の祭服

王の王の純白の衣 (報復の衣)

ステップ20~23 外庭

レビ16:23,24 「そして、アロンは会見の幕屋に入り、聖所に入る時に着た亜麻布の衣服を脱いで、そこに置き、24 聖なる所で水に身をすすぎ、他の衣服を着、出てきて、・・・」

患難上 p28 「大祭司が至聖所の儀式を執り行った後、待っている会衆の前に祭司服を着て現れたように、キリストは、『どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいに』真っ白く輝く衣を着て、ふたたびこられるのである」

贖罪日の儀式において大祭司がその日の式の間中「白いリンネルの服」で式を執り行った、と言う誤解はどこから来たのでしょうか？それは聖書と証の文の読み方が浅いか、偏っているからだと思います。エレン・ホワイト氏の証の書の記述は聖書と同じように真理の宝があちこちに散りばめられており、一つの文章に全部の真理が書かれていることはありません。ことに贖罪日に関する記述についてはそのような傾向が強いようです。たとえば次の一文がそうです。キリストの誕生からご再臨までの、大祭司イエスの地上から天、そしてまた地上に戻られる様を、一文にまとめてある文章があります。この文にはST8～19が抜けています。彼女の引用文に14と18ページの表をもとに (ST〇〇) と大祭司のステップを記入してみましょう。この引用文は①～⑥の大祭司イエスのa歩みを順を追って説明しています。彼女は贖罪日の儀式を熟知していたことがうかがえる一文です。

患難上p28「贖罪の象徴的な儀式（キリストの十字架刑を直接的に象徴している雄牛の血の奉献ST2～5を指す）のときには、祭司長は祭司の服を脱ぎ（ST0 キリストが人の子としてお生まれになられた前は天の大祭司であられたことを考察すると正装であったと思われる）、一般の祭司の白いリンネルの服を着て務めを行った。そこでキリストも①王の衣をお脱ぎになり、（誕生前のイエスは天の大祭司であられた）人間性をまとわれて（ST0～1 誕生～バプテスマ）、②祭司としてのご自身（イエスの公生涯は白い衣のお姿で過ごされ、ラビと呼ばれ祭司としての立場を表された）を、③いけにえとしてささげられた。④大祭司が至聖所の儀式（ST13～16）をとり行ったあと、⑥待っている会衆の前に祭司服を着て現れた（ST20）(⑤17-A～20 金の香壇での血の奉献から大祭司の正装と下服の脱衣と洗盤での全身のすすぎまでが抜けている) ように、キリストは、『どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいに』真白く輝く衣を着て、再び来られる(ST22) ののである（マルコ 9:3）。主はご自分の栄光と父の栄光に包まれておいでになり、すべての天使たちの群れが主のあとにつき従うのである。」

贖罪日の大祭司は天の大祭司であるイエスご自身を象徴しています。天の王であられたお方がマリヤの子として誕生され、地上で「白い平祭司のお姿」で贖罪の業を実際に執り行われたことを上記の引用文は説明しています。そこでは、大祭司が贖罪日の儀式全体で「白いリンネルの服」で儀式を司式したとは聖書も、証の書も記述して

いません。次の引用文は患難上p28の引用文に記されていないステップ8～19（聖所 → 至聖所 → 聖所）までの儀式に関する記述です。そこには大祭司がどんな衣装を着て儀式を執り行ったかも記述されています。

出エ28：29「アロンが聖所（コデッシュ 両室）に入る時は、裁きの胸当にあるイスラエルの子たちの名をその胸に置き、・・・」——正装

初文p410～411「わたしは、1844年の預言的期間（2300夕朝）が終了した時に、天で何が起きたかを示された。イエスが、聖所（the sanctuary）における働き（ST8～12）を終わり、その部屋の戸口（第1の幕）を閉じられた時に、彼の再臨のメッセージを聞いてそれを拒んだ人々の上に、大いなる暗黒がたれこめた。そして、彼らは、主を見失った（1844年10月22日の大失望）。その時、イエスは、立派な衣服（エポデをはおった大祭司の正装）を着ておられた。彼の衣服のすその回りには、鈴とざくろ、そしてまた、鈴とざくろがついていた。」——正装

初文p452、453「イエスが至聖所から歩いてこられる（ST16）と、衣の鈴が鳴るのが聞こえた・・・それからわたしは、イエスが祭司の服をぬいで、王の衣を身につけられる（ST21）のを見た。イエスの頭上には、幾つもの冠がかさなり合っていた。イエスは天使の万軍にとりかこまれて、天を出発された（ST21）」

——正装~真っ白な祭服（報復の衣）

前頁の聖句と証の書と上記の初文p452、453の言葉は明確に、①聖所 ②至聖所 ③聖所の間の大祭司イエスのお姿を描写したものです。大祭司はp13の④の儀式をエポデを羽織った正装で執り行ったことを示してがどのように関わっています。さあステップ8～19までの大祭司の衣装が正装であることを確信して前に進みましょう。18、19、20ページの表は以下のような意味を持っています。

悟らせまいと働いてきました。

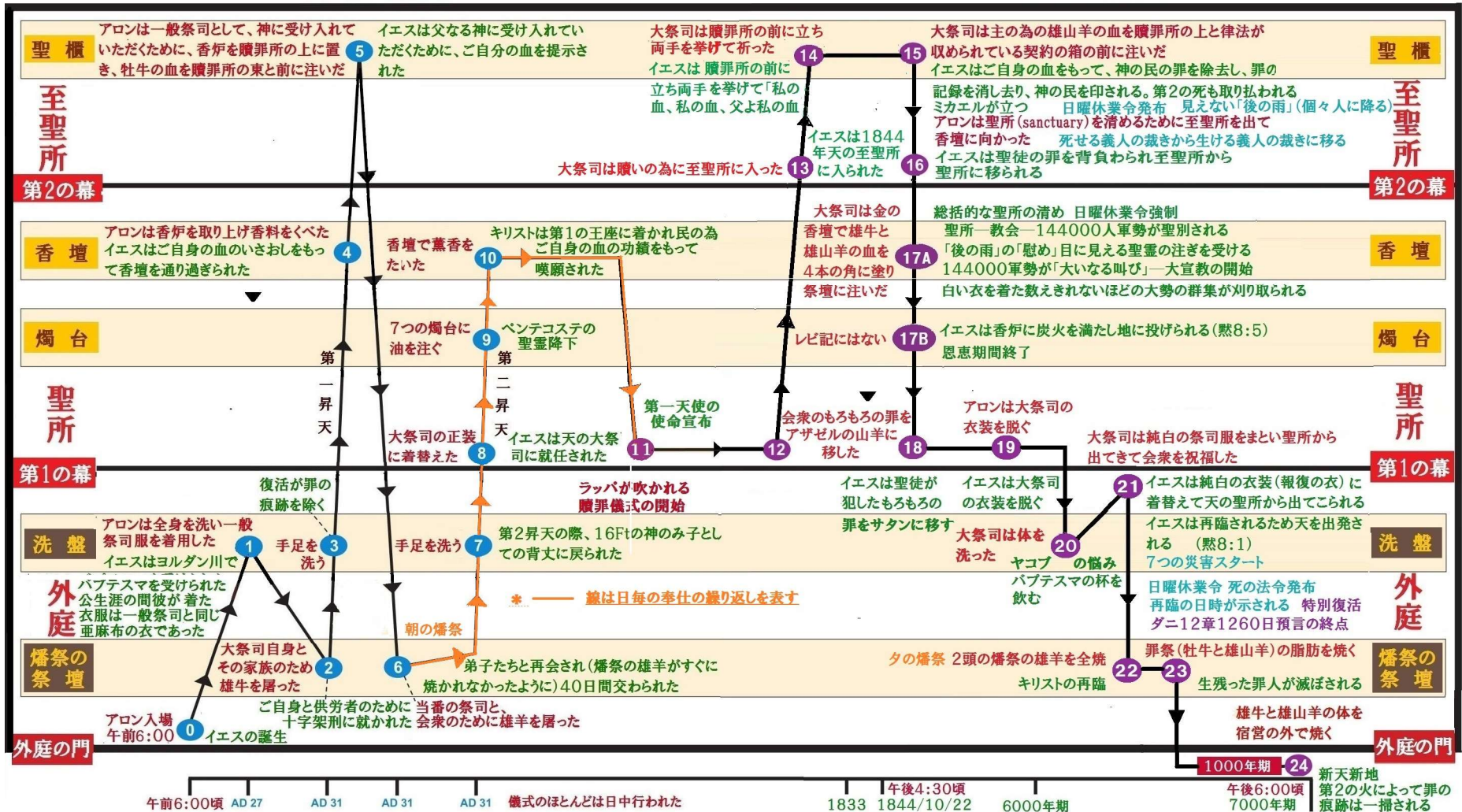
19ページの表「危機と勝利」は金城重弘氏が制作されたイラストを基に「終末諸事件」と「贖罪日の儀式」がどのように関わっているかを表にしたものです。表の最下段のST 0～24は贖罪日の大祭司の行動の変遷のステップを表しています。黙示録の3天使の預言とダニエル書の預言、「2300夕朝預言」と12章の『一時と二時と半時』の未来適用の関わりを確認してください。

ダニ8：14「二千三百日の夕と朝の間である。そして**聖所は清められて**その正しい状態に復する」の聖句がいかにアドベンチストにとって大切な聖句であるかが理解できるでしょう。

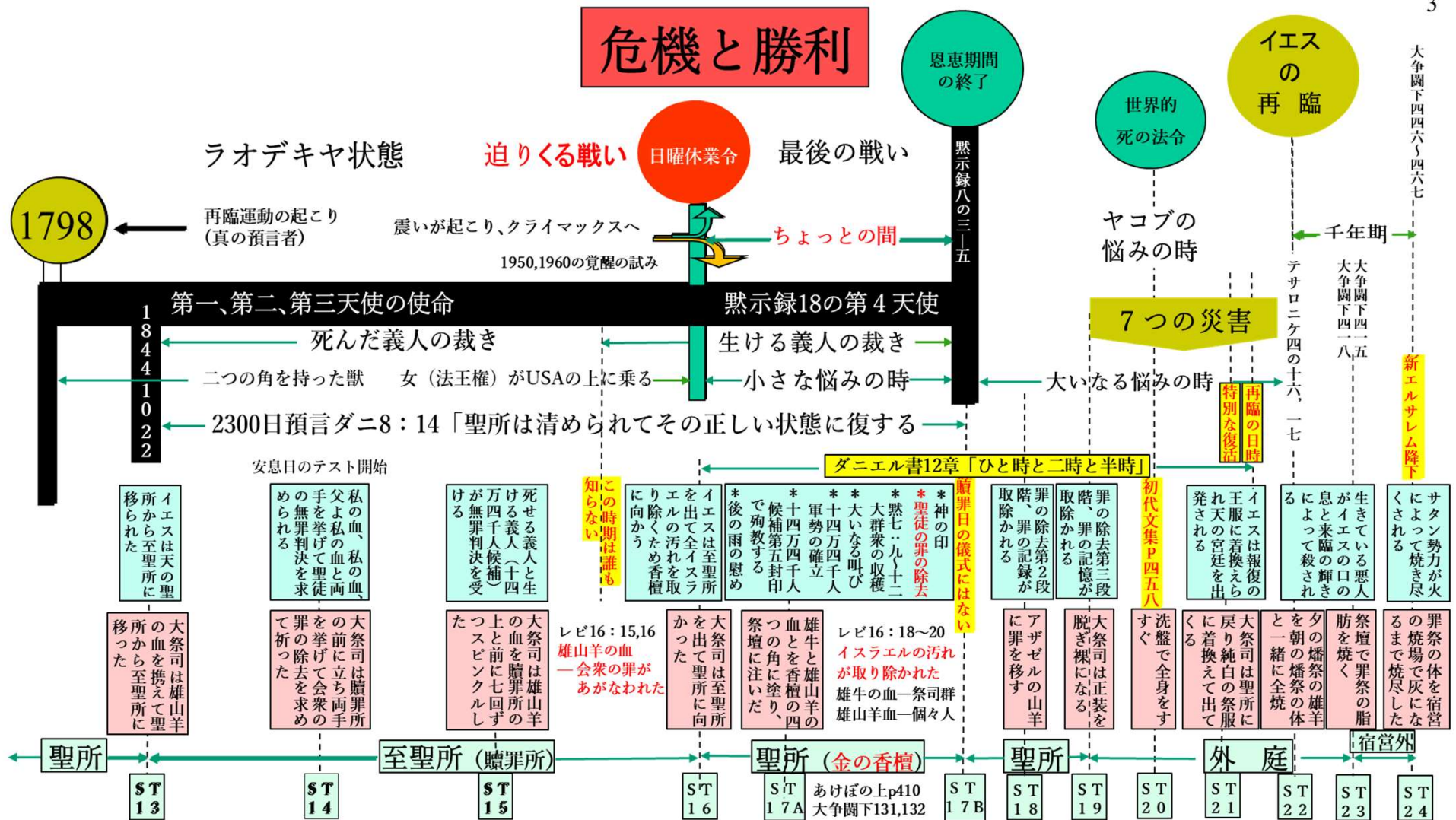
20ページの表「贖罪日の儀式と終末諸事件と品性の改変」も金城重弘氏が制作されたイラストを基に製作しました。ここでは「罪の贖い」「罪の除去」「罪の処理」と贖罪日の儀式の各ステップがどのように関わっているかを確認してください。これらを精査する時、あなたはエレンホワイト氏が、いかに贖罪日の儀式を正確に理解しておられたかを知り驚かれるでしょう。そしてこの表を毎日眺める時、私たちが証の書の大事な引用文をかなり間違っ理解していることに気付かれるでしょう。

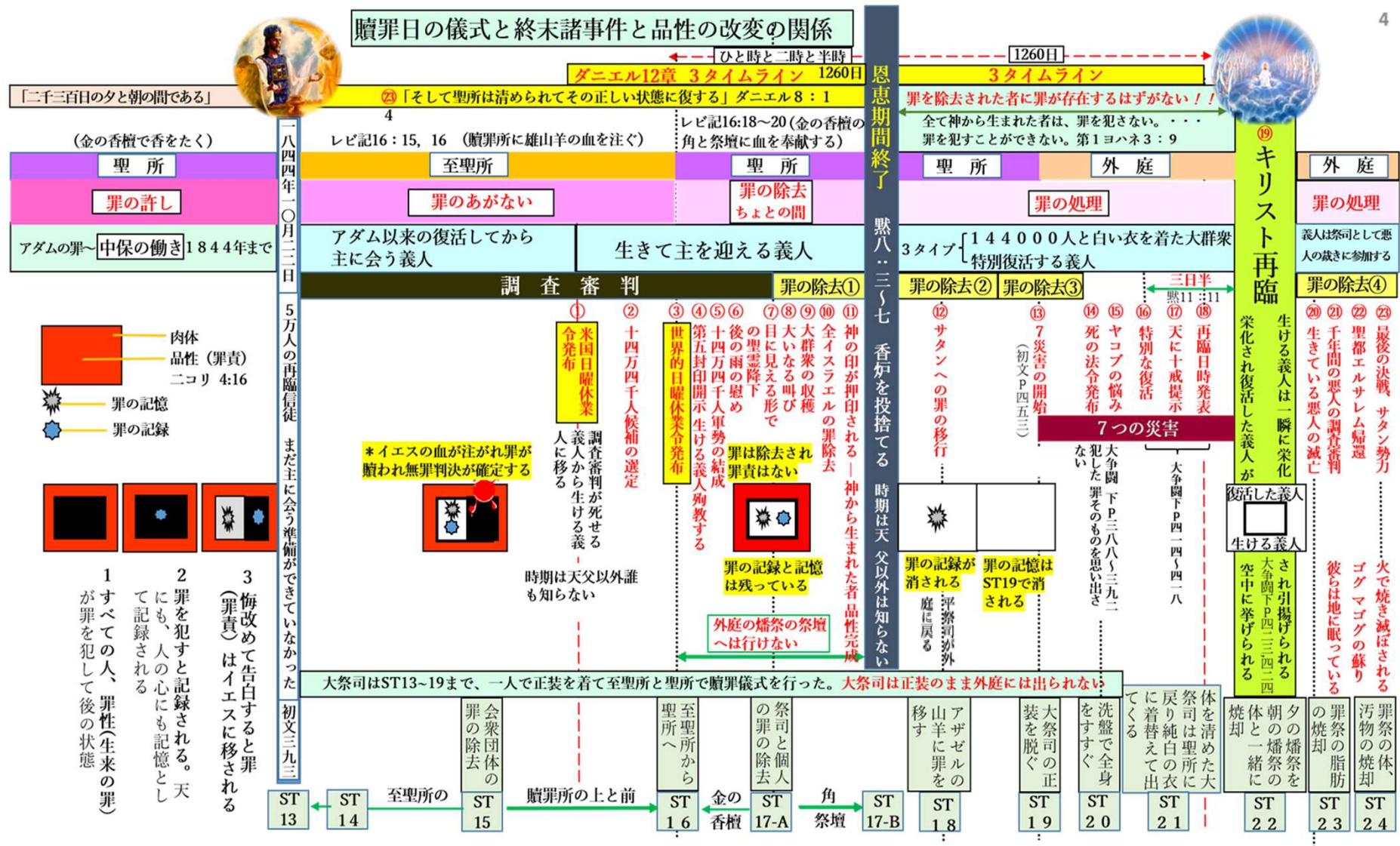
大争闘下P221「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである。」

贖罪日におけるアロンとイエスのみ働き



「贖罪日の儀式と終末諸事件の順序」 危機と勝利

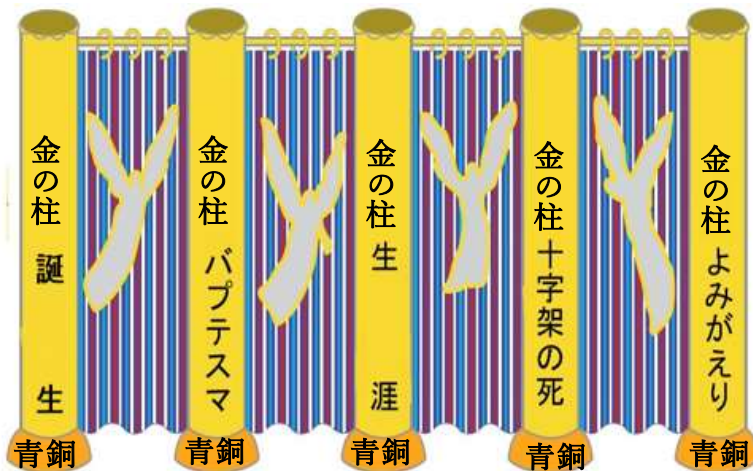




【ST13】大祭司イエスの天の聖所から至聖所への移行

大祭司は主の為の雄山羊を聖所の入り口で屠り、その血が入った器を片手に持ち、もう一方の手に香炉を持って第2の幕に香炉を差し入れ、薫香の煙が至聖所に充満するのを待ちました。それは彼が贖罪所に臨在される父なる神の栄光に打たれて死なないためでした。そこで、大祭司は金糸と銀糸で織り込まれた3人の天使が描かれた、3枚の幕の右端から香炉を差し入れ、香煙が至聖所に充満するのを待って、お尻で第2の幕を押すようにして至聖所に入りました。そして、贖罪所の前までカニのように横歩きをしました。

第1の幕



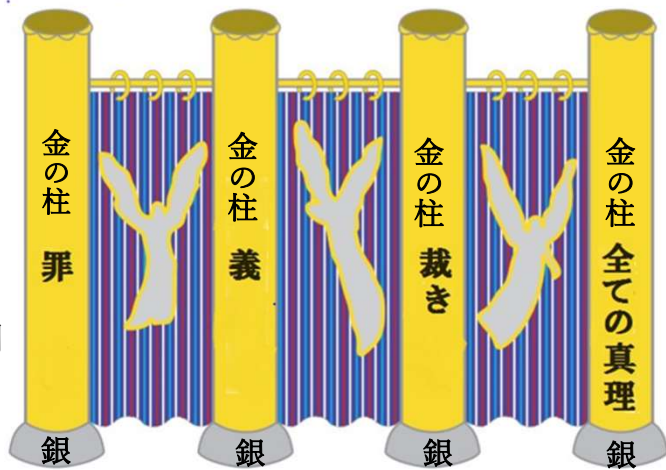
第1の幕の金の柱はキリストの誕生から蘇りまでの地上生涯を預言していた。

金の柱（金はキリストの神性をあらわす）を支えていた土台が青銅で出来ていたのはキリストの地上生涯を表していた。またそれはキリストが地上生涯で採られた人性——神であられたが4000年の罪の歴史によって弱められた——人性を採られたことをも示している。

第2の幕は

- ・キリストの肉体と言う門
- ・罪祭の血が注がれた
—— 命の書と言える
- ・新しい生きた道
—— 永遠の福音への入口
- ・3天使の使命
—— 「神の印」への招待門
- ・ダニ8：14「2,300日預言」
—— 「聖所は清められる」の入口

第2の幕



ヘブル10：20「彼の肉体なる幕を通り、私たちのため開いて下さった新しい生きた道を通して。はいっていくことができるのであり・・・」

1844年10月22日は大祭司イエスキリストが天の聖所から至聖所に移られた日である。この日から2300日預言の「聖所」すなわち罪によって汚された人間そのものが罪なき者に清められる「調査審判と罪の徐去」が始まった。金の柱を支える土台は銀（聖霊を象徴）で作られておりその働きは聖霊に満たされないと確立しない。

レビ16：17「彼が~~聖所~~ (KJV "The Holy Place") 「**両室**」であがないをするために、はいつた時 (ST13) は、**自分と自分の家族とイスラエルの全会衆 とのために** (全イスラエル)、あがないをなし終えて (ST18) 出る (ST21) まで、だれも会見の幕屋の内にはいてはならない」。

この聖句には3つの情報が含まれています。

① 17節は口語訳では「聖所」となっていますが、KJVの訳者は"The Holy Place"と翻訳しています。斜字はその訳に確信がない場合に用います。ここの原語はヘブル語では「コデッシュ」となっており、聖所、至聖所の両室を意味しています。したがって17節の「聖所」は「両室」が正解です。レビ16：18, 19の「主の前の祭壇」、すなわち、聖所第1室での金の香壇での混ぜた血の奉献が済むと、大祭司は全イスラエルから除去された罪をその身に背負い、その罪をアザゼルの山羊に移しました。ステップ18です。その時「定められた人」が外庭に繋がれていたアザゼルの山羊を第1の幕の前に連れてきました。それまで大祭司は17節に「だれも会見の幕屋の内にはいてはならない」と示されているように、大祭司一人で儀式を執り行いました。そうすると、この聖句は大祭司が主の為の雄山羊を屠り (ST12)、その血を器に入れ、第2の幕を開けて入った時 (ST13) から「あがないをなし終えて (ST17-A) 出るまで、介助の平祭司は聖所の中に入ることができなかったことを示しています。すなわち、17節の聖句はST13～18 迄の大祭司の行動をまとめて表しています。

② 「両室」での贖いとは、至聖所の贖罪所に雄山羊の血を奉献したことと、聖所の金の香壇での牡牛と雄山羊の混ぜた血の奉献の両方の儀式を指しています。それは**贖いは至聖所の贖罪所だけでなく、聖所の金の香壇でも行われた**、と示しているのです。

③ 「両室」での贖い (ST13～18) で、その期間中大祭司は一人であがないの作業をしました。会衆が栄光の主の前に立つ大祭司の身の安全を知ることができるように、大祭司の正装の青い上服の裾には金の鈴が縫い付けられました。(出エ39：24～26)

4つの金の柱の間には3つの空間ができます。その間に張られた幕にはそれぞれ銀糸と金糸で天使が織り込まれていました。この3人の天使は「**三天使の使命**」を表していました。さらに4つの金の柱は、銀の座に据(す)えられていました。銀は聖霊を表し、金は天に関する事物を表すので、大祭司もイエスも至聖所に入って奉仕をするためには、この幕を通っていかねばなりません。銀の座は後の雨の象徴です。後の雨は至聖所での働きと結びついて、先の雨が始めた働きを完結させ「後の雨の慰め」に与らせてくださいます。だから銀の台座の上に建てられた4本の金の柱には、「罪」と「義」と「裁き」と「全ての真理」という意味が込められていたのです。

ヨハネ16：8、13 「8それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。」「13けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。…」

日毎の奉仕において祭司と全会衆（個々人ではない）が犯した罪（レビ4：3～21）の許しを得るためには、罪祭を会見の幕屋の入り口で屠り、その血を至聖所の垂れ幕（第2の幕）の前面に振りかけ、垂れ幕の前にある金の香壇の角に塗り祭壇に振りかけることによって、それらの罪を聖所と至聖所に移しました。ある方は垂れ幕自身ではなく、「垂れ幕の前の地面に罪祭の血を注いだ」と教えられていますが、それは至聖所の贖罪所に「東と前」「上と前」に贖罪日に雄牛と雄山羊の血を注いだ場面（ST5とST15）と混同しておられるのでしょうか。たしかに贖罪所での血の奉献の際は、「前」は贖罪所の前面の地面でした。それにはそれなりの理由があるのです。聖所（the sanctuary）に配置されている器具は十字架を形造っています。贖罪所はキリストの十字架の頭の部分を象徴しています。したがって、贖罪所の「上」に注がれた罪祭の血は、イエスが十字架で流され十字架を血で染めたことを象徴しています。十字架にかかれた傷ついたお身体から流れた血は、十字架を血で濡らし、足元の地面に滴り落ちました。大祭司が贖罪所の「前」の地面に注いだ血は、キリストのお身体から流れた血が地面に滴り落ちたことを象徴していました。

贖罪日に、大祭司が至聖所の贖罪所に罪祭の血を注いだのは、日毎の務めにおいて、贖罪所に持ち込まれた祭司や会衆全体の罪（レビ4：3～21）を象徴する血によって至聖所が汚されていたからです。第2の幕は至聖所に属

しています。日毎の務めにおける罪祭の血は第2の幕自身の前面に振りかけられました。「垂れ幕の前」は贖罪所での「前」と同じ地面ではありません。もしそれが第2の幕の前の地面に注いだのであれば、至聖所は罪によって汚されてはいないと言えます。そうすると贖罪日に至聖所に罪祭の血を注ぐ必要はないということになります。しかし贖罪日には罪祭の雄山羊の血は贖罪所に注がれました。それは第2の幕の表面に日毎の罪祭の血が注がれその罪によって至聖所が汚されたからです。第2の幕は贖罪日の儀式の後新しいものと取り替えられました。

「聖所にいますメシア」【英】F.C.ギルバート著 p56「血は幕の表面に振りかけられた。こうして幕は罪の記録を留めることになった。・・・幕は象徴的に記録の書となった。その表面に罪の記録が残されたからである。」

【ST13】大祭司アロンの聖所から至聖所への移行とダニ8：14「2300夕朝預言」との関連

ダニ8：14「二千三百日の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」

アドベンチストはこの日がダニエル8：14「2300夕朝預言」の成就の日と教えられてきました。1844年の再臨信徒はその数が5万人に達しました。彼らは「聖所は清められてその正しい状態に復する」と言う聖句をキリストの再臨と勘違いをして大失望に陥りました。ダニ8：14「2300夕朝預言」は本当に成就したのでしょうか？否、否です。2300日の夕と朝の期間が満了して「そして聖所は清められて、その正しい状態に復する」と言う働きが1844年10月22日から始まったのです。

4つの金の柱の間には3つの空間ができます。その間に張られた幕にはそれぞれ銀糸と金糸で天使が織り込まれていました。この3人の天使は「三天使の使命」を表していました。さらに4つの金の柱は、銀の座に据(す)えられていました。銀は聖霊を表し、金は天に関する事物を表すので、大祭司もイエスも至聖所に入って奉仕をするためには、この幕を通していかねばなりません。銀の座は後の雨の象徴です。後の雨は至聖所での働きと結びついて、先の雨が始めた働きを完結させ「後の雨の慰め」に与らせてくださいます。だから銀の台座の上に建てら

れた4本の金の柱には、「罪」と「義」と「裁き」と「全ての真理」という意味が込められていたのです。

ヨハネ16：8、13 「8それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。」「13けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。…」

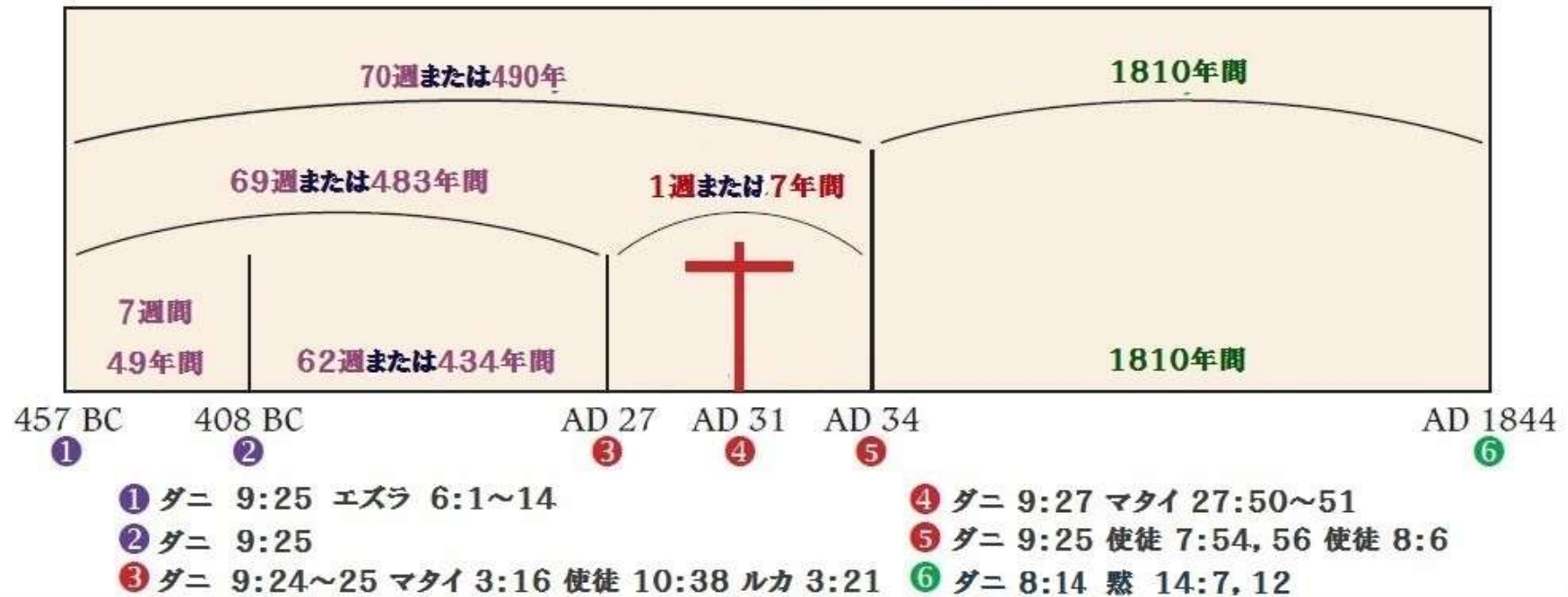
1844年10月22日は「聖所を清める」と、表現された「特別な贖罪の働き」が開始された日時のことです。「聖所を清める」働きの開始、すなわち、贖罪日の儀式の表ST13がその日の開始を告げていました。AD31年以来1844年10月22日までイエスは天の聖所第1室で大祭司として「中保」の働きに従事しておられました。このお方がモーセが教えた贖罪日の儀式が予表していた通りに、1844年10月22日から天の至聖所で最後の贖い、すなわち、調査審判と聖徒の無罪判決の確定（罪の除去ではない）の働きに従事しておられます。

前述したように2300日預言は1844年10月22日に預言の時が成就し「聖所が清められ」る働きが始まりました。

ここに、ダニエルの預言とモーセが天の聖所を見せられて構築した贖罪日の儀式が出会ったのです。1844年の大失望によって5万人の再臨信徒のほとんどは再臨信仰を捨てました。信仰を捨てなかった50数人の「残りの者」に神様は天の至聖所をお示しになりました。彼らはモーセが示した贖罪日の儀式を綿密に調べ、そこに聖所から至聖所に移行した大祭司の働きの学びを通して、天の至聖所におられる愛するイエスを発見したのです。

このようにして、彼らは天の至聖所におけるイエスの働きを地上の贖罪日の儀式を通して理解しました。そして、この学びに神様は預言者エレン・ホワイト氏の幻を加えてその理解に証印を押されました。彼らが今日のセブンスデーアドベンチスト教会の土台を据えたのです。

2300日夕朝の預言チャート



The Sanctuary Cross p109よりコピー

主イエスは178年の間、天の至聖所におられるのです。彼はもっと早く贖罪の働きを終えたかったのです。1888年のミネアポリス総会で、聖霊の助けによってAT・ジョーンズ氏とジョン・ワゴナー氏は贖罪の働きを完結させるきっかけとなるメッセージを発しました。エレン・ホワイト氏も彼らのメッセージを支持しましたが、当時の指導者を始め教会員の多くはそれを受け容れませんでした。

キリストが再臨される最初のチャンスは過ぎ去りました。1888年ミネアポリス総会後のエレン・ホワイトの言葉は次の通りです。

牧師への勧告【英文】 p91～92「この恵みのメッセージを、世に伝えると言う神の目的が遂行されていたなら **キリストはすでにおいでになり**、聖徒たちは神の国に迎え入れられていたことであろう。イスラエルの歴史の中にあるカデシ、バルネア経験と同じく、**神の印に備え**、後の雨を受け、そして大いなる叫びを挙げてキリストのおいでに備えさせるはずであった。これほど重大な事件が歴史上あったであろうか。」

初文p413「イエスが、カルバリーで、『すべてが終った』と叫んで、なくなられた時 (ST2) 神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地上の聖所 (the Sanctuary) の働きが永遠に終わったことを示し、神はもう地上の聖所 (the Sanctuary) において、祭司たちと会って彼らの犠牲をお受けにならないことを示した。その時にイエスの血が流された (ST2) のであって、彼は、天の聖所 (the Sanctuary) において、それをご自身でお捧げになるのであった。地上の聖所の清めのために、祭司が、一年に一度、至聖所に入った (ST13) ように、イエスは、ダニエル8章の2300日の終わり、すなわち、1844年に、天の至聖所にはいり (ST13)、彼の仲保の働き (ST8～12) によって恵みにあずかるすべての者のために**最後の贖い**(ST13～17-A)をなし、こうして、聖所 (the Sanctuary)をお清めになるのであった。」

上記エレン・ホワイトの引用文の「聖所」と翻訳されたところは原文では“the Sanctuary”となっています。“the Sanctuary”は聖所、至聖所の両室を表す英語です。彼女は「**最後の贖い**」が至聖所だけでなく聖所でも行われる、と言っています。地上の贖罪日の儀式では、大祭司は雄山羊の血を贖罪所に注いだ後、至聖所から聖所に戻り、金の香壇で雄牛と雄山羊の混ぜた血を香壇の4つの角に指で塗り、贖罪所に雄山羊の血を注いだように香壇の祭壇に7回血を注ぎました。**罪祭の血が使われる限り贖罪の業は続く**ことを儀式は示しています。

【ST13】再臨信徒5万人と神の選び——50数人の精鋭

ST11が象徴する1833年より始まったウィリアム・ミラー氏による再臨運動は、全米のみならずヨーロッパにも及び、1844年代には各教会を離脱し再臨信徒に加わった者達が約5万人に達しました。当初私は「たっ

た5万人か」と思いました。彼らはその日を待ち望み、長い間家族全員で働き、手に入れた農機具や、牛馬を友人に与え、また収穫直前の作物を隣人に与えました。あきれた隣人や友人に彼らは「それらは天に持ってゆくことができない。差し上げます」と言ったそうです。彼らが「2300夕朝預言」をキリストの再臨と信じて取った彼らの真剣さに感銘を受けます。

私は数年前に田舎に3町歩ほどの土地を手に入れました。耕作放棄地と山林です。坪当たり約500円で購入しました。九州の過疎地の土地価格はこんなものです。私は長年の学びによって、イエスが来られるのは本当に間近いと信じています。預言の時が来たらアドベンチストは世間から疎(うと)んじられ、敵対されると言うエレン・ホワイト氏の勧告も信じています。だから持っているお金を全部つぎ込んで田舎の土地を購入しました。

最近隣接地の所有者から彼の2000坪の土地を買ってくれないかとの相談がありました。130万円が所有者の言い出し価格です。「土地だけでもお買いになったら」と、知人のアドベンチスト教会員に声掛けをしました。その中で比較的まじめな方々で、キリストの再臨は近いと表明しておられる10数人に声をかけて見ました。見に来られた方もおられましたが3年経過しても、一人も買おうと努力する方がいませんでした。乗用車を買う際にはローンを組んででも買うのに、天に連れて行ってくださる神が提供される土地に割くお金はないのでしょうか？。

しかし幸いなことに、令和23年6月に横浜の土屋さんの呼びかけで広島で催された聖書研究会で「贖罪日の儀式と終末諸事件の順序」を学んだ牧野こずえさんと、彼女が出席している頓田集会所のメンバーの岐部さんが共同で八女市黒木町笠原の2000坪の土地を購入して下さいました。

この状況を見た今、私は考えを改めました。1844年当時、慣れ親しんだ教会を離れて再臨信徒に加わった5万人は全世界で「たった5万人か」と思っていました、それは最大限の人数であったと今は思います。

ウィリアム・ミラーを通して与えられた神の呼びかけに呼応した5万人から、最精鋭の50数人が選出されたことは歴史が証明しています。神様が何か重大なことをされる時は召集ラッパが鳴らされ、呼応した者の中から精鋭を選別されます。下記の記録はその実例です。

カナンに使わされた斥候（部族の指導者）	12人	10人は巨人を恐れた ヨシユアとカレブは 信仰を保った 2 人
ギデオンの招集に呼応した者達	32,000人	22,000人が去り10,000人が残りさらにふ るわれて残った 300 人
1,844年の再臨信徒	50,000人	ほとんどはふるわれ、残った者の数は 50数人
近未来の残りの者（14万4千人候補）（生ける義人）	X万人	黙6:9~16 第5封印の殉教者大勢から生 き残るのが 144,000 人軍勢

贖罪日の儀式を詳しく調べますと、今、私たちは「近未来の残りの者」**生ける義人14万4千人候補** X万人が選ばれる直前か、最中に生かされていることが判ります。天の大祭司であられるイエスは1844年10月22日に天の至聖所に入られました。以来、179年間も、贖罪所に雄山羊の血を注いだ儀式が象徴する、ご自身の血の功績を、彼の贖いの約束を信じる者達の一人一人に適用してこられました。現在、**調査審判と罪の除去に至らせる死せる義人の判決が確定中です。イエスが至聖所におられる内に裁きは死せる義人から生ける義人に移ります。**もう移っている、と言う立場を表明される方もおられます。これまで聖書と預言の霊は生ける者への裁きの移行に近いことを訴えていますが、近年のアドベンチストはその聖霊の訴えを退け「食い」「飲み」「建て」「娶り」「嫁ぎ」に忙しく、その訴えに耳を貸そうとしません。

両手が香炉と罪祭の血が入った器で塞がっているのを、大祭司は第2の幕（垂れ幕）を体で押しのけるようにして至聖所に入り、カニの横歩きのように動いて贖罪所の前に立ちました。そして大祭司は香炉と雄山羊の血が入っている器を贖罪所の上に置き（初文p411「ケルビムの間に金の香炉があって」）、贖罪所の前で両手をあげて、父なる神様にイスラエルの祭司と全会衆がこの1年間に犯した罪を取り除いて下さるように祈りました。



2人の美しいケルビムが、翼を高く伸べて立ち、イエスが贖罪所の前に立たれる時、彼の頭上で、翼が触れあった。彼らの顔は、互いに向かい合い、箱を見下ろして、全天使軍が、神の律法に深い関心を抱いていることをあらわしていた。ケルビムの間に金の香炉があって、聖徒たちが信仰をもってささげる祈りが、イエスのところに達し、彼がそれを父なる神の前におささげになった時に、色鮮やかな煙のように香炉から香がたちのぼった。」

【ST 14-A】真の安息日の提示

ハイラム・エドソン



1844年10月22日の深夜が過ぎ去った。5万人の再臨信徒は夜中の12時が過ぎても、まだその希望を捨てきれず澄み切った夜空を見つめていた。しかし、彼らは全身全霊を傾けて待った愛する主イエスの栄光のお姿を目にすることはできなかった。やがて、夜空が白み始め早朝の兆しが見えるころには、彼らの期待は苦い失望に変わっていった。

初文 p 32, 33 「しかし、われわれはここで、預言は1844年10月22日に成就したと固く信じた人々

や、心を開いて、**安息日と聖所の真理**を、自分たちの道を照らす天来の光として受け入れた人々を、ふりかえってみなければならぬ。このような人々は、どこか1か所に集中していたのではなくて、個人または小グループが、米国の中央北部と東北部とにここかしこ点在していた。

このグループの1人、**ハイラム・エドソン**は、ニューヨーク州の中央にあるポート・ギブソンに住んでいた。信徒たちは、1844年10月22日に彼の家に集まって、主の来臨を待った。彼らは、静かに忍耐強くこの大事件を待った。しかし、真夜中がきて、彼らが、期待していた日が過ぎ去ったことを知った時、イエスは彼らが考えていたほど早くは来られないことが、明らかになった。それは、苦い失望の時であった。朝早くハイラム・エドソンと他数名の者は、家畜小屋に行って祈った。そして、彼らが祈った時に、彼は、光が与えられると言う確信を抱いた。

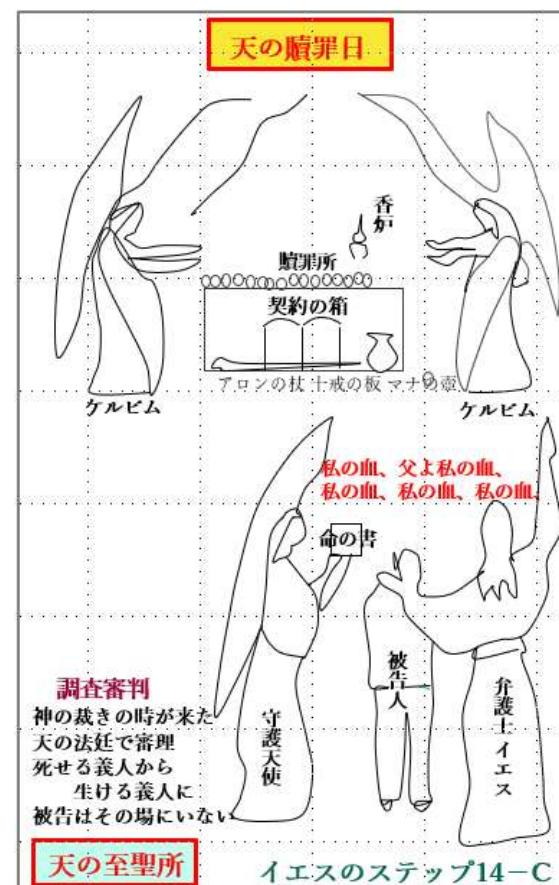
しばらくたってから、エドソンと、彼の友人は、同僚の再臨信徒たちを訪問するために、トウモロコシ畑を横切っていた。すると、手が彼の肩にさわったような感じがした。彼が——まぼろしでも見るかのように——見上げると、天が開かれた。そして、キリストは、彼らが教えていたように、**火でこの世界を清めるために、至聖所から出て来られるのではなくて、天の至聖所に入られたのであって、そこで神の民のための働きを始められたのである、ということを見たのである。**ハイラム・エドソン、医師のF・B・ハーン、学校教師のO・R・L・クロージャーなどの綿密な聖書研究の結果、2300年の終わりに清められる聖所 ([the Sanctuary](#)) というのは、地上ではなくて、天の聖所 ([the Sanctuary](#)) のことで、キリストが、天の至聖所で、我々の罪をとりなしておられるということが、間もなく明らかになった。このキリストの仲保の働きが、第一天使の使命 ([黙示録 14：6、7](#)) の中で叫ばれた「神のさばきの時」に合致するのである。」

初文 p 415～416 「わたしは、残りの民が、イエスに従って至聖所に入り、箱と贖罪所を見てその栄光に魅了されているのを示された（1844年の大失望の後ハイラム・エドソン他が天の至聖所の清めの開始を発見した）。それから、イエスは、箱のふたを持ち上げられた。すると、そこに十誡が書かれた石の板があった。彼らは、その生きたお言葉をたどって行って、第四条が、十の戒めの中で、他の九条よりも明るく光り輝き、その回りに栄光の輪がかかっているのを見て、恐れおのいて後ずさりする。

彼らは、そこに、安息日が廃止されたとか、あるいは週の第一日に変更されたとか言うことを示すものを、何も見ない。戒めは、神が山の上で、いなずまとかみなりの中で、恐るべき崇厳さをもって語られた時のとおりである。それは、神が石の板に、ご自身の指をもって、「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ、七日目はあなたの神、主の安息である」と書かれた時と同じである。

【ST14-C】「私の血、私の血、父よ私の血」 額に印が押されるまで

初文 p 99 「わたしは、地上でなすべき働きを持っていた4人の天使たちが、その働きを成し遂げる途中にあるのを見た。イエスは祭司の衣（priestly garments）をまといおられた。彼は憐れみの情をもって残りの民をごらんになった。それから、両手をあげて、深い憐れみのこもった声で、「わたしの血、父よ、わたしの血、わたしの血、わたしの血！」と叫ばれた。すると、白い大きなみ座に座っておられる神から、非常に輝かしい光がでてきて、イエスのまわり一面を照らすのを、わたしは見た。それから一人一人の罪人が調査され判決が下されるに際して、イエスはご自身が十字架で流された血を父なる神に提示されます。」



そして「わたしの血、父よ、わたしの血、わたしの血、わたしの血！」とイエスが弁護しておられる「被告」（あなたや私）の無罪判決を父なる神に求めて祈りを捧げられます。この大祭司イエスの祈りは、6000年間、この地上歴史に生存した「世の初めから屠られた神の子羊」イエスキリストを贖い主と信じて受け入れた、また受け入れる一人一人の信徒のために捧げられるものです。

【ST15】 大祭司は雄山羊の血を贖罪所に注ぐ（大祭司は正装）

レビ16：15,16「15 また民のための罪祭のやぎをほふり、その血を垂幕の内に携え入り、その血をかの雄牛の血のように、贖罪所の^上と、贖罪所の^前に注ぎ、16 イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所(The Holy Place)のためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならない。」

ST11で大祭司アロンは聖所の入り口で用意された2頭の雄山羊を会衆に提示し、ウリムとトンミムを用い罪祭として「主のための雄山羊」を選出しました。その雄山羊は聖所の入り口でほふられました。（ST12）アロンは屠（ほふ）られた雄山羊の血が入った器と香炉を手にとって、第2の幕のとばりの端から至聖所に香炉を差し入れ、薫香の煙が至聖所に充満するのを待って、幕の内（至聖所）に入りました。（ST13）そしてアロンは贖罪所の上に雄山羊の血が入った器と香炉を置き、両手を挙げて贖罪の祈りを捧げました。（ST14）そして、雄山羊の血を贖罪所の上に7回、契約の箱の前面の地面にも7回スピंकフルしたのです。これがST15における大祭司アロンの至聖所における司式の手順でした。これまで罪の除去は、ST15の雄山羊の血の奉献儀式が象徴する贖罪所への血の注ぎによって完了する、と教えられてきました。しかし、贖罪日の儀式を深く学ぶときそれは考察不足であった、と言わざるを得ません。次に罪の除去に至る4段階のステップを示します。

「罪の除去」に至る4段階

1) 「命の書」にその名が記されます。

どんなに罪深い者であってもイエスキリストが提供して下さっている、十字架で流された血による、罪の許しと贖いを受け容れ、バプテスマを受ける者はすべて「いのちの書」にその名が記されます。

ダニ12：1「1 その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかしその時あなたの民は救われます。すなわちあの書（**命の書**）に名をしるされた者は皆救われます。」

「あの書（**命の書**）に名をしるされた者」とは調査審判を通過して、天に住むものとしてふさわしいと全天が認めた者のことなのです。

大争闘下P211「象徴的儀式においては、告白と悔い改めによって神の前に出て、その 罪が罪祭の血によって **聖所 (the sanctuary)に移された者だけ**が、贖罪の日の儀式にあずかることができた。そのように、最終的な贖罪と調査審判の大いなる日 に、**審査されるのは、神の民と称する人々だけ**である。悪人の審判は、これとは全く別の働きで、もっとあとで行われる。「さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか」（I ペテロ 4：17）

大争闘下P213「すべての人の行為は、神の前で調査され、忠実であったか不忠実であったかが記録されている。天の書物の中の各自の名の向かい側には、恐るべき正確さで、すべての 悪い言葉、利己的な行為、義務の怠慢、隠れた罪、巧妙な偽善行為などが記入されている。天からの警告や譴責(**けんせき**)をなおざりにしたこと、時間を浪費し、機会を活用しなかったこと、善きにつけ悪しきにつけ、及ぼした感化とその広範囲にわたる結果などがみな、記録天使によって記録されている。」

「聖所にいますメシア」 【英】 F.C.ギルバート 著 p 56 「血は幕の表面に振りかけられた。こうして幕は罪の

記録を留めることになった。・・・

やがて天における調査審判は**死せる義人から生ける義人**に移るでしょう。現在進行中の天の至聖所における贖罪の働きは、雄山羊の血が贖罪所に注がれるST15の儀式に象徴されています。その働きが提示されているレビ16：15, 16には「**彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。**」と書かれています。「**あがない**」と言う文言は「**罪の除去**」、とはいささか趣（おもむき）が違います。国語辞典で「贖い」を引いてみました。以下の通りです。

贖い「あがない, あながい」

贖い（あがない）は、賠償の古語で、一般には罪を償（つぐな）う、あるいはそれに相当することを行うことを意味します。旧約聖書において贖いとは・・・どのように使われてきたのでしょうか？

- ① 人手に渡った近親者の財産や土地を買い戻すこと
- ② 身代金を払って奴隷を自由にする事
- ③ 家畜や人間の初子を神に捧げる代わりに、いけにえを捧げる事。犠牲の代償をお金で支払うこと

などの意味を持ちます。これはキリスト教以前のユダヤ教義（タルムード）からの影響を受けた捉え方です。旧約聖書の中で神のことを特に『贖う方』と呼んでいるのは、イスラエルの民を奴隷状態から解放する神の働きを述べたものです。

レビ16：17「彼が聖所(in the holy place = 両室) であがないをするために、はいった時は、自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、**あがないをなし終えて出るまで**、だれも会見の幕屋の内にはない。」

“And there shall be no man in the tabernacle of the congregation when he goeth in **to make an atonement** in the

holy *place*, until he come out, and have made an atonement for himself, and for his household, and for all the congregation of Israel.” (K J V)

2) 調査審判と無罪判決の確定

レビ16：15, 16における「あがないをしなければ」はKJVでは“ And he shall make an atonement for the holy *place*,” となっています。この節の“the holy *place*,”は至聖所のことです。なぜなら15, 16節の儀式は雄山羊の血の奉献儀式で、その血はレビ4：13～21の会衆全体が犯した罪の贖いに用いられました。それはST13～16の至聖所での儀式について述べたものです。

レビ16：17における「あがないをするため」はKJVでは“to make an atonement in the holy *place*”となっています。この節の“the holy *place*,”は至聖所と聖所の両室のことです。なぜなら「自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆（司と個人）とのために、あがないをなし終えて出るまで」となっているからです。「自分と自分の家族」の為の罪祭は雄牛です。ST5で雄牛の血が捧げられましたがそれは祭司群の「罪の除去」の為ではありませんでした。なぜなら、ST5の大祭司の服装は平祭司の白い亜麻布の祭服で、エポデを付けておらず彼には罪を取り除く権能がなかったからです。

それではST5の雄牛の血はいったい何のために奉献されたのでしょうか？それは大祭司と祭司たちが贖罪日の「罪の除去」という神聖な働きに就くための任職の儀式に用いた血であったと言えます。したがって、ST13～16での雄山羊の血は会衆全体が犯した罪は除去しましたが、祭司群と司と個々人の罪はまだ残っていたことになります。

初文p99「それから、両手をあげて、深い憐れみのこもった声で、「わたしの血、父よ、わたしの血、わたしの血、わたしの血！」と叫ばれた。すると、白い大きなみ座に座っておられる神から、非常に輝かしい光がでてきて、イエスのまわり一面を照らすのを、わたしは見た。それから一人一人の罪人が調査され判決が下されるに際して、イエスはご自身が十字架で流された血を父なる神に提示されます。」

では祭司群と司と個々人の罪はどこで除去されたのでしょうか？それはST17-Aの雄牛と雄山羊の混ぜた血によって取り除かれました。すなわちレビ16：17 はST13～16の儀式に加えて聖所の金の香壇での雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式、ST17-Aの儀式について総括的にのべているのです。それは至聖所と、大祭司が至聖所での儀式を終え、そこを退出して聖所の金の香壇での混ぜた血の奉献儀式をとりおこなった —— 両室で行われた儀式について俯瞰的（ふかんてき）に述べています。

「罪の除去」に近い言葉としてはペテロの「自分の**罪をぬぐい去って**いただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、……イエスを、神がつかわして下さるためである」（[使徒行伝 3：19、20](#)）があります。同節の「**罪をぬぐい去って**」はKJVでは、” **may be blotted out**”となっていて、レビ16:16の「**あがないをしなれば**」 “And **he shall make an atonement**”とは明らかに異なっています。

大争闘下 p 140.141 「天の聖所（[the sanctuary](#)）における キリストのとりなしがやむ時（[ST17-B](#)）地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、**仲保者なし**に立たなければならない。（[ST17-B～ST22](#)）彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて **罪から清まって いなければならない**キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの 勝利者（[黙19：8「聖徒たちの正しい行い」](#)）とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が 聖所から除かれている（[are being removed from the sanctuary](#)）**その間に**、地上の神の民の間では、**清めの特別な働き（S T 17-A）**すなわち~~罪の除去~~ 罪を捨て去る働き（[putting away of sin](#)）が行われなければならない」

上記の引用文は「罪の除去」の説明によく用いられますが、「罪の除去」と訳された箇所は”putting away of sin”「**罪を捨て去る働き**」が正しい訳です。それは翻訳の問題だけでなく、本質的に「罪の除去」の働きは天の聖所（[the sanctuary](#)）で行われる働きであって、地上の者はその法廷には出席できません。罪を除去する贖罪日の儀式が象徴する、天の聖所（[the sanctuary](#)）における大祭司イエスの贖罪の働きに呼応して、地上に住む我々には「**罪を捨て去る**」努力、すなわち「身を悩ます」（レビ16：31）ことが求められているのです。

したがって、**レビ16：15, 16**における雄山羊の血の奉獻は「**罪の除去**」ではなく「**罪の贖い**」です。それは従来の「現代の真理」を推奨してきた者達が保持してきた解釈の、ブリンズ・ミード発の「**罪の除去は至聖所の中で完成する**」と言う論点の未熟さを考察し直す必要を提示しています。。

大争闘下P214「**神の律法が、審判の時に人々の品性と生活を吟味する基準である**。賢者は「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」と言っている（伝道の書 12：13、14）。・・・つまり、**死んだ義人は、審判がすみ**「生命を受けるためによみがえ」るにふさわしい者とされるまでは、復活することはない。したがって、彼らの記録が調査され、運命が決定される時に、**彼ら自身はその法廷にはいないのである。**」

大争闘下P215「審判において、**記録の書**が開かれる時に、イエスを信じたすべての人の生涯が神の前で調べられる。われわれの助け主であられるイエスは、**この地上に最初に生存した人々から始めて、各時代の人々のためにとりなし、現在生きている人々で終わられる**。すべての名があげられ、すべての人の事情が詳しく調査される。受け入れられる名もあれば、拒まれる名もある。もしだれかが、罪を悔い改めず、許されないまま、記録の書に残しておくならば、彼らの名は、いのちの書から消されて、彼らの善行の記録も神の覚えの書から消される。**「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう」**と主はモーセに言われた（出エジプト 32：33）。また預言者エゼキエルも言っている。「しかし義人がもしその義をはなれて悪を行い、悪人のなすもろもろの憎むべき事を行うならば、生きるであろうか。彼が行ったもろもろの正しい事は覚えられない」（エゼキエル 18：24）。」

従来、セブンスデーアドベンチストの証の書をよく読み聖所のことを学んだほとんどの者は、贖罪日における、**至聖所の贖罪所で捧げられた雄山羊の血の奉獻儀式 (ST15)** **レビ16：15, 16**は「**罪の除去**」であると思い込んできました。私もその一人でした。私はこの4年間コーキーエバンス氏のThe Sanctuary Crossを日本語訳の本にして

出版しようと努めてきました。その結果、贖罪日の儀式の学びがセブンスデーアドベンチストにとってかけがえない教えであることを理解するに至る機会を与えられました。その学びの中で最も大きな収穫は、「罪の除去」のタイミングに関する新しい視点を、贖罪日の儀式の詳細を示された時に与えられたことです。この機会を与えられたことは感謝であり何もののにも代えがたい思いです。このような奥深い真理をどうして私のような罪深い汚れた者に示されたのか、私自身がいぶかっています。その機会を与えてくださった神様に心からの感謝を捧げます。

3) 調査審判と無罪判決確定、罪の除去はST17-A 金の香壇で行われる

1844年10月22日以降 (ST13~16)、至聖所において行われているのは「調査審判」と「罪の除去」と言うのが従来の認識でした。しかし、贖罪日の儀式を精査した結果、至聖所では「罪の除去」が行われるのではなく「無罪判決」が死せる義人と生ける義人の各人に確定する、と言う結論に達しました。死せる義人と生ける義人の罪が、至聖所において完全に除去されるとすると、以下の事柄に矛盾（むじゅん）が発生します。

- 1) 至聖所で雄山羊の血が贖罪所に捧げられた後、なぜ、さらに聖所第1室の金の香壇で罪祭の血が捧げられたのか？という単純な疑問が起こります。罪祭の血が使われる限り、そこには何らかの罪を「贖い」あるいは「取り除く」対象がいるはずですが。ブリンズンミードが提示した「至聖所で雄山羊の血が贖罪所の上と前に7回つつスピンクルされた時、すべての罪が取り除かれた」と言う主張は検証が不十分だったのです。
- 2) イスラエルは2種類の階級の人々から構成されていました。
 - A 至聖所に臨在された父なる神と一般会衆の間を取り持ち奉仕する祭司群 —— 大祭司とその家族 —— レビ族
 - B 司と会衆個々人 —— ユダ族、ルベン族、アセル族、ナフタリ属、マナセ族、シメオン族、イサカル族、ゼブルン族、ヨセフ族、ベニヤミン族

イスラエル人には、彼らが罪を犯した場合の罪の許しと清めに関する、数々の規定が与えられていました。レビ記4章には罪の許しを得る為の罪祭に関する規定が述べられています。それらは以下の様に分類できます。

A	油注がれた祭司が犯した罪	罪祭の血が垂れ幕と香壇の角に用られた。 聖所と至聖所の両室を汚した	レビ4: 3~12
A,B	合わせて会衆全体が団体で犯した罪	罪祭の血が垂れ幕と香壇の角に用られた。 聖所と至聖所の両室を汚した	レビ 4:13~21
B	司と個々人が犯した罪	罪祭の血が燔祭の祭壇の角に塗られたが、祭司が肉の一切れを聖所で食べその罪を聖所に移した。 聖所を汚した	レビ4:22~35

これらの2種類のイスラエル Aと B が象徴している実体は、死せる義人と生ける義人に分けることができます。現在、天の至聖所では死せる義人の調査審判が行われています。この「死せる義人」もAとBに分けることができます。すなわち、アダム以来の「死せる義人」も同じように祭司群と個々人に分けることができるのです。

やがて近い将来に裁きは「死せる義人」から「生ける義人」に移行します。この「生ける義人」も祭司群と個々人に分けることができます。そうすると「祭司群」に該当する近未来のグループは誰を指すのでしょうか？それは144,000人軍勢（黙7：4～8、雅歌6:10）のことです。

では「司」と「個々人」に該当する近未来のグループは誰を指すのでしょうか？それは「白い衣を着た数えることができないほどの大群衆」（黙 7：9～11）ではないでしょうか？

これまでの学びから贖罪日に金の香壇の角に混ぜた罪祭の血を塗り、香壇の祭壇に混ぜた罪祭の血を7回スピンドルした大祭司の働きの意味は次の様になります。

「A,B合わせて会衆全体が団体が犯した罪」の「あがない」は雄山羊の血が贖罪所の上と前に注がれた時に成立しました（[レビ16：15,16](#)）。しかしまだ、「Aの祭司群とBの司と個々人が犯した罪」が「あがなわれ」ないで残っています。彼らの罪に対する大祭司の働きはレビ16：18, 19に記されています。

4) 罪の除去は主の前の祭壇で行われる

レビ16：18, 19「**18** そして彼は**主の前の祭壇**([聖所の金の香壇](#))のもとに出てきて、これがために、**あがない**をしなければならない、すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取って祭壇の四すみの角につけ、**19** また指をもって七たびその血をその上に注ぎ、**イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない。**」

上記聖句は、**ST5**で贖罪所の東と前に7回注がれた雄牛の血の残り、と、**ST15**で贖罪所の上と前に7回注がれた雄山羊の血の残りを「**主の前の祭壇**」、すなわち、聖所の金の香壇の角に塗り、香壇の祭壇に7回注いだ儀式について述べています。ここで使われた罪祭の血は以下の様に適用されます。

混ぜた血の雄牛の血 —— 祭司群の罪をあがなった —— ①「144,000人」([黙7:3~8](#)) 初穂
—— 生ける義人

混ぜた血の雄山羊の血 —— 司と個人の罪を贖った —— ②「白い衣を着た数えることができないほどの大群衆」([黙7：9~11](#)) —— 生ける義人

レビ16：18, 19の聖句は注意深く読まねばなりません。①「**あがない**をしなければならない」と書いた後、②「**イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし**」そして③「**聖別しなければならない**」と罪の除去に至る順番が

ここに記されています。

(1)の「**あがない**」は15, 16節と同じで「無罪判決の確定」を意味します。

(2)の「**イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし**」この聖句が「**罪の除去**」と言う言葉に最も近い。

(3)の「**聖別しなければならない**」は誰のために！ それは神様と天使たち、そして他世界の人々のためにです。

(1) (2)は「**主に聖なる者**」と言う大祭司の板冠に刻まれたたのと同じ「**神の印**」を額（額には前頭葉があり人の意志を支配します。ここに「神の印」が押されるとその人の全人格はイエスの御姿を映すのです）に押されることを意味します。このようにして罪に陥った人類は、神に似せて作られた罪を犯す前の「完全」に回復されます。この回復の働きを預言しているのが「2300夕朝の預言」です。贖罪日の儀式が象徴している、贖いの奥義のスタート時点を、ダニエルは2300夕朝預言に示しました。

レビ16：15, 16の、大祭司イエスのお働き（ST13～16）は天の至聖所で現在進行中です。至聖所での働きの終盤（ST15）に、裁きは死せる義人から生ける義人に移行します。そして神の定められたスケジュールに従って、大祭司イエスは天の至聖所の裁きの座を立たれます。そして、天の聖所の金の香壇で最後の贖いの業をなされるのです。

恐らくこの**裁きの場の移行**は黙17章の「女が赤い獣に乗る時」、すなわち、ローマ法王至上権No2後期が、プロテスタントアメリカ政権の上に乗る時を示しており、この時から地上の神の民は全世界の人々から憎まれ、迫害されるでしょう。日曜休業令は大祭司イエスが天の**至聖所の裁きの座から立ち上がられ**(ダニエル12:1)、聖所に戻られる合図かも知れません。現在のアメリカ大統領選挙は見ものです。どちらが勝っても背後にはイエズス会がいることを忘れてはいけません。終わりは近いのです。ST17-A～ST17-Bの間に執り行われた、聖所第1室での金の香壇の角に血を塗り、祭壇に混ぜた血をスピंकフルした、混ぜた血の奉献儀式が象徴する期間に終末諸事件がギッシリと詰まっています。

ダニ12：1「1 その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエル（イエス・キリスト）が立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。」

したがって、レビ16：15、16における雄山羊の血の奉獻は「罪の除去」ではなく「罪の贖い」が正しい見解であると思われます。それは従来の解釈のブリンズ・ミード発の「罪の除去は至聖所の中で完成する」と言う論点を考察し直す必要を提示しています。

ST15で大祭司が雄山羊の血を贖罪所に注いだ儀式が象徴する、イエスの天の至聖所での働きが「罪の除去」そのものでないのならいったい何が行われているのでしょうか？この問題を扱った証の書の引用文を提示します。

大争闘下P218「調査審判と罪をぬぐい去る働きは、主の再臨の前に完了しなければならない。死者は、書物に記録されたことによって裁かれるのであるから、彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない。しかし、使徒ペテロは、はっきりと、信者の罪は、『主のみ前から慰め〔原文では refreshing（活気づけ、回復の意）〕の時が』がくる時にぬぐい去られる。そして、「キリストなるイエスを、神がつかわして下さる」と言っています（使徒行伝 3：19参照、20）。調査審判が終わると、キリストは再臨されます。そして、たずさえて来た報いを、それぞれの人の行いにしたがってお与えになるのである。

型としての奉仕において、大祭司は、イスラエルのために贖罪をなし終える (ST17-A) と、外に出て来て、会衆を祝福した (ST21)。そのように、キリストも、仲保者としての働きを終えられると、「罪を負うためではなしに……救いを与える」ために来られて、彼を待っている人々に永遠の生命をお与えになる（ヘブル9：28） (ST22)。祭司が聖所から (from the sanctuary) 罪を除去した時 (ST13～17-A) に、アザゼルの山羊の上にそれを告白した (ST18) ように、キリストは、罪の創始者であり煽（せん）動者であるサタンの上に、これらの罪をすべて置かれるのです。」

贖いの働きは至聖所の贖罪所と聖所の金の香壇の両方で行われることが理解できましたか？。前頁で、エレン・ホワイトは「死者は」「**審判が終わるまでは**」「**罪はぬぐい去られることはできない**」と明言し、死せる義人の罪の除去は、個々人の審判が終わるごとにワンバイワンにその罪が除去されるのではなく、「**彼らが**」、すなわち死せる義人、生ける義人全員の調査審判が終わるまでは、その罪は除去されないと述べています。さらにそのタイミングは『主のみ前から慰め〔原文では refreshing（活気づけ、回復の意）〕の時が』 来るときに彼らの罪は除去される、と駄目押しをしています。

そして大争闘下P218 の「祭司が聖所から（from the sanctuary）罪を除去した時に」と言うフレーズの（ the sanctuary）が示しているのは、至聖所と聖所の両室からイスラエル全員の罪を除去しアザゼルの山羊に罪を移す、と言う意味です。これは贖罪日の儀式（ST13～18）とピッタリ一致しています。エレン・ホワイト氏が贖罪日の儀式を正しく理解していたことが伺える一文です。

【生ける者の裁きへの移行】

大争闘下P224「われわれは、**今、大いなる贖罪の日に生存している**。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間（ST13～17-A）、すべて の者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、**身を悩まさなければならなかった**。もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名が**いのちの書**にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に**身を悩まさなければならない**。われわれは、心を深く忠実に探らなければならない。・・・ 贖罪の働きが終結しようとする時の光景は、実に厳粛である。そこには、実に重大な意義が含まれている。審判は今、天の聖所（the sanctuary）において進行中である。**長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく—— その時がいつかはだれも知らないが —— 生きている人々の番になる**。神のおそばに御前で、われわれの生涯が調査されねばならない」

初文 p 452 「**各人の判決**は生か死かのいずれかにきまっていた。イエスが**聖所** (in the sanctuary 両室ST13~17 A)で奉仕しておられた間に、審判(さばき)は**死せる義人から次に生ける義人へと続けられていた**のである。キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの**罪を消し去り**、み国を受けておられた。み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった。「国と……全天下の国々の権威とは」みなイエスと救いを継ぐ者と共に与えられ、イエスは王の王、主の主として治められることになった。」

初文 p 452の引用文は「**各人の判決**は・・・決まっていた」と述べ、さらに「**罪を消し去り**」と述べています。「各人の判決」決定の後に「罪の除去」が行われるのです。この順番はレビ16:15~19の「贖い」と「汚れを取り除き」とも合っています。エレン・ホワイトは「キリストは、ご自身の民のために贖いをなして (レビ16:15, 16 ST15) 彼らの**罪を消し去り** (レビ16:18, 19 ST17-A)、み国を受けておられた。」と述べ「罪の除去」が完了し「小羊なるキリストの婚姻は終わった。」と恩恵期間が終了する時期をうかがわせる記述となっています。

1) 後の雨の慰めと罪の除去のタイミング

それでは、「**慰め**〔原文では refreshing (活気づけ、回復の意)〕**の時**」とは何であり、いつのことを指しているのでしょうか？

大争闘下P382,383「その働きは、**ペンテコステの日の働きに似ている**。福音の開始にあたって、貴重な種を発芽させるために、聖霊が注がれて「**前の雨**」が与えられたように、その終わりににおいて、収穫を实らせるために、「**後の雨**」が与えられるのである。福音の大いなる働きは、その開始を示した神の力のあらわれより劣るもので終わることはない。・・・福音の開始にあたって秋の雨(**前の雨**)となって成就した預言は、その終局において、春の雨(**後の雨**)となって再び成就するのである。これが、使徒ペテロが待望した「**慰め** (原文では refreshing) 活気づけ、回復の**の時**」である。彼は次のように言った。「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から**慰めの時**がきて、……イエスを、神がつかわして下さるためである」(使徒行伝 3:19, 20)」

大争闘下P141には「地上の神の民の間では清めの特別な働き (S T 17-A) すなわち~~罪の除去~~ 罪を捨て去る働き (putting away of sin) が行われなければならない。」と書いてありますが、日本語訳の「罪の除去」は翻訳ミスと思われます。原文は” putting away of sin”で「罪を捨て去る」が適訳です。結局、そこには「罪の除去」と言う言葉は使われていません。それだけでなく「あがない」は天の至聖所だけでなく、ST17-Aの聖所を含めた両室で行われると書いてあります。その真の意味は、天の至聖所と聖所を通して行われるあがないの働きに呼応して、地上の神の民の間では「身を悩まし」「罪を捨て去る」働きがなされるべきだ、とエレン・ホワイトは述べています。それは「**罪の除去**」は**至聖所だけで行われるのではない**と言うことを明らかにしているのです。

2) 2種類の「後の雨」 エレン・ホワイトは「後の雨」を2種類の働きに分けて提示しています。

- 1) 隣の人に降っていても気付かない「後の雨」これは終末に住む人々の心を聖所に向けさせます。今、その後の雨は 降っています。
- 2) ペンテコステの再来、すなわち目に見える形での聖霊降下が「**慰め**〔原文では refreshing (活気づけ、回復の意)〕**の時**」で近未来に降ります。

全世界各地に存在する**144,000人候補**の多くが、「銀のルツボ (マラキ3:5 ゼカリヤ13:9) になげこまれ」殉教する(黙6:9, 10)でしょう。そして、その中から選り抜かれた「恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」(雅歌6:10) すなわち、**144,000人軍勢**が結成されます。

初文p440「わたしは、武具をまとった人々 (144000人軍勢) が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなくなった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渴くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化を

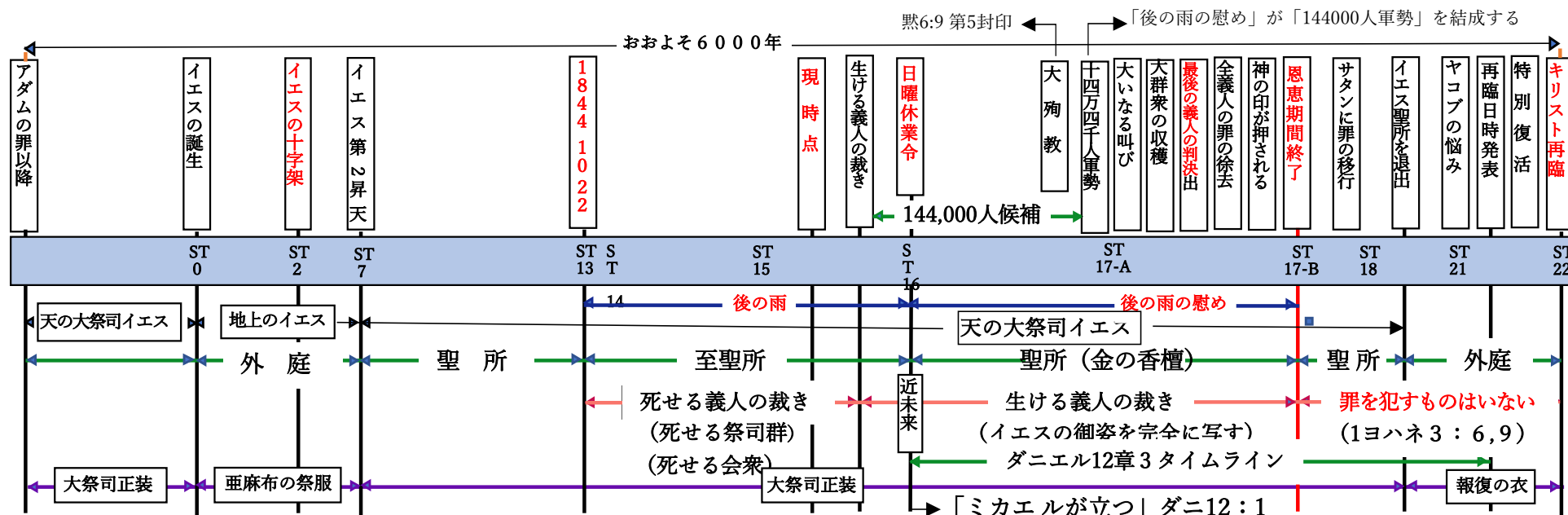
もたらしたのかをたずねた。「それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである」と天使は言った。」

雅歌6：10 「10 このしののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者はだれか」。

黙 6：9 「9 小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。10 彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。

大祭司イエスは、1844年10月22日以来、今日まで天の至聖所で奉仕してこられました。彼の贖い主としての働きを信じたアダム以来の信徒に、2000年前に彼が十字架で流された血を適用され、死せる義人を贖ってこられました。この贖いはやがて生きている者達に移ります。そしてイエスは天の至聖所から聖所に戻られ、金の香壇で最後の総括的な贖いの働きをされるのです。この神秘的な贖いの働きは天の至聖所と聖所の両室で行われてきましたし、これからも行われるのです。生きている者達の調査審判と無罪判決の確定は最後の一人になるまで続けます。そして、無罪判決を受けた死せる義人と、生ける義人全員の罪が一時に除去され、神の印が押され、恩恵期間が閉じられます。このあたりの絡(から)みを次ページの表にまとめました。

終末諸事件と死せる義人と生ける義人の裁きと罪の徐去のタイミング



3) 144,000人候補

生ける義人の調査審判が始まり、審判に合格した者達は144,000人軍勢になるべく選出される者達です。彼らを**144,000人候補**と呼ぶことにします。現代の真理を受け容れた順番に生ける義人の判決が下り始め、144,000人候補が全世界のあちこちに出現するでしょう。そうするとサタンは「**神の戒めを守り、イエスのあかしを持って**」いる「**女の残りの子ら**」に対峙(たいじ)するために出陣します。黙12:17は其のことを預言した聖句です。それからサタンは彼らを迫害することを許されます。神の摂理のもとに彼らは「香壇の下から叫ぶ殉教者」(黙6:9~11)としてたくさんの信徒がサタン勢力に殺害されるでしょう。「そして彼は、**聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され**」(黙13:7)とヨハネは預言しています。この迫害と殉教は神様が是認されることです。

黙6：9~11「9 小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。10 彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。11 すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、『彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように』と言い渡された。」

黙12：17「17 龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。」

黙13：5~7「5 この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、**四十二か月のあいだ活動する**権威が与えられた。6 そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。7 そして彼は、**聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され**、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」

【ST16】大祭司は至聖所から聖所の金の香壇に向かう

1) レビ16:17

レビ16:17「17 彼が~~聖所~~(the holy **place**) **至聖所と聖所の両室**であがないをするために、はいつた時は、自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、あがないをなし終えて出るまで、だれも会見の幕屋の内にはいない。」

Leviticus 16:17 “And there shall be no man in the tabernacle of the congregation when he goeth in to make an atonement in the holy **place**, until he come out, and have made an atonement for himself, and for his

household, and for all the congregation of Israel.” (K J V)

17節は15, 16節の雄山羊の血の奉献儀式と、18, 19節の雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式説明の狭間に位置しており、両儀式をまとめて1節の中で説明しています。文脈上はレビ16:6と14 (ST5) とレビ16:15、16 (ST13,14,15,16) は儀式が繋(つな)がっているように見えますが、贖罪日のアロンとイエスの御働き表をみますと、その間にはST6～ST12の7段階の儀式があることが判ります。しかも14節の雄牛の血を贖罪所の東と前に注いだ儀式ではまだ「自分と自分の家族」の「あがないをなし終えて」はいません。なぜなら、ST5での大祭司は、イスラエル12部族の名が刻まれた宝石が納められている胸当が、縫い付けられたエポデを羽織っておらず、ウリムもトンミムも着けていなかったもので、彼には「自分と自分の家族」の罪を贖う権能が与えられていないことになります。ST5での雄牛の血の奉献は贖罪日の特別な清めの働きをする大祭司としての任職の儀式なのです。

レビ16:3～6「3 アロンが聖所に、はいるには、次のようにしなければならない。すなわち雄の子牛を罪祭のために取り、雄羊を燔祭のために取り、4 聖なる亜麻布の服を着、亜麻布のももひきをその身にまとい、亜麻布の帯をしめ、亜麻布の帽子をかぶらなければならない。これらは聖なる衣服である。彼は水に身をすすいで(ST1)、これを着なければならない。・・・6 そしてアロンは自分のための罪祭の雄牛をささげて (ST2) 自分と自分の家族のために、あがないをしなければならない(ST5)。」

患難上p 28 「贖罪 (しょくざい) の象徴的な儀式のときには、祭司長は祭司の服(正装) (ST1)を脱ぎ、一般の祭司の白いリンネルの服を着て務めを行った。そこでキリストも王の衣(天の大祭司の正装)をお脱ぎになり、人間性をまとわれて(ST0)、祭司としてのご自身(ヨハネから洗礼を受けられた後のイエスはラビと呼ばれた)を、いけにえとしてささげられた(ST2)大祭司が至聖所の儀式をとり行ったあと、待っている会衆の前に祭司服(純白の羊毛で織った祭服)を着て現れたように(ST21)、キリストは、『どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいに』真白く輝く衣を着て、再び来られるのである (ST22) 』」

レビ16：14「14 彼はまた**その雄牛の血**を取り、指をもってこれを贖罪所の東の面に注ぎ、また指をもってその血を贖罪所の前に、七たび注がなければならない。(ST5)」

レビ記16章の「聖所」が意味する場所の特定は、よほど聖所儀式に通じていないと難しいので、K J Vの翻訳者はレビ16：16～20節に用いられている口語訳で「聖所」と訳された部分を”the holy *place*” と”place”を斜字にしました。それは彼らが翻訳の段階でそこに使われている原語からは、**聖所**か、**至聖所**か、**両室**か？が判らなかったのでしょう。花城氏が彼の解説の中で「聖所」を全部「至聖所」にしたのは考察不足です。

17節の「聖所」は口語訳の誤りで「**至聖所と聖所の両室**」が正解です。それは「あがないをなし終えて出るまで、だれも会見の幕屋の内にはならない」という文言が補足証明しています。儀式においては、ST12で主の為の雄山羊がほふられ、その血が入った器が大祭司に渡されますと、大祭司は雄山羊の血が入った器を右手に持ち聖所に入って行きました。大祭司は聖所の中の金の香壇の横に置いてある香炉に炭火を入れ、そして袋に入れた両手一杯の薫香を香炉に入れました。そして、大祭司がエホバの神の栄光に撃たれないために、モクモクと煙の出ている香炉を左手に持ち、その香炉を隔ての幕の右端から差し入れました。薫香の煙が至聖所に充満するのを見届けて、大祭司はカニが横歩きするように契約の箱の前に行き、香炉と血の入った器を贖罪所の上に置きます。

エレンホワイトはその場面の大祭司イエスの御姿を「彼は憐れみの情をもって残りの民をごらんになった。それから、両手をあげて、深い憐れみのこもった声で、**「わたしの血、父よ、わたしの血、わたしの血、わたしの血！」**と叫ばれた。」(初文p 99)と記しました。

このように、大祭司は両手を挙げて贖罪所のはるか上方におられる父なる神に贖罪の祈りを捧げました。この場面がST14です。15節の雄山羊の血は至聖所の贖罪所の上と前に注ぐことによって「イスラエルの全会衆」の罪を贖った、と同節は明記しています。「自分と自分の家族」すなわち、祭司群の罪を贖うことのできる雄牛の血が使われる 6節と14節の場面は大祭司がエポデを羽織っていない平祭司の服装であったので、彼らの罪はまだ「取り除かれて」はいないと考えられます。

上記の説明を念頭に、14節の「雄牛の血」で「贖い」を受けていない祭司群、すなわち「自分と自分の家族」は **いったいどの血で清めるのでしょうか？** 15節の儀式は雄山羊の血ですから祭司群の罪を清めることはできません。

すると「**自分と自分の家族のために**」用いられる「**汚れを取り除く**」血は、聖所の金の香壇で用いられる、雄牛と雄山羊の混ぜた血の、雄牛の血以外には見当たりません。思い出して下さい。**油注がれた祭司が犯した罪（レビ4：3～12）**は、罪祭の血を聖所と至聖所を隔てた垂れ幕の前面に注ぎ、**香壇の角に塗った**ことを・・・ここがこの学びの中心点です。

さあ、至聖所を出られ聖所の金の香壇に向かわれる大祭司イエス様に付いていきましょう。

レビ4：7「7 祭司はまたその血を取り、主の前で会見の幕屋の中にある香ばしい薫香の祭壇の角に、それを塗らなければならない。その子牛の血の残りはことごとく会見の幕屋の入口にある燔祭の祭壇のもとに注がなければならない。」

レビ16:18, 19「18 そして彼は主の前の祭壇のもとに出てきて、これがために、あがないをしなければならない、すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取って祭壇の四すみの角につけ、19 また指をもって七たびその血をその上に注ぎ、イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない。

儀式においてはST12で、主の為の雄山羊がほふられその血が入った器が大祭司に渡されると、大祭司の働きを補助した平祭司は外庭から退出しました。そして、ST17－Aで聖所の金の香壇での混ぜた罪祭の血の奉献儀式が終わった時、補助の平祭司はアザゼルの山羊を聖所の入り口に連れてきました。ST13～17－Aの至聖所から聖所までの儀式は、大祭司が一人で取り仕切りました。大祭司が何かミスを犯せば彼の命は絶たれるので、全イスラエルはこの5行程の儀式の間、固唾（かたず）を飲んで儀式の進行を見守りました。もし大祭司が失敗すれば大祭司が死ぬだけでなく、彼らの1年間の罪が除去されないままになるからでした。

初文 p 410,411「わたしは、1844年の預言的期間が終了した時（1844年10月22日 2300夕朝預言の時が満ち聖所を清める働きが始まった）に、天で何が起きたかを示された。イエスが、聖所（in The Holy Place ST8～12）における働きを終わり、その部屋の戸口を閉じられた時に、彼の再臨のメッセージを聞いてそれを拒んだ人々の上に、大いなる暗黒がたれこめた。そして、彼らは、主を見失った。その時、イエスは、立派な衣服を着ておられた（大祭司としての正装）。彼の衣服のすその回りに は、鈴とぎくろ、そしてまた、鈴とぎくろがついていた。彼の肩からは、見事な細工を施した胸当がかかっていた。彼が動かれると、これがダイヤモンドのように輝き、胸当に書かれたか、または、刻まれたかと思われる名前のような文字（イスラエル12部族の名）を、浮き上がらせていた。また、主は冠（「主に聖なる者」と刻まれた金の板冠）のようなものを頭にかぶっておられた。

彼が衣服を完全に整えられた時に、彼は、天使たちにかこまれて、火の車に乗り、第2の幕の中に入って

行かれた。」（参照 初文p96,）

贖罪日における大祭司は、「至聖所の中では白い祭服で勤めをした」と教える方がおられます。それは明らかに間違いです。白い祭服で務めをしたのは、外庭での働きすなわち、ST8の聖所に入る前のST1～ST7と、ST19の聖所を出てからST19～ST24で行われる務めの間は、白い亜麻布の祭服（[レビ16：4](#)）で務めをしました。前半部のST1～7の務めでは至聖所に入り雄牛の血を贖罪所に注ぐ儀式も含まれています。ここを至聖所の中で「白い祭服」で罪を除去する勤めをすると勘違いされたのかも知れません。第2昇天後の聖所（[ST8](#)）→至聖所（[ST13~16](#)）→聖所（[ST17-A~20](#)）の間は大祭司は正装で儀式を執り行いました。

2) ミカエルが立ち上がる時

ダニ12：1「**1** その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。」

至聖所（[ST13~16](#)）で大祭司イエスが1844年10月22日以来、死せる義人の調査審判と無罪判決の確定を、178年も行ってこられたことはすでに学びました。ごく近い将来、その働きは**生ける義人の調査審判と無罪判決の確定**に移ることは確実です。

大争闘下P224,225「贖罪の働きが終結しようとする時の光景は、実に厳粛である。そこには、実に重大な意義が含まれている。審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。**間もなく—— その時がいつかはだれも知らないが —— 生きている人々の番になる。**神のおそるべき御前で、われわれの生涯が調査されるべきである。今は、他のどんな時にもまさって、すべての者が救い主の勧告に心をとめるべき時なのである。・・・調査審判の働きが終わる時、すべての人（[死せる義人](#)、[生ける義人](#)）の運命は、生か死かに決定されてしまっている。**恩恵期間は、主が天の雲に乗って来られる少し前に 終了する。**」

贖いは天の至聖所と聖所の**両室**を用いて行われています。至聖所だけではありません。ST15での贖罪所の上と前に注いだ雄山羊の血はレビ4：13～21の**会衆全体が犯した罪の除去**に用いられたことが明らかです。するとレビ16：15、16の雄山羊の血は会衆全体が犯した罪にしか適用されないことになります。

では司と個人の罪はどこで除去されたのでしょうか？司と個人の罪は燔祭の祭壇の角に罪祭の血を塗りそこに一旦罪を移した後、**祭司がその肉の一片を食べて聖所に移しました**。したがって、司と個人の罪は金の香壇に捧げられた**雄牛と雄山羊の混ぜた血**の雄山羊の血しか適用できる贖いの血はありません。このようにして**雄牛と雄山羊の混ぜた血**の雄山羊の血が司と個人の罪を除去したのです。

人類のあけぼの上 p419 「血が聖所の中にたずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、『これは……あなたがたが会衆の罪を負(う)……ため、あなたがたに賜った物である』(レビ 10：17)と言ったように、祭司がその肉を食べなければならなかった。これらの儀式は、共に、**悔い改めた者から聖所へと罪が移されることを象徴したものであった**。

こうしたつとめが、1年を通じて毎日行われていた。このようにイスラエルの罪が聖所に移されたので聖所は汚れ、そのため、罪をとり除く特別のつとめが必要となった。❶神は、**祭壇**と同様に **2つの聖所の部屋**についてもあがないをなし、『イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない』とお命じになった(同・16：19)。年に1度、祭司は聖所のきよめのために至聖所にはいった。そこで果たされる つとめが、年ごとのつとめを完了した。」

通常、贖罪日の「罪の除去」の儀式に参加することが出来たのは、前日までに「聖所」に罪を移した者が対象でした。しかし、儀式を詳細に調べますと、贖罪日当日にも罪を犯した者の罪祭を受け入れていたことが判ってきました。前日までだけでなく贖罪日当日にも、まだ罪を告白して聖所に罪を移していない者も、駆け込み的に儀式に参加することができるよう道が開かれていました。

それは、イエス様が至聖所に1844年10月22日に移られた後の、現代に住む私たちも「罪の徐去」に与れる保証なのです。このように贖罪日の儀式は本当に完璧に構成されているのです。神様の知恵と憐れみの集大成が贖罪日の儀式なのです。ですからこの儀式の詳細と意味を知らせまいとサタンは画策してきたのです。

古代の法廷では裁判官は座って判決を下していました。イエス様は近い将来、至聖所での裁きの座から天の聖所の第1室の金の香壇で、最後の「総括的な贖い」をするために聖所に戻られます。それをダニエルは「ミカエルが立ち上がると」(ダニ12:1)と表現しました。178年もの長きにわたって、イエス様は、大祭司として天の至聖所で調査審判と無罪判決の確定を行ってこられました。日曜休業令の発布と共に、世界は、次々に起こってくる終末諸事件の台頭を見てきくと驚くことでしょう。今その兆しを全世界的に見ることが出来ます。

恩恵期間が終了する前に、残りの民は極限までふるわれ、品性の欠陥と言う不純物が取除かれます(マラキ3:3)。中にはその信仰を固く守って殉教する者も出ます(黙6:9~11)。そして、その時の世界はかつて見たこともないほどの規模の災害に見舞われるのです。

【S T17-A】金の香壇における雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式

1) 総括的な贖い

大争闘下P140「この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭(めいりょう)に示されている(黙14:1~5「彼らの口には偽りがなく、彼らは傷の無い者であった」=144000人)この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たち(144000人軍勢)は主の再臨(ST22)を迎える準備ができるのである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」(マラキ3:4)。その時、主が再臨されて(ST22)ご自分のもとに受け入れられる教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」である。(エペソ5:27)。また、その教会は、「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」(144000人軍勢)である(雅歌6:10)。

大争闘下 p 140.141 「天の聖所 (the sanctuary) における キリストのとりなしがやむ時 (ST17-B) 地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。(ST17-B～ST22) 彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて 罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者 (黙19:8「聖徒たちの正しい行い」) とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれている (are being removed from the sanctuary) その間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き (S T17-A) すなわち ~~罪の除去~~ 罪を捨て去る働き (putting away of sin) が行われなければならない。」

上記引用文は「キリストのとりなしがやむ時」と記し、恩恵期間終了間際の「残りの民」を取り巻く状況を描写しています。よく注意して読みますと「キリストのとりなしがやむ時」の前に「天の聖所 (the sanctuary) における」と、あります。それは「とりなし」、すなわち「贖い」は至聖所と聖所の両室で行われると言っています。順序的には、以下のようになります。

レビ16:15, 16 —— 至聖所 —— 贖罪所の上と前 —— 雄山羊の血 —— 会衆全体が犯した罪のとりなし
レビ4:13~21

レビ16:18, 19 —— 聖所 —— 金の香壇の角 —— 雄牛と雄山羊の混ぜた血の雄牛の血
—— 祭司が犯した罪のとりなし レビ4:3~12

金の香壇の祭壇 —— 雄牛と雄山羊の混ぜた血の雄山羊の血
—— 司と個人が犯した罪のとりなし レビ4:22~35

さらにエレン・ホワイトは「主の再臨 (ST22) を迎える準備ができ」る教会は「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」であるとエペソ4:27を提示しています。加えて雅歌6:10を引用して「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」、すなわち、印された144,000人軍勢と、彼らの宣教によりバビロン (あらゆる国民、部族、民族、国語、から導き出された) 数える事の出来ないほどの大群衆が主に受け入れられる教会であると宣言しているのです。

p 56, 57の引用文の大争闘下P140、大争闘下 p 140.141の引用文は、世界総会神学博士ロドリゲス氏によって提唱された「恩恵期間終了後にも人は罪の傾向を持っており、イエスの御姿を完全に写すことは不可能である。それはキリストが再臨され聖徒が栄化される時に成就する。」、と言う新神学の教えを完全に否定しています。彼の神学は日本の多くの牧師や信徒たちに喜んで迎えられました。それは彼らの耳に心地よい響きがしたからです。それは、天の至聖所及び聖所における大祭司イエスの罪の除去の働きに協力して、示された罪を捨て去ることをしたくない人々にとっては福音だからです。

エレン・ホワイトが大争闘下P140 の引用文に、「主の再臨 (ST22) を迎える準備ができ」る教会は「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」であると述べた言葉と、雅歌6：10「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」の両聖句はどちらも印された144,000人軍勢が主に受け入れられる教会であると宣言しているのです。

今、我々の贖い主、主イエスキリストは天の至聖所で、生きている私達罪人の中保者として、ご自身の血のいさおしを適用され贖っておられます。同時に裁判官として死せる義人の調査審判に携わっておられます。命の書に名前の残っている者には無罪判決が下されます。やがてイエスは「ミカエルが立ち上がる」(ダニ12:1) 時が来ますと、調査審判と無罪判決の働きは生ける義人に移行します。「ミカエルが立ち上がる」合図は「日曜休業令の発布」であると思われます。毎日、平穏な生活を日本において享受している我々は時が迫っていることに対しに関心が薄れています。しかし神様の時計は止まることはありません。愛する姉弟姉妹方時は迫っています。目を覚まして聖書と証の書に示された最終時代に住む者達に出された勧告を学び直してください。

2) 罪の除去

「キリストが再臨されるまで、人はイエスの御姿を写した完全な者にはなりえない」と言う、新神学の主張が入り込む隙間（すきま）は大争闘下 p 140,141の引用文にはありません。 「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」であり「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」、すなわち、印された144,000人軍勢の完成は、恩恵期間が閉じられる前に完成します。この引用文は、恩恵期間終了直前の神の民が到達しなければならぬ品性の到達点のことを示しているのです。この働きは「アロンとイエスの御働き」表のST17-A、すなわち聖所第1室の金の香壇での混ぜた雄牛と雄山羊の血の奉獻儀式に該当します。「悔い改めた罪人の罪が 聖所から除かれている (are being removed from the sanctuary) その間に、地上の神の民の間では清めの特別な働き (ST17-A) すなわち~~罪の除去~~ 罪を捨て去る働き (putting away of sin) が行われなければならない。」とエレン・ホワイトは締めくくっています。

「その間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き (S T 17-A)、すなわち罪を捨て去る働き (putting away of sin) が行われなくてはならない。」と言う一文は、残りの民が遭遇するふるいの時、終末諸事件の到来を意味しています。同引用文の日本語の「罪の除去」は誤訳です。「罪の除去」は天の聖所 (the sanctuary両室) で行われることであって、地上の民はその働きに呼応して「罪を捨て去る」、または「罪から離れる」努力が求められているのです。調査審判は個々人が天の特別な清めの働きに呼応して「罪を捨て去った」か？否か？が審理される場です。2020年11月発行のアドベンチストライフのロドリゲス氏の提示は「生来の罪人である人間はキリストが再臨されるまで、イエスの御姿を映す完全には到達できない」、と言う意見を述べられ多くの教会員、特に牧師たちの共感を得ています。それは罪を捨てたくない者達を安心させるメッセージでサタンからのものです。

大争闘下 p 140.141の引用文はその提示を完全に否定しています。ここに神様が人類のみならず全宇宙を罪から解放するために6000年もかけておられる理由があります。贖罪日の儀式の詳細を理解できるようになりま

すと、恩恵期間の終了とキリストのご再臨の間には一定の日時はあるが、それは非常に短期間であることが理解できるようになります。

大争闘下P145「調査の働きが終わり、各時代においてキリストに従う者であると称してきた人々の調査と決定(判決)がなされた時、その時初めて恩恵期間が終わり(ST17-A)、恵みの扉(とびら)が閉じられる。このように、『用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやに入り、そして戸が閉められた』という短い1節の中に、救い主の最後の務めが終わって、人間の救いの大事業が完成される時までが、示されている。]

大争闘下P223「品性の欠陥を通して、サタンはその人の心全体を支配しようと働きかける。彼は、人がこれらの欠陥に固執するならば、自分が成功を収めることを知っている。それだから彼は、欠陥に打ち勝つことは不可能であるという致命的な詭弁(きべん)をもってキリストに従う人を欺こうと、いつもけんめいになっている。しかしイエスは、彼の傷ついた手と砕かれた体をもって、彼らのために嘆願される。そして、彼に従ってくるすべての者に『わたしの恵みはあなたに対して十分である』と宣言されるのである」

恩恵期間が終了しますと天では「11 不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」(黙22:11)。との宣告が下されます。聖所の金の香壇での雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式が象徴する、天の聖所における金の香壇の前に立つ大祭司イエス(ST17-A)の働きは、生ける義人の調査審判と無罪判決の確定、さらに死せる義人と生ける義人の無罪判決が確定した者達の「罪の除去」なのです。罪人であることを自覚している、最後の生ける義人からの「私の罪を取り除いて下さい」と言う祈りが上がりなくなりますと、大祭司イエスは香炉に香の祭壇の炭火を満たし地に投げつけられます。黙8:3~5は恩恵期間終了宣言を描写している聖句です。このようにして、死せる義人と生ける義人の贖いが完了しますと、全員の

罪が除去され、彼らの額には「主に聖なる者」と言う神の印が押されます。そして、人類の恩恵期間は終了します。すなわち、聖徒が印されるのは罪が除去された後なのです。

大争闘下P145の引用文は、贖罪の働きは至聖所だけで行われることではなく、聖所第1室を含めた両室で行われると明言し「調査と決定がなされた時」と判決が罪の除去に先行することを明らかにしています。

「慰めの時がきて、…イエスを、神がつかわして下さるためである」(使徒行伝 3:19、20)と言う聖句があります。同節の「罪をぬぐい去って」はKJVでは” **may be blotted out**”となっていて、レビ16:16の「**あがないをしなれば**」 “And **he shall make an atonement**”とは明らかに異なっています。

大争闘下 p 140.141「天の聖所 (the sanctuary) における キリストのとりなしがやむ時 (ST20T17-B) 地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で仲保者なしに立たなければならない。(ST17-B~ST22) 彼らの着物(行為)は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて 罪から清まって いなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの 勝利者 (黙19:8「聖徒たちの正しい行い」) とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が 聖所から除かれている (are being removed from the sanctuary) その間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き (S T17-A) すなわち ~~罪の除去~~ 罪を捨て去る働き (putting away of sin) が行われなければならない」

上記の引用文は「罪の除去」の説明によく用いられますが、「罪の除去」と訳された箇所は本分では”putting away of sin”となっており「**罪を捨て去る働き**」が正しい訳です。

聖書もエレンホワイトの靈感の書も、私たちの品性は天の聖所 (The Sanctuary) での清めの働きが終了するまでに、「イエスキリストの御品性を写すまでの清め」にあずかっていなければならない、と述べています。私たちが自分の罪深い姿を見、また他人の罪深い言動を見る時「イエスキリストの御品性を写すまでの清め」に到達す

るのは不可能に見えるでしょう。下記聖句は「清め」を約束しています。

ダニ8：14「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」

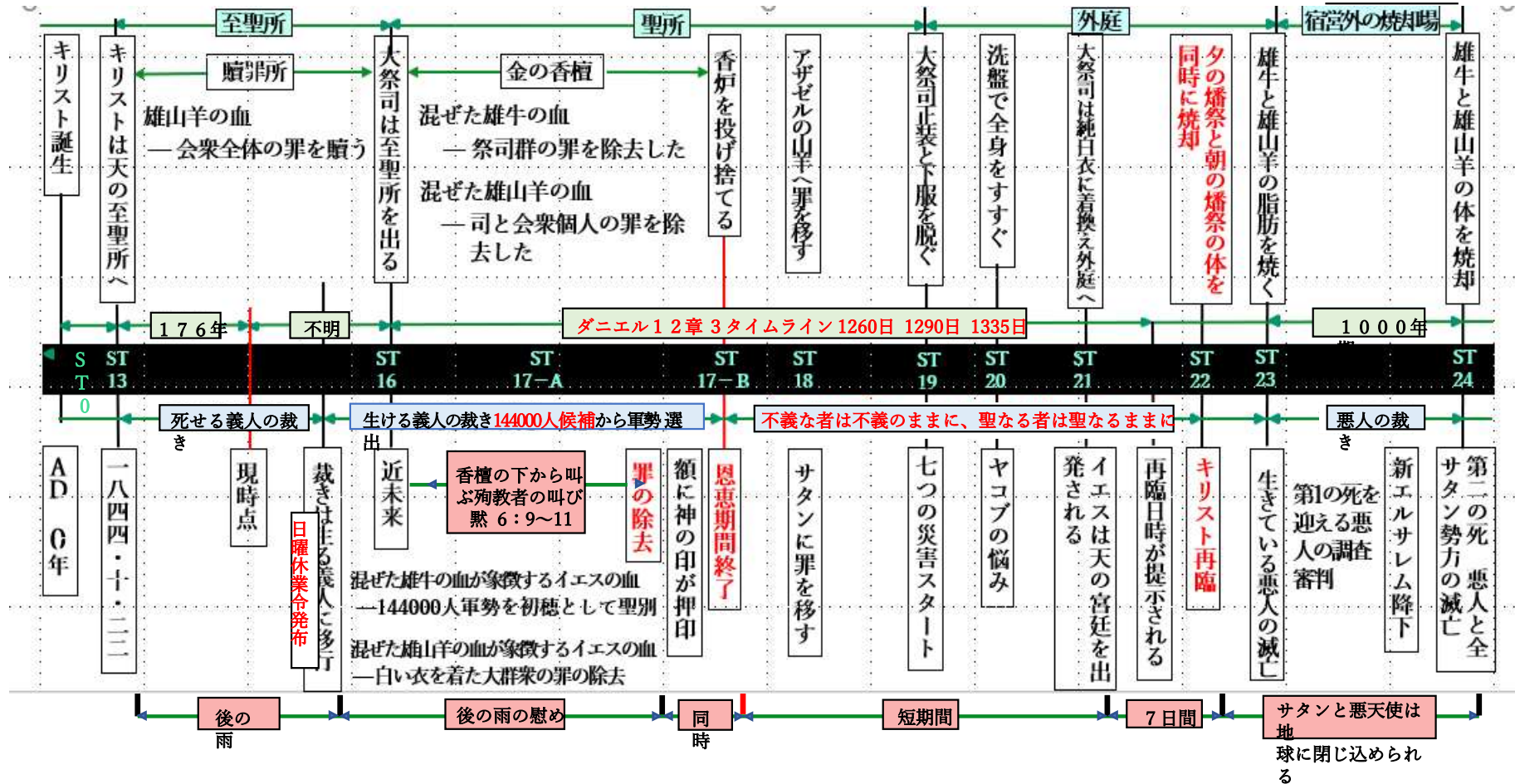
1 ヨハネ3：9, 10 「9すべて神から生れた者(罪の除去に与った者)は、罪を犯さない。神の種 (聖霊降下、後の雨の慰め) が、その人のうちにとどまっているからである。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができない。10 神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。」

ゼカ3：1 ~4「1時に主は大祭司ヨシュアが、主の使の前に立ち・・・これは火の中から取り出した燃えさしではないか・・・3 ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、4 み使は自分の前に立っている者どもに言った、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」。またヨシュアに向かって言った、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」。

これらの聖句はわたしとあなたに対する神様からの約束の言葉です。今、御霊は「彼の汚れた衣を脱がせなさい」と言う神様の御命令によって「罪をすべて捨てなさい」とささやいておられます。

。

3) 贖罪日の儀式と終末諸事件の関連表 ST 13～ST 24



「主に聖なる者」という言葉は大祭司の正装の板冠にも同じ文言が刻まれています。そこに罪が入り込む隙間はありません。近年ジョージ・ナイト発の新神学、「恩恵期間が終了してからも人は罪の傾向を持つ」と言う、ロドリゲス神学博士の教えが教会内に台頭してきました。彼らは「罪人は、罪を犯さなかったイエスの御姿を映す完全には到達し得ない、罪なき完全にさせられるのはイエスが再臨されて体が栄化される時である。」と言います。そんなことがあるのでしょうか？もしそうだとするなら、報復の純白の衣を着て再臨されるイエスに「ちょっと待ってください。私にはまだ罪が残っています。どうか私の罪を取り除くために至聖所に戻ってエポデの付いた正装に着換えてください。」と言うのに等しいのです。それはできない相談です。

彼らの主張の根底には自分と他人と言う罪人を眺めて、やはり罪を捨て去るのは不可能だと言う先入観があります。「義人はいない。一人もない。」（ローマ3：10）とうめきに似た言葉を記したポーロも同じ思いに駆られていました。しかし、彼はイエスキリストに出会い、彼が良く知っていた贖罪日の儀式の犠牲と、大祭司自身がイエスを象徴している事実を悟った時、次のように述べました。

ローマ 8:1~4「1 こういうわけで、**今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない**。2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。3 律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、4 これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。」

ポーロの「**今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない**」と言うこの言葉は約束です。ヨハネもまた同じような約束を残しています。

1ヨハネ3：8~10「8 罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。9 **すべて神から生れた者は、罪を犯さない**。神の種（聖霊）が、その人のうちにとどまっているからである。また、その人は、**神から生れた者**（*罪の除去を

受けた者)であるから、罪を犯すことができない。10 神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。」

だから、ヨハネは「11 不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ」(黙22:11)と宣言する声を恩恵期間終了直後に聴いたのです。

ヨハネの言葉はポーロの言葉より強力に感じます。「神から生まれた者」は「罪を犯さない」と言い、さらに「犯すことが出来ない」と強調しています。それでは「神から生まれた者」とはどんな状態を指しているのか検討してみましょう。

一義的には、イエスキリストを贖い主として受け入れることを表明してバプテスマを受けた時を指します。しかし実際には「罪を犯さない」と言う状態には至らず罪を犯しては悔い改めを繰り返す聖化の段階をさ迷います。

二義的には、ヨハネが罪を「犯すことが出来ない」と、宣言している時点は「罪の除去」に与った後の状態、すなわち、恩恵期間が終了した後の状態を示していると思われます。「特別な清め」と言われた贖罪日の儀式、ST 17-A、すなわち、至聖所から聖所へ移られてから展開する、天での大祭司イエスの働きの結果を示しているのです。それは初代文集p453の「ちょっとの間」と書かれた期間に起こる働きです。

「恩恵期間が終了した後も罪を犯し続ける。」という新神学の教えは、聖書や証の書と矛盾しています。「贖罪日の儀式」は、その教えの矛盾点を明らかにしてくれます。

金の香壇で大祭司イエスは生ける義人の無罪判決を獲得し、アダム以来の死せる義人の無罪が確定した者達の罪と合わせて、全聖徒の罪を一時に除去されます。そして彼らが犯し、告白し、除去された罪を、ST18で大祭司イエスはその身に背負い聖所から身を乗り出されて、アザゼルの山羊に象徴されるサタンに罪を移されるのです。

【レビ16:18, 19の「主の前の祭壇」は「金の香壇」です】

レビ 16:18, 19「18 そして彼は**主の前の祭壇**のもとに出てきて、これがために、あがないをしなければならない、すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取って祭壇の四すみの角につけ、19 また指をもって七たびその血をその上に注ぎ、イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない。】

最近、サンライズの花城氏によって、レビ16:18,19の「主の前の祭壇は外庭の燔祭の祭壇である」という提示がなされています。彼の主張は以下の通りでした。

「主の前」とは必ずしも契約の箱の前にある隔ての幕の前とは限らない。他の場所を指すばあいもある。それを、種々の例を用いて説明していました。その丁寧な説明には敬意を払います。しかし、レビ16:18、19の「主の前の祭壇」は金の香壇以外にはありません。花城氏が主張する「主の前の祭壇」が、外庭の燔祭の祭壇であることの、理由は以下の通りでした。彼の主張に反論を記します。反論は青字とします。

- 1) レビ4：22～35の「司」と「一般の人」の罪祭の奉獻規定では、両者の罪のいけにえとして捧げられた動物の血は燔祭の祭壇の角に塗りました。貧しい人が捧げたハトや雀等の鳥は裂いて燔祭の祭壇の壁に塗りつけました。したがって、**燔祭の祭壇は司と一般の人の罪で汚されたので、贖罪日には、そこを清める必要があった、と、いうものです。**

「レビ記16章の説明の第一（花城氏説教「主の前の祭壇の第1）で、「司」と「一般の人」の罪祭の血は、燔祭の祭壇の角に塗ったので、そこが罪によって汚されているので清める必要があった、と、結論付けています。しかし、それ以前の説明で、彼は、祭司はおのおのが捧げた罪祭の肉の一片を、聖所の聖なる場所で食べて告白された罪を移した（レビ6：24～30）と説明しながら、なぜ贖罪日に燔祭の角に罪の汚れが残っていると、主張するのでしょうか？

。

レビ16:25, 26「**25** 「アロンとその子たちに言いなさい、『罪祭のおきては次のとおりである。罪祭は燔祭をほふる場所で、主の前にほふらなければならない。これはいと聖なる物である。**26** 罪のためにこれをささげる祭司が、これを食べなければならない。すなわち会見の幕屋の庭の聖なる所で、これを食べなければならない。』」

人類のあけぼの上 p419「血が聖所(the Holy Place)の中にたずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、『これは……あなたがたが会衆の罪を負(う)……ため、あなたがたに賜った物である』(レビ 10:17)と言ったように、祭司がその肉を食べ なければならない。これらの儀式は、共に、悔い改めた者から聖所(the sanctuary) へと罪 が移されることを象徴したものであった。

こうしたつとめが、1年を通じて毎日行われていた。このようにイスラエルの罪が聖所(the sanctuary)に移されたので聖所(the Holy Place)は汚れ、そのため、罪を取り除く特別のつとめが必要となった。**①**神は、祭壇と同様に **2つの聖所 (the sacred apartments) の部屋**についてもあがないをなし、『イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない』と お命じになった(同・16:19)。年に1度、祭司は聖所のきよめのために至聖所にはいった。そこで果たされる つとめが、年ごとのつとめを完了した。」

花城氏はエレンホワイトが上記引用文の「祭壇と同様に **2つの聖所の部屋**」の「祭壇」を外の燔祭の祭壇であると言っている、と言う理解です。

①この引用文の「祭壇」には「聖所の」とも「外庭の」とも書かれていません。「神は、祭壇と同様に **2つの聖所の部屋**についてもあがないをなし」だけを取ってみれば、「祭壇」は外庭の燔祭の祭壇である、と錯覚するかも知れません。しかしエレン・ホワイトはそこに(レビ16:19)と記し「祭壇」が香壇であることを暗示しています。

通常「燔祭の祭壇」を指す場合は、必ず「燔祭の」という言葉があります。(レビ4：7,25,30,34,参照)

ない場合は、前の部分で「燔祭の祭壇」という言葉が記されています。(レビ1：10,11,14,15参照)

さらに 19節の「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない。」という言葉は「罪の除去」そのものを意味する文言です。花城氏が主張するように「主の前の祭壇」が「燔祭の祭壇」であるなら、外庭の「燔祭の祭壇」で、罪が除去されることになってしまいます。それは金城重弘氏が長く主張してきたブリNZ・ミード発の「罪の除去は至聖所で完成する」と、言う主張をも破壊することになるでしょう。

「罪の除去」は天の聖所 (the sanctuary両室) で行われることであって、地上で行われることではありません。聖所儀式の規定では、外庭は地上の宗教的行事、すなわち「日毎の務め」を表し、そこで用いられる青銅製の器具は地上の宗教的行事を表しました。我々は天で大祭司イエスが最後の調査審判と罪の除去の働きをしておられる間に「身を悩ませ」「罪を捨て去る」努力をします (参照大争闘下P140,141)。したがって贖罪日の罪の清めには青銅で造られた外庭の燔祭の祭壇で執り行われる儀式は天で行われる「罪の除去」には関係しません。

「その上(祭壇)に注ぎ」を検討してみましょう。相当量の薪がくべられ、炎が出ている燔祭の祭壇の上に手を差し伸べ、血を7回も振り注ぐことが出来るでしょうか？祭壇の角に血を塗る事は可能かもしれませんが、祭壇の上に手を伸べ血を注ぐことは無理でしょう。火傷することが必定です。

1) 贖罪日に用いられる2つの祭壇

次に聖所と外庭に設置された器具の構造から来る「清め」に関する考え方を述べます。罪を贖う、あるいは罪を取り除くために聖所儀式で最も大切な器具は以下の通りです。

外庭の燔祭の祭壇 —— 青銅製 —— 地上で行われる事物を表す。角はあるが飾縁 (crown恵みを保持する)はない。
聖所の金の香壇 —— 金製 —— 天で行われる事物を表す。角と飾縁の両方がある。
至聖所の贖罪所 —— 金製 —— 天で行われる事物を表す。角はなく飾縁がある

贖罪所は人を罪に定める律法が納められている契約の箱の上にあり「恵みの座」と呼ばれています。それは**神の恵みは律法に勝る**と言うことを表しており、飾縁は多くの神の恵み (6000年間に罪をあがなわれる義人たち) がこぼれ落ちないように設置されています。金の香壇の角の働きは、燔祭の祭壇の角の働きと直接的につながっています。角は「勝利」を表す象徴でもあります。贖罪所で施される恵みの業を保持する飾縁は金の香壇でも同じ働きをするのです。「144,000人軍勢」と「数えることが出来ないほどの大群衆」すなわち生きて主を迎える大勢の人々がこぼれ落ちないように設置されているのです。**金の香壇で用いられる雄牛と雄山羊の混ぜた血は、日毎の奉仕において燔祭の祭壇に塗られた血の汚れを取り除く働きをもすることを象徴しています。**ここが大切な「主の前の祭壇」が燔祭の祭壇か？金の香壇かを決定するキーポイントです。

2) 正装の大祭司は外庭へは出られない

もう一つ大切な儀式上の取り決めがあります。大祭司は正装のまま外庭には出て行けません。もし花城氏の主張通りレビ16：18.19の「主の前の祭壇」が外庭の燔祭の祭壇であるなら、大祭司はどのタイミングで燔祭の祭壇に出て行き、雄牛と雄山羊の混ぜた血を燔祭の祭壇の角に塗り、祭壇に振りかけたのでしょうか？彼の意見を尊重すると儀式的順序は以下の通りとなります。ここを正しく理解するには、贖罪日の大祭司が着用した衣装の変遷を把握する必要があります。13ページの「贖罪日の大祭司の衣装」をご覧ください。

(1) レビ16：15, 16の雄羊の血は贖罪所に注がれました。 ST15

(2) レビ16：18, 19の雄牛と雄山羊の混ぜた血は「金の香壇の角と祭壇」で用いられました ST17-A

(3) レビ16：20～22でアザゼルの山羊に全イスラエルの罪を移しました ST18

もし (2) が燔祭の祭壇であるとすれば、大祭司は (3) のアザゼルの山羊に罪を移し正装を脱いで純白の祭服に着換えた後 (ST19以降) でないと、燔祭の祭壇の所には行けません。それではすでにイスラエルの罪は (3) のアザゼルの山羊に移されているので、燔祭の祭壇を清める必要はありません。それだけでなく (2) がST19以降に実行されるとすると、(3) のアザゼルの山羊に罪を移すことが出来ません。なぜなら、まだイスラエルに祭司と司と個々人の罪が残っているからです。

それだけでなく (2) の位置ではまだ (3) の儀式が残っているので正装のまま外庭には出て行けません。

何処から見てもレビ16：18, 19の「主の前の祭壇」は聖所の中の金の香壇のことです。こんなにあやふやな学びをどうしてユーチューブで公開するのか、と金城氏に抗議しましたが返事が頂けません。

沖縄のサンライズ・ミニストリーは、長い間、教団が少しずつ捨ててきた現代の真理を、忠実に守ってきた日本における神の砦であると思っています。金城氏の猛省をうながしたい。

もう一つのエレン・ホワイトの引用文を紹介しましょう。

大争闘下p132「こうした務めが毎日、1年中を通じて行われた (ST6～10) 。① イスラエルの罪がこうして聖所 (the sanctuary 両室)に移され、そして、それを取り除くために特別の務め (ST13～24) が必要であった。そこで、神は、聖所の各部屋 (the sacred apartment 神聖な複数の部屋)のために贖いをするをお命じになった。(A)「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、② 聖所(the holy place)至聖所のためにあがないをしなければならない。 また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある③ 会見の幕屋 (the tabernacle of the congregation) のためにも、そのようにしなければならない。(ST13～16) 」また、

贖罪は、④ 祭壇 (the alter)にも行われるべきで、(B) 「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければなら ない」 (ST17-A) (レビ 16:16、19)。1年に1度、大いなる贖罪の日に、大祭司は聖所 (the sanctuary 両室)を清めるために至聖所に入った。そこで行われた務めによって、1年間の務めが完了した。贖罪の日に、2頭のやぎが幕屋の入り口に連れてこられくじが引かれた (ST11)。「1つのくじは主のため、1つのくじはアザゼルのため」(同 16:8)。⑤主のためのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた (ST12)。そして、大祭司は、その血を幕の中に携えていき (ST13)、贖罪所の上と贖罪所の前に注がなければならなかった (ST15)。⑥ 血は、幕の前の香壇にも注がなければならなかった。(ST17-A) 」

この引用文は贖罪日の儀式の詳細をよく知っていないと正しく理解することは非常に困難です。1段落目は2つの儀式が合体して提示されています。

(A) 引用文はST13～16の雄山羊の血を贖罪所の上と前に注ぐ儀式

——レビ16:16

(B) 引用文はST17-Aの雄牛と雄山羊の混ぜた血を主の前の祭壇 (燔祭の祭壇か?金の香壇?)の角に塗り祭壇に注ぐ儀式

——レビ16:18.19

(A)の② 聖所は (the holy place)の”place”が斜字で書かれています。そこが聖所第1室か2室か判断がつかなかったので、KJVの翻訳者は”the holy place”とplaceを斜字としました。しかし、文脈上は至聖所が正解です。更に②と⑤は同じ儀式を繰り返して記述しています。私たちは、今、天の至聖所で大祭司イエスが「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければなら ない」(レビ 16:16、19) (ST17-A) と、エレンホワイトが勧告している「罪の除去」の時代に住んでいます。裁きが死せる義人から生ける義人に移るのは目前に迫っています。

前頁の引用文中、「聖所」と訳されたところが (the sanctuary) “となっているところは聖所第1室と第2室を表します。したがって①のイスラエルの罪が移されるのは聖所第1室と至聖所第2室の両室であることが判ります。レビ記4章では、日毎に捧げられた罪祭の血の内、油そそがれた祭司が犯した罪と、会衆全体が犯した罪に対しては、至聖所第2室と聖所第1室を隔てた幕に振りかけられ、その罪は至聖所に移され、そこを汚しました。さらにその血は香壇の角に塗られ祭壇にも注がれました。一方、司や一般の個々人が犯した罪のために捧げられた罪祭の血は、燔祭の祭壇の角に塗られ、罪人の罪は燔祭の祭壇の角に移されました。しかし、彼らが捧げた罪祭の肉の一切れずつを祭司が聖なるところ(聖所)で食べて、罪人の罪を聖所に移したのです。こうして、聖所第1室と至聖所は罪によって汚されたので、1年に1度、至聖所と聖所第1室自身と金の香壇を清めたのです。贖罪日には金の香壇の角に雄牛と雄山羊の混ぜた血を塗り、その祭壇に7回混ぜた血を注ぐとによって、油注がれた祭司の罪と、司と一般人の罪を清めました。同時に金の香壇の角に塗られた混ぜた血は燔祭の祭壇をも清める働きをしました。

レビ16：16 —— 雄山羊の血 —— 至聖所の贖罪所の上と前 ——レビ4：13～21
会衆全体の罪 —— 隔ての幕の前と香壇の角に血を塗った

レビ16：19 —— 雄牛と雄山羊の混ぜた血 —— 聖所の金の香壇の角と祭壇 ——レビ4：1～12
祭司の罪 —— 隔ての幕の前と香壇の角に血を塗った ——レビ4：22～35
司と一般人の罪 —— 燔祭の祭壇の角、祭司が罪祭の肉の一切れを食べて罪を聖所に移した

②と⑤は対比しており段落は異なるが同じ儀式を指しています。④祭壇と⑥幕の前の香壇も対比しています。このように、レビ記16章自体が「主の前の祭壇」は聖所第1室の金の香壇であると告げているのです。大争闘下p132の引用文はエレン・ホワイト氏が実によく贖罪日の儀式をマスターしておられたかが判る一文です。⑥の「血は、幕の前の香壇にも注がなければならなかった。」はこの引用文の中で最もはっきりと「主の前の祭壇」は聖所第1室の金の香壇であると告げています。このように聖書と証の書はレビ16:18の「主の前の祭壇」は聖所第1室にある金の香壇であることを証明しています。

2) 罪の除去は一時に行われる

現在「罪の除去」という言葉はアドベンチスト以外のクリスチャンの間では使われていません。「罪の除去」という概念はアドベンチスト教会の原点です。一般のプロテスタント教会の原点は「罪の許し」であって、彼らは「人が犯す罪はキリストが十字架で流された血によって、すべて許されるのだからそれ以上何があるのか？」と言います。

しかしプロテスタントの重鎮であった「信仰による義」を確立したマルチン・ルターは死ぬ間際に「私はイエス・キリストに対する信仰によって義とされる、しかし今でも私は罪人である」と言う、うめきに似た言葉を残しました。もし彼が贖罪日の儀式に込められた「調査審判と罪の除去」が福音であることを学ぶ機会があったら、違った言葉を残したでしょう。「私の罪の全てはイエスキリストが十字架で流して下さった血によって許される。そればかりでなく、天の至聖所におられるイエスが無償の恵みとして与えてくださっている、調査審判と罪の除去の福音によって、アダムが罪を犯す前の状態に戻されるのだ。私はもう罪人ではないのだ！神の救いの計画は偉大である！ハレルヤ！」と言ったに違いありません。

サタンは天の聖所で行われている、罪人をアダムが罪を犯す前の身分に回復する、と言う「罪の除去」の教えと、その教えを導き出し確立する贖罪日の儀式を学ぶ機会を、信徒から奪おうとしてきました。そして、あちらこちらでこの学びが始まりますと、真理に近い誤謬（ごびゅう）を持ち出して再臨信徒を惑わそうとして躍起（やっき）になります。サタンが仕掛けている最大の誤謬（ごびゅう）は「罪の除去」のタイミングにあります。花城氏が主張するレビ16：18.19「主の前の祭壇」が外庭の「燔祭の祭壇」であると言う教えは、サタンが仕掛けている誤謬（ごびゅう）の延長線上にあるのです。

3) 罪の除去のタイミングに関するいくつかの考え方

(1) 罪の除去はイエスが天の至聖所におられる間に完成する。

ST15 サンライズミニストリー 金城重弘

- | | | | |
|--|--------|-----------|--------|
| (2) 罪の除去はイエスがサタンに罪を移される時に完成する | ST18 | ミシガン聖書研究会 | 橋川真理氏 |
| (3) 罪の除去はイエスが再臨され聖徒の体が栄化される時に
完成する | ST22 | 世界総会 | ロドリゲス氏 |
| (4) 罪の除去は1000年期の後サタン勢力と悪人が焼き滅ぼさ
れる時に完成する | ST24 | SOSTVジャパン | 山本不二樹氏 |
| (5) 罪の除去の第一段階はイエスが天の至聖所を出られ、
聖所の金の香壇で完成する | ST17-A | あまつましみず | 鎌田紘一 |

4) 「罪の除去」に関する引用文

大争闘下P140、141 ❶「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった (1844年10月22日の大失望の信徒たち5万人)。まだ、彼ら のためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受け て、天にある神の宮に心を向けねばならなかった (ハイラム・エドソンに天の聖所が示された)。そして彼らが、そこで (ST13~16) 奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていく時に、新しい義務が示されるのであった。もう 1 つの警告と教えの使命 (ST13~24) が、教会 に与えられるのであった。

❷ 預言者は語っている。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁 (あく) のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫 (祭司群=144000人軍勢) を清め、金銀のように彼らを清める。 (ST13~17-A) そして 彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」 (マラキ 3:2,3)。❸ 天の聖所 (the sanctuary 両室) におけるキリストのとりなしがやむ時 (ST17-B) 地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なし (ST17-B~22) たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まって

いなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは 悪との戦いの勝利者とならなければならない。

④ 天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所 (the sanctuary) から除かれているその間 (ST13~17-A) に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち ~~罪の除去~~ (putting away of the sins) 罪を捨て去る働きが行われなければならない。この働きは、黙示録 14章の使命の中にさらに明瞭に示されている。この働き (ST13~17-A) が成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。

「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」 (マラキ 3 : 4) 。その時、主が再臨されて (ST22) ご自分のもとに受け入れられる教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」である。(エペソ 5 : 27) 。また、その教会は、「しのめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者 (144,000人軍勢)」である (雅歌 6 : 10) 。

この引用文は何度も使っています。よく目を凝 (こ) らして読み直してください。この文章は①②③④の4つのセクションに別けて考察するとより深く理解できます。

①は1844年10月22日の大失望は、当時の諸教会から呼び出された5万人の中から再臨信仰を捨てなかった精鋭50数人を選び出しました。神様はウイリアム・ミラーを通して、その遠大なご計画の一部を紹介されました。神様は2300日預言の満ちる日数の解き明かしを彼に示されましたが、その預言の実態 (大祭司イエスの天の至聖所への移行) は御手によって隠されました。それは再臨信徒に再臨への準備を実行する決断の時に導くための神様の深い知恵でした。5万人から選り抜かれた50数人の精鋭は全米の各地に散在していましたが、聖霊なる神様は各自を固く結び合わせておられました。彼らは失意の中にありましたが、熱心に祈り、み言葉の再研究を始めました。ある日、ハイラム・エドソンに天の聖所の幻が与えられました。彼らは聖所の儀式、特に贖罪日の儀式を学び、2300日預言

の満ちた日1844年10月22日はキリストの再臨ではなく、イエスが天の大祭司として、天の至聖所に入られて最後の贖罪の働きを始められたことを知ったのです。(初代文集p33参照)

贖罪日の儀式に**過去と現在と未来**が提示されています。モーセに与えられた贖罪日の儀式全体が、7000年に及ぶ遠大な神様の贖いの計画の全体像を儀式化して示しています。贖罪日の儀式に込められた7000年に及ぶ地上の歴史と預言は**ダニ8：14「二千三百日の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」**と密接に連結しているのです。

それらの真理に、黙示録の各章ががっちりと組み合わされています。黙示録の各章は、天の聖所儀式と地上の神の民の間で起こる諸事件を、預言としてヨハネに示されたものです。1844年10月22日は聖書の3大預言が出会った日なのです。当時の再臨信徒にとって、2300日預言の解き明しが1844年10月22日であり、それがイエス再臨の日である、と言う知らせは**「口には甘いが腹には苦かった」**(黙10：10)のです。

②の**「その来る日」**は天の大祭司イエスが至聖所から聖所に戻られる時を示しています。「アロンとイエスの御働き表」のST17-Aに該当します。恩恵期間終了までを象徴するいにしへの儀式において、金の香壇での雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式が済むと、大祭司はイスラエルが犯した1年間の罪を、その身に負いアザゼルの山羊に移しました。その後、定められた者がアザゼルの山羊を荒野に放逐しました。このように、天の聖所で残りの民の罪の除去に携わっておられる大祭司イエスも、恩恵期間が終了しますと彼が聖徒から除去した罪をアザゼルの山羊が象徴しているサタンに移されます。恩恵期間の終了と共にイエスは仲保者としての働きを放棄されます。

この時**「彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。」**と彼女は明言しています。新神学はこの時点と清めの意味をあやふやにして**「しみもしわもない品性には恩恵期間終了までには到達することは出来ない。それはキリストが再臨されて罪人の体が栄化される時に実現する」**と説いています。このような神学者の言葉に惑わされてはなりません。

証の文で使われている「調査審判」を「再臨前審判」と書き換えさせたサタンの意図はここにあります。「勝利者」すなわち「罪を捨て去る働きを完成させる者」のみが「**罪の除去**」を賜物としてイエス様から頂くのです。その時、仲保者がおられなくても神の民は聖なる神の前に立つことが出来るのです。これは聖書が約束していることであり証の文にも約束されています。

④「悔い改めた罪人の罪が聖所 (the sanctuary) から除かれているその間 (ST13~17-A) に」の「聖所」には、原文では "the sanctuary" が用いられています。"the sanctuary" は聖所第1室と、第2室すなわち至聖所の両室を意味しています。贖いの業の最終局面である「罪の除去」はいにしへの儀式通りに、至聖所だけでなく聖所第1室での働きを加えた両室で行われる、とエレンホワイトは述べているのです。

単純なことですが、聖所儀式において動物の血が使われる時は、罪人の罪の贖いがなされるのです。贖罪日の儀式は、はっきりと、至聖所での贖罪所への雄山羊の血の奉献儀式の後、大祭司は聖所第1室に戻り、金の香壇での混ぜた血の奉献儀式を執り行ったことを示しています。(レビ16:18,19) 更に彼女はエペソ 5:27、雅歌 6:10 を用いて、天での調査審判と罪の除去の働きが「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」を生み出し、その教会は「恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」すなわち**144000人軍勢**によって構成される、と預言しています。

黙10:10、11「**10** わたしは御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった。**11** その時、『あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない』と言う声がした。」

贖罪日の儀式を綿密に研究しますと、イエスが天の至聖所で、大祭司としての贖罪の働きを始められてから、179年も経過していることに気付かされます。ダニエルによって示された、2300日預言の 때가満ちた日、1844年10月22日が、ヨハネに示された「わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった。」日であることは明らかです。ダニエルに示されたその日は、贖罪日の儀式で13番目のステップです。イエスはその

日以来、いにしへの儀式が象徴する（レビ16：15, 16）（ST15）働き「主のための山羊の血を贖罪所に注ぐ」を、ご自身の血をもって、天の至聖所で執り行われてこられました。このようにして、今日まで死せる義人の調査審判と無罪判決の宣告を下す働きをしておられるのです。

『あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない』という言葉は興味深い言葉です。1844年10月22日以来179年の間に世界はものすごいスピードで発展し現在に至っています。アメリカの独立戦争を皮切りに、2回の世界規模の大戦を経験しました。その他、各国で起こった紛争や戦争は枚挙にいとまがありません。「もう一度…預言せねばならない」に対応する儀式は、ST16以降にあてはまります。

5) 大いなる君ミカエルが立ちあがります

ダニ12：1「1 その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。」

「また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。」という言葉と『あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない』（黙10：11）という聖句は連動しています。み言葉は「大いなる君ミカエルが立ちあがります」と言ったのち「かつてなかったほどの悩みの時」が始まると告げています。ヨハネは「口には甘い、腹には苦い」とした預言を述べた後「もう一度・・・預言せねばならない」という命令を示されました。この「預言もまた「口には甘い、腹には苦い」でしょう。そして、黙12章。13章。17章を通して、「7つの頭と10本の角」の預言が示されています。「多くの民族、国民、国語、王たち」に関する預言は、各時代の神の民に敵対してきたサタン勢力と組する王権又は支配勢力を指します。これこそが、ダニエルが述べた「常供」（王権の杓）なのです。サタンは「荒らす憎むべきもの」として各時代の「常供」すなわち「王権の杓」を支配してきました。

以下の引用文は初代文集「印する働き」から引用したものです。幻しのうちにエレンホワイトは大祭司イエスが至聖所の裁きの座から立ち上がろうとしておられる場面に連れて行かれました。

初文p76, 77「わたしは幻の中で、至聖所へ連れて行かれた。そこで、わたしは、イエスがなお、イスラエルのために執り成しておられるのを見た。❶彼の衣のすそには、鈴とざくろがついていた(大祭司正装)。それから、すべての者の運命が、救いかまたは滅びかに決定されるまで、イエスは至聖所から出られないこと、また、❷イエスが至聖所における働きを終了し(ST13~16)、彼の祭司の服を脱いで、報復の衣をまとわれる(ST21)までは、神の怒りが下らないことを、わたしは見た。❸その時イエスは、天父と人間との間から退かれる(ST17-B 恩恵期間終了)。・・・❹ミカエルは立ち上がっておらず、かつてなかったほどの悩みの時はまだ始まっていないことを、わたしは見た。今、国々は怒りつつあるが、❺われわれの大祭司が、聖所(The Sanctuary)における働きを終えられて立ち上がり、報復の衣をまとわれる時(ST21)に、いよいよ最後の7つの災いが注がれるのである。❻4人のみ使いが、聖所(The Sanctuary)におけるイエスの働きが終わるまで、地の四方の風を引き止めており、その後で、7つの災いがくだるのを、わたしは見た。

❶の「彼の衣のすそには、鈴とざくろがついていた」は、大祭司の至聖所の中での服装が正装であることを証明しています。

❷の「すべての者の運命が、救いかまたは滅びかに決定されるまで、イエスは至聖所から出られない」この引用文は、一見「調査審判と無罪判決の決定は至聖所の中で完了する」と言っているように見えます。しかし❺、❻に用いられている「聖所」の原文は“The Sanctuary”となっています。贖罪日における調査審判と無罪判決の確定は贖いの主たる働きです。❺、❻の引用文の情報は至聖所、聖所の両室で行われることを示しています。

6) 黙示録 12, 13, 17章の7つの頭

黙12：2「**3** また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに**七つの頭と十の角**とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた」

黙13：1「**1** わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには**角が十本、頭が七つ**あり、それらの角には**十の冠**があって、頭には神を汚す名がついていた。

黙17：3～6「**3** 御使は、わたしを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの**女が赤い獣に乗っている**のを見た。その獣は神を汚すかざくさの名でおおわれ、また、それに**七つの頭と十の角**とがあった。**4** この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、**5** その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらの母」というのであった。**6** わたしは、**この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た**。この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。」

黙12章の7つの頭は「天でのサタンとキリストとの戦い」を皮切りに、黙17章に「もう一人はまだ来っていない」と預言されている「ローマ法王至上権No2後期」までの、各時代を支配して来た、また支配するであろう支配権力のことです。その時代区分は以下の通りです。現在は第6の頭の支配下にあり、やがてごく近未来に第7の頭に支配権力は移ります。

A) 黙12章の7つの頭

第1の頭——天での戦い、サタン勢力が地上に落とされるまで——「赤い龍」は7つの支配権力の後ろに常に存在するサタンを表す。

第2の頭——創造からノアの洪水まで——カインが代表する「人の子ら」が第2の頭——集団で町に住むことを好んだ。

第3の頭——ノアの洪水からキリスト誕生まで——ニムロデが代表する「人の子ら」による支配——都会に集団で住み「神の子ら」に敵対した。彼らはバベルの塔を建設し神に敵対した。

第4の頭——イエスキリスト誕生から初代教会墮落（AD457）まで——当時の世界を支配したローマ帝国、10本の角はローマ帝国10分裂後の10カ国で現在に御ヨーロッパ諸国の基となった。第4の頭に10本の角は生えているに違いない。

第5の頭——AD538～1778までの当時の世界を1260年間支配したローマ法王至上権No1——黙13：3「その頭の一つが死ぬほどの傷を受けた」
ピウス6世を始めとする7人のローマ法王は全員権力を失った（冠がない）死んだ状態であった。

第6の頭——復権したローマ法王至上権No2前期,現代のローマカトリック——第5頭の7番目の法王レオ13世から黙17：3の「女が赤い獣にのる」時まで——1878～現代～近未来、現アメリカ合衆国は政治、経済、軍事においてローマカトリックの勢力下にある。「女が赤い獣に乗る」時は目前に迫っている。

第7の頭——ローマ法王至上権No2後期 黙17：3の「女が赤い獣に乗る」時から再臨までの支配権力——黙17：10「5人はすでに倒れ」は黙12章の1頭から5頭を指す「一人は今おり」は黙12章の6頭に該当し7頭は近未来に出現する黙17章の「まだ来ていない」ローマ法王至上権No2後期を指す

B) 黙13章の7つの頭 7つの頭には冠がない、冠は10本の角にある

- | | | |
|------|--------|--|
| 第1の頭 | ピウス | 6世 (1775~1799) 1798年ナポレオン軍に捕らわれ翌年に獄中死した。「死ぬほどの傷を負った」獄中死した |
| 第2の頭 | ピウス | 7世 (1800~1823) ナポレオンと激しく対立しイタリアのサボーナに幽閉された。
1814イエズス会復興 |
| 第3の頭 | レオ | 12世 (1823~1829) |
| 第4の頭 | ピウス | 8世 (1829~1830) ナポレオン後の不安定な時代、フランス王ルイ・フィリップ即位、フランス革命勃発 |
| 第5の頭 | グレゴリウス | 16世 (1831~1846) |
| 第6の頭 | ピウス | 9世 (1846~1878) |
| 第7の頭 | レオ | 13世 (1878~1903) 後半から各界に働きかけ法王権の復権に努めた。「その致命的な傷も」(黙13：3)なおり始めた。 |

ピウス6世の捕囚、獄死（1898年）からレオ13世の退位（1903）までの約105年の期間は、ローマ法王至上権No1が1260年間、その時の世界を支配した権力を全て奪われ、死んだ状態に捨て置かれた期間と同じです。それは黙13：3「その（7つの頭）頭の**一つが**、死ぬほどの傷を負ったが」に該当する期間でもあります。さらにこの期間は下記の聖句の期間と同じです。

黙12：15, 16「**15**へびは女の後に水を川のように、口から吐き出して、女をおし流そうとした。しかし、地は女を助けた。すなわち、地(アメリカ合衆国)はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。」

黙12章の聖句の中で「へび」と「龍」はどちらもサタン自身もしくは彼の代理人として働く国家権力集団のことです。ヨハネは「男子を生んだ女」（男子はイエス・キリストもしくは「神の子ら」、「女」はイエスを生んだマリヤ、もしくは「教会」）が「残りの子ら」を産うもうと泣き叫んでいるのを見せられました。1844年が「残りの子ら」が産声を上げた時です。当時の信徒たちは綿密な聖書研究を行い、モーセに示された贖罪日の儀式を研究し、天に聖所があることを発見し、彼らが見失ったイエス・キリストを天の至聖所に見出しました。彼らは 1844年10月22日はキリストの再臨ではなく、大祭司キリストが天の聖所から至聖所に移られた日であり、調査審判罪と罪の除去が開始されたことを理解し、SDA教団を結成しました。

それ以来彼らはエレン・ホワイトを預言者として認め、彼女の勧告に従ってきました。黙12章、13章、17章の7つの頭と10本の角の預言は「天での戦い」から「大淫婦の裁き」までを、12章で全体像を示し、13章で**海獣であるローマ法王至上権No1からNo2前期・後期への移行**を詳述預言しています。加えて**地獣アメリカの台頭**を黙13章で預言し、黙17章の「赤い獣」が何であるかの下地説明をしています。17章では焦点を「まだ来ていない」ローマ法王至上権No2後期に絞り、読者を最後の決戦の場に導いているのです。

「女の子ら」の成長期と「**地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。**」は同時期を表しています。神様は幼年期の教会を守るために、黙示録13章に示された7代のローマ法王の活動を制限されたのです。黙13章は「死ぬほどの傷を負った」ローマ法王権の復権と神の民との戦いを予告したものです。その大半は成就しましたが、最後の決戦はこれからなのです。これらの預言の中心点は3つの章とも、天の大祭司イエスが聖所から至聖所に移行され今日に至っている事実と、近未来に大祭司イエスが至聖所を出られて、聖所の金の香壇での雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式が象徴する、「最後の贖い」すなわち「**罪の除去**」に焦点を当てています。その時の状況を表した各章の預言の言葉は以下の通りです。

黙12：17「**17** 龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。」

まだ「女の残りの子ら」(SDA?)は「**神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者**」には成ってはいません。まだサナギの状態でふ化する前のチョウチョのようです。そればかりかむしろ「イエスの証」を「保たず」捨ててエジプトに戻ろうとしています。サタンは教会員が文字通り「神の戒め」を守り「イエスの証」の勧告に従おうとし始めると「女の残りの子ら」に戦いを挑むために出て行くのです。その日は目前に迫っています。

(現在進行中)

黙13：3～5「**3** その頭の 하나가、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、**4** また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、『だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』。**5** この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、**四十二か月のあいだ活動する権威**が与えられた。」

黙12章「7つの頭」	黙17章「7つの頭」
第1の頭 天での戦い。ルシファーと天使軍の1/3が反逆、地球に落とされた。	①第1の頭
第2の頭 カイン～ノアの洪水までのカインを頭とする「人の子ら」	第2の頭
第3の頭 ノアの洪水～イエス誕生までのニムロデを頭とした「人の子ら」	第3の頭 ③「そのうちの5人はすでに倒れ」
第4の頭 イエス誕生～初代教会墮落AD538まで、ローマ帝国の支配、「10本の角」10か国に分裂	②第4の頭
第5の頭 AD538～1798 ローマ法王至上権No1の支配 1260年間	第5の頭 (ローマ法王至上権No1)
第6の頭 レオ13世(1903)～現代～近未来 ローマ法王至上権No2前期	第6の頭 ④「一人は今おり」ローマ法王至上権No2前期
第7の頭 ローマ法王至上権No2後期	第7の頭 ⑤「もう一人はまだ来ていない」ローマ法王至上権No2後期「 四十二か月のあいだ活動する 」
	第8の頭 ①⑥「昔はいたが今はいない」

1888年のミネアポリスの総会の時に、神の民は一度最後の決戦の場に導かれるはずでした。しかし、神の民の準備が不完全であったので、神は聖徒のために時を伸ばされました。黙13章の龍の第6の頭の「致命的な傷は」ほとんど「治って」います。過去のAD538年～1798年までの1260年間、神の民を迫害し続けた支配権力（ローマ法王至上権No1）と同じ背景を持った第6の頭（ローマ法王至上権No2前期）は完全復活直前です。神の民の準備、**罪を捨て去る働き**が整う時、黙12：17の「龍は、・・・女の残りの子らに・・・対して、戦いをいどむために、出て行った。」が実現するはずでしたが、当時のSDA教団はそのメッセージを受け容れることを拒み、「144,000人軍勢」になるチャンスを失ってしまいました。

C) 黙17章7つの頭 黙17:10「一人は今おり、もう一人はまだ来ていない」

黙17：8～11「8 ①あなたの見た獣は、**昔はいたが**（黙12：4）、**今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである**（黙20:1～3）。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。9 ここに、知恵のある心が必要である。②七つの頭は、**この女**（17：1 大淫婦）のすわっている**七つの山**であり、また、**七人の王**のことである。10 ③そのうちの五人はすでに倒れ、④ひとりは今おり、⑤もうひとり**は、まだきていない。**それが来れば、しばらくの間だけおることになっている。11 ⑥**昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のもの**であるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。」

黙17章7つの頭は12章の7つの頭（冠がある）と同じですが黙17章は「**もう一人はまだ来ていない**」第7の頭に焦点を合わせています。

「**昔はいたが、今はおらず**」の文言が示す条件を満たすのは「天での戦い」を記述した黙12章の7つの時代区分の解析だけです。「5人はすでに倒れ」をバビロンから始まる5代大国や近世のローマ法王に当てはめては①の

「昔はいたが、今はおらず・・・」のみ言葉が示す基準を満たしません。

「底知れぬ所から上って」来る「獣」は黙12の赤い龍すなわちサタンが「昔はいたが」に該当します。「今はおらず」——サタンは今、目に見える存在ではありません。だから⑥で「昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものである」といい12章にない8番目の頭を登場させています。エレンホワイトは最後の大欺瞞としてサタンが「キリストの姿をまね人々の前に姿を現す」と預言しています。

【預言者の時情報と位置情報を探れ！！】

預言の多くは神様から見せられた幻によるものです。その正しい解明に必要な第1要素は、神様が預言者を幻の中でどこに連れて行かれ、どの時点からその幻を見せられたか、と言う、位置情報と時情報を示す聖句を探すことです。第2の要素はその預言の言葉が書かれている文言の条件を満たしているか、否かによって判断すべきです。黙12章におけるヨハネが連れて行かれた場所と時情報は黙12：17～13：1にあります。ここは複雑なので口語訳とインターリニヤビザンチン多数本文ギリシャ語白畑司訳の両方を併記します。

口語訳 黙12：17～13：1「17 龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、①神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。18 そして、②（龍は）海の砂の上に立った。13:1 わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。③それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、④頭には神を汚す名がついていた。」

インターリニヤビザンチン多数本文ギリシャ語（白畑司訳）黙12：17～13：1「17すると、竜はその女に向かっていきりたち、彼女の子孫の残りの者、すなわち、①神の戒めを守り、イエスの証言を保っている人々に対して戦いをしようとして出て行った。18なし（ネストレ27版「そして、彼は海の砂の上に立た。」13：1 そして、② 私は海の砂の上に立った。また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。③それは十本の角と七つの頭を

持っており、それらの角の上には十個の王冠を乗せており④それらの頭の上には数々の神を冒瀆する名があった。」

聖書は幾つもの言語に訳されているばかりでなく、同じ言語でも数種類の訳があります。日本語訳でも口語訳、新共同訳、新改訳、リビングバイブル、現代訳、等々があります。同様に、新約聖書はギリシャ語で書かれていますが、それにも数種の版があります。中でも、ビザンチン多数本文を底本としたものが最も正確であると言われています。

今回はインターリニヤビザンチン多数本文ギリシャ語（白畑司訳）（以下ギリシャ語訳とする）を口語訳と比較して、ヨハネが幻の中で連れて行かれた位置情報と時情報を探ってみましょう。

①の「神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。」の「出て行った。」が黙12章におけるヨハネが連れて行かれた時代の時情報です。そしてこの時情報は黙13章の「42か月」、17章の「もう一人はまだ来ていない」と同じ時点を示しています。それでは「龍が・・・出て行った」と過去形で書かれた時点は文字通り過去なののでしょうか？いやそうではありません。ここが預言解析の面白さです。ヨハネは近未来のある時点に連れて行かれて、龍が「神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている」者、すなわち「女の残りの子ら」に対して「怒りを発し」（「いきり立ち」ギリシャ語訳）て、出て行く時点から12章を書きました。12章冒頭の記述は、頭に「12の星の冠を被った女」が、子を産もうとして泣き叫んでいる場面です。女（残りの教会）が産もうとして苦しんでいるのは「女の残りの子ら」すなわち144,000人軍勢なのです。

イエスは弟子たちの談話の中で「すべてこれらは産みの苦しみの初めである」（マタイ24:8）と言われました。「女」の12の星の冠は144,000人軍勢のルーツを表すイスラエル12部族を表しています。彼は天地創造前の天での戦いから始まっている7時代区分の近未来の「龍が・・・出て行った」と言う神の民とサタン勢力の最後の決戦の

時点に連れて行かれ、6000年に渡る戦いの全体像を見せられました。

黙12：17は近未来の事件の預言です。口語訳では「女の残りの子ら」は「**神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている**」のです。ギリシャ語訳では「**神の戒めを守り、イエスの証言を保っている人々**」となっており、口語訳の「あかしを持っている」よりもより意味が鮮明です。近い将来に我々は「**竜が・・・いきり立つ**」のを目の当たりにするでしょう。さて、ヨハネが幻の内に連れて行かれた時情報は理解できたでしょうか・・・それでは次にヨハネが幻のうちに連れて行かれた位置情報を探ってみましょう。

口語訳 「17龍は・・・出て行った18そして、②（龍は）**海の砂の上に立った**。13:1 わたし（ヨハネ）はまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。」 「18(なし)」

ギリシャ語訳 ネストレ27版「そして、**彼**（文脈からは龍すなわちサタン）**は海の砂の上に立た**。」）
多数本文13：1「そして、②**私**（ヨハネ）**は海の砂の上に立った**。

口語訳とギリシャ語訳多数本文では意味が真逆になっています。ネストレ27版は口語訳と同じです。
「**海の砂の上に立った**」のは

口語訳では 「龍」（サタン）です。
ギリシャ語訳では 「私」（ヨハネ）です。

どちらが真実でしょうか？私はギリシャ語訳の方が正しいと思います。なぜなら口語訳を余分な表現をそぎ落とすと以下ようになります。

「12:17龍は・・・**海の砂の上に立った**・・・。13:1 わたしはまた、一匹の獣が**海から**…（を）見た。」となります。「龍」と「一匹の獣」はどちらもサタン勢力です。したがって「**海の砂の上に立った**」サタン勢力が

「海から上ってくる」「一匹の獣」(サタン勢力)を見たと言う表現になり、それでは意味不明の文章になります。

一方、ギリシャ語訳はすっきりしています。「私ヨハネは海^{の砂の上に立}っていると「海から上ってくる一匹の獣」(海獣)を見た、となり意味がはっきりしています。ヨハネが「海^{の砂の上に立}て上^{ってくるのを見た}」のは「海獣」(ヨーロッパ各国 黙13:1~10)だけでなく「地獣」(アメリカ合衆国 黙13:11~18)の台頭も見せられました。これが黙13章の立ち位置です。したがって「海^{の砂の上に}」はアメリカ西海岸に違いありません。

黙13章の7つの頭は12章の7つの頭とは異なります。12章の7つの頭は6000年に及ぶ地球を支配した権力の7時代区分を意味していましたが、13章の7つの頭は、ナポレオン軍に捕らえられたピウス6世から、レオ13世までの7人のローマ法王を指します。その7つの頭はすべての支配権力を奪われ「その頭の一つ」であるピウス6世は獄中死しました。黙13章の7つの頭に世界を支配をする力がなかったことは事実です。だから13章の7つの頭には冠がありません。一方冠の付いた10本の角は国際連合10地域を指すと思われます。黙13章の7つの頭が象徴している7人のローマ法王は、皆死んだ状態でした。

彼らの105年に及ぶ在位期間に国王の戴冠式を司(つかさど)ることがありました。その際に、法王が被った王冠には「ヴァイカリウス・ファイリー・デー」「神の代理人」という意味のラテン語が刻まれていました。「神の代理人」という言葉は「イエス。キリスト」と同義語です。この「神の理人」は黙17章の8番目の頭として「自分がキリストである」と言って人々を欺くことになるでしょう。

結論 黙示録12章、13章、17章におけるヨハネが連れて行かれた位置情報
アメリカ西海岸です

黙示録12章、13章、17章におけるヨハネが連れて行かれた時情報

近未来です 以下の聖句が示している時点からヨハネは彼の示された預言を展開しています。

- (1) 黙12：17 「竜が・・・戦いをいどむために、出て行った。」
- (2) 黙13：3~5 「3死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。・・・四十二か月の間」
- (3) 黙17：10 「ひとは今おり、もうひとは、まだきていない。それが来れば、しばらくの間だけいる」

【その他の時、位置情報を示す聖句】 (1)、(2)、(3)に加え同じ時点を示している聖句

ダニ12：1「その時あなたの民を守ってる大いなる君ミカエルが立ち上がります。(ST16)」

そして「最後の贖い」すなわち、ST17-Aにおける金の香壇への雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式が象徴する「全聖徒の罪の除去」が完了しますと恩恵期間が閉じられます。

ダニ8：14「二千三百の夕と朝のあいだである。そして聖所は清められてその正しい状態に復する。」

ST17-Aにおける「聖所は清められてその正しい状態に復する。」(全聖徒の罪の除去) 言う預言が完全成就します。それはダニエル書全体を貫いている概念、すなわち、罪人がアダムが罪を犯す前の状態に回復されると言う永遠の福音を提示しています。

マタイ24：3~36「3・・・『あなたがまたおいでになる時 (ST22) や、世の終りには、どんな前兆がありますか』。・・・『5・・・多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。6・・・それは(「贗キリスト」と「戦争と戦争のうわさ」) 起らねばならないが、まだ終りではない。7 民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう (黙6章第2封印)。またあちこちに、ききんが起 (黙6章第3封印)、また地震があるであろう (現在進行中)。8・・・産みの苦しみの初めである。(黙12：1, 2参照) 9 ①そのとき (黙12：17、黙13：3「治ってしまった」「42か月」) 人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。(黙6：9~11第5封印殉教者の叫び) またあなたがたは、・・・憎まれるであろう。(近未来に必ず起こる 黙13：1「売買禁止令」) 10 ②そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。11 12 13 14 そしてこ

の御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう (ST17-A) 誰が述べ伝えるのか？それは144,000人軍勢による)。そしてそれから最後が来るのである。15 預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば (読者よ、悟れ) (日曜休業令発布)、16 ③そのとき・・・世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難 (恩恵期間終了前の「小さな悩みの時」7つの災害ではない) が起るからである。・・・22、23 ④そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。・・・27 ちょうど、いなくずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。・・・28、29 しかし、

⑤その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。 (ウィリアム・ミラー氏の再臨運動に伴って起こった) (この現象は近い将来もう一度起こる) 30 ⑥そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。また⑦そのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう (初文 64,65参照 黙6：12~17第6封印成就ST21~22) 31 また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう (ST22)。・・・33 そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。34 よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。35 天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。36 その日、⑧その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。」

- ①そのとき 「人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう」「すべての民に憎まれる」 (黙6：9~11第5封印殉教者の叫び)
- ②そのとき 「憎み合う」「にせ預言者」「愛が冷える」「最後まで耐え忍ぶ者」「荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば (読者よ、悟れ)
- ③そのとき 「荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つ」時、すなわち日曜休業令が発布される時 (大争闘

下P12,13参照)

- ④そのとき 「贖キリスト」の出現、黙17:11「第8の者」サタンが光の天使の姿をして現れる。(19MR p 2 8 2, 1)
- ⑤その時 頂上の預言の再来、黙16:20「島々は逃げ去り、山々は見えなくなった」
- ⑥そのとき オリオン座のかなたから降臨されるイエスとみ使いの大群は「白い光輝く雲」のように見える
(初文 p 104,460~462)
- ⑦そのとき 黙 6:14~17「天は巻物が巻かれるように消えて行き『我々を覆って、御座にいます方の御顔と子羊の怒りとから、かくまってくれ』『四方からその選民を呼び集める」(初文p462~464)
- ⑧その時 「キリスト再臨」の時は「ただ父だけが知っておられる。」

このように、マタイ24章の「頂上の預言」はダニ12:1、ダニ8：14と共に①～⑧の「その時」が示す事件は、イエスの天の至聖所への移行から恩恵期間の終了、そして再臨までの諸事件を順序通りに予言しています。そしてそれらは、ST17-Aの聖所の金の香壇における、雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式が象徴する、「最後の総括的な贖い」の期間を含みます。同時に、エルサレムの滅亡と、キリスト再臨直前の「罪の除去」に向けた、終末諸事件の進行と神の民を取り巻く厳しい状況を二重に預言していることが判るでしょう。エレンホワイト氏は同じ期間を初代文集の中で「ちょっとの間」(初文 p 453)と述べておられます

【ST17-B 恩恵期間終了】 恩恵期間終了を挟んで起こる7つの封印と7つのラッパの関係

ST17-Bはコーキーエバンス氏の「アロンとイエスの御働き表」の中には存在しない項目です。しかし贖罪日の儀式そのものが、イエスキリストの誕生からキリストの再臨、さらには1000年期までを示した全宇宙規模の贖罪の預言であることが明らかになった今、「恩恵期間終了」を避けて通れないことは明らかなです。贖罪日の儀式そのものには「恩恵期間終了」に該当するものは今のところ判りません。アドベンチストはエレン・ホワイトの書物から黙8：3～5の「もう一人のみ使いが・・・香炉・・・を地に投げつけた」と言う一文が恩恵期間終了の合図だと

教えられてきました。ST18のアザゼルの山羊への罪の移行を、「罪の除去」あるいは「恩恵期間終了」と当てはめる方がおられますが、それは妥当な解釈ではありません。

黙8:3～5「**3**また、**別の御使**（イエス・キリスト）が出てきて、金の香炉を手持って祭壇（**金の香壇**）の前に立った。**たくさんの香**（レビ6:12.13）が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の（**隔ての幕の前に設置された**）金の祭壇の上にささげるためのものであった。**4** 香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちのぼった。**5** 御使はその香炉をとり、これに祭壇の火を満たして、**地に投げつけた**。すると、多くのくの雷鳴と、もろもろの声と、いなずまと、地震とが起った。」

下図は恩恵期間終了を挟んで7つの封印と7つのラッパの時系列と黙示録7章の位置が示す意味を思考するために書いたものです。

7つの封印と7つのラッパの時系列的関係

第1封印 勝利に勝利 十四万四千軍勢 第2封印 各国間の紛争と戦争激化 第3封印 大飢饉の到来 売買禁止令 第4封印 疫病によるパンデミック	黙6:9~11 第5封印 香壇の下から叫ぶ殉教者 生ける義人の調査審判の渦中 恩恵期間内	黙 7:1~8 勝利し印されるイスラエル出自の144000人軍勢 生ける義人の調査審判終了間際 恩恵期間内	黙7:9~17 勝利し印されるあらゆる国民部族民族 国語出身 生ける義人の調査審判終了間際 恩恵期間内	生ける義人 死せる義人 押される 全義人に神のが 罪が除去 一時に	黙 6:11~17 第6封印 悪人の側から見た再臨の直前 キリストの御姿は天に見える 恩恵期間終了後	黙 8:1 第7封印 半時間の静けさ キリスト再臨 イエスの御姿は天にはっきりと見えている 恩恵期間終了後
	黙 8:2,6~13 7つのラッパ 1~4ラッパは恩恵期間内 生ける義人の調査審判の渦中 恩恵期間内	5~7封印は明らかに未来であるが、この表は1~4封印も未来に設定した。	第1ラッパ血の混じった雹と火が降る 3分の1 第2ラッパ燃える山海に投入され海血に変わ 3分の1 第3ラッパニガヨモギ落星水源が苦くなり飲めなくなる 3分の1 第4ラッパ太陽月星が暗くなる 3分の1	黙 8:3~5 別のみ使いキリスト香炉を地に投げ捨てる 生ける義人の調査審判の終了 恩恵期間終了	黙 9:1~12 第5ラッパ 大落星 地球に大穴が開く、人の顔をした毒針を持つイナゴが五か月間神の印がない者を刺す	黙 9:13~21 第6ラッパ ユフラテ川の4人のみ使い 黙 11:15~19 第7ラッパ 神とその民の勝利 天の大空に十戒が示される

エレン・ホワイトの証の書で「恩恵期間終了』を扱った本の中で、最もよく使われる引用文は初代文集 p452,453です。ここを精査してみましょう。

【調査審判と罪の除去のタイミング】「第三天使の使命が終わろうとしている時」

初文 p 452,453 「①わたしは、第三天使の使命が終わろうとしている時をさし示された。④ 神の民には天来の力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の時に対する備えができていた。⑤ 彼らは、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰めを受け、生けるあかし（黙12:17「神の戒めを守りイエスの証を持つもの」）が復活していた。最後の大きい警告（144000人軍勢が上げる大きい叫び）、が 至る所で叫ばれ、それは警告を受け入れたくない地上の住民（アドベンチストも含まれる）をわき立たせ、怒らせた。わたしは天使たちが、天をあちこちと飛びまわっているのを見た。（ST17-A近未来）⑥ 墨（すみ）入れを持った1人の天使が、地上から帰ってきて、自分の働きの終わったことを報告した（ST17-A 最後）。⑦ そこで 聖徒の数がかぞえられて封印された（神の印を受ける、恩恵期間終了間際） ⑧すると、 それまで十戒の納められている箱の前で奉仕しておられたイエスが、香炉を投げ捨てられるのをわたしは見た。

彼は両手をあげて、大きな声で、 ⑨「事はすでに成った」と言われた。イエスが⑩「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、 聖なる者はさらに聖なることを行ふままにさせよ」と厳粛に宣告されると、天使の万軍は冠をぬいだ。⑪ 各人の判決 は生か死かのいずれかにきまっていた。イエスが聖所（the sanctuary 両室）で奉仕しておられた間に、⑫ 審判(さばき)は死せる義人から次に生ける義人へとつづけ られていたのである。キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの罪を消し去り、み国を受けておられた。⑬ み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった。「国と……全天下の国々の権威とは」みなイエスと救いを継ぐ者にと与えられ、イエスは王の王、主の主として治められることになった。⑭ イエスが至聖所から歩いてこられると、衣の鈴が鳴るのが聞こえた（大祭司の正装の青色上着の裾に金の鈴が縫い付けられていた）。そして外へ出られると、暗黒の雲が地上の住民を

おおった。⑩その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間には仲保者がおられない。イエスが神と不義な人類との間に立っておられた時には、地上の住民は抑制されていた。しかしイエスが、人類と天父との間からしりぞかれた時に、その抑制はとり除かれ、サタンは、最後まで悔い改めない人々を完全に支配するようになった。

⑪イエスが聖所 (the sanctuary 両室) の中で奉仕しておられる間は、7つの災害を地上に注ぐことはできなかった。しかし聖所(原文には「聖所に該当する単語はないが”His work there is finished”を前文の「聖所 (the sanctuary 両室) の中で」に込め「両室」の意味合いで訳者が挿入している)におけるイエスの働きが終わり、その執り成しが終わると、もう神の怒りをとどめる何ものもなく、それは、これまで救いを軽んじ、譴責 (けんせき) を憎んできた不義な罪人の、おおいなき頭上にはげしく破裂した。イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた。」

⑫各人の判決はきまり、宝はかぞえられた。イエスは天の聖所の第一室に、ちょっとの間とどめられた。イエスが至聖所におられる間に告白された罪は、罪の創始者であるサタンの上に置かれ (ST18)、彼が その刑罰を受けねばならなかった。」

①「第三天使の使命が終わろうとしている時」とはエレン・ホワイトが幻の内に連れて行かれた預言の時情報です。第3天使の使命は「獣の印」を避け「神の印」を受けなさいと言うメッセージです。この情報は、全聖徒の「罪が除去」され「主に聖なる者」と刻まれた神の印が押される、恩恵期間終了直前のできごとを描写しています。彼女は死せる義人と生ける義人の調査審判が終了して、両者の無罪判決が下りた時点、すなわち恩恵期間終了直前の近未来に連れて行かれ、そこからこの幻をみせられたのです。その状況は④～⑥に分けて述べられています。

④ 神の民 (144000人軍勢) には天来の力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の 時に対する備えができていた。⑤ 彼ら (144000人軍勢) は、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰め (11弟子とほかの信徒が受けたペンテコステの聖霊降下の再来) を受け、生けるあかし (黙12：17「神の戒めを守りイエスの証を持つもの) が復活していた。

最後の大いなる警告（144000人軍勢が上げる大いなる叫び）、が至る所で叫ばれ、それは警告を受け入れたくない地上の住民（アドベンチストの大半も含まれる）をわき立たせ、怒らせた。㊦ わたしは墨入れを持った1人の天使が、地上から帰ってきて、自分の働きの終わったことを報告した（ST17-A「最後の恩恵期間終了間際」）。

㊦㊦㊦の文は❶の「第三天使の使命が終わろうとしている時」の状況とはどんなものであるかを説明しています。「神の民」と、ここで描かれている者達は生きている義人のことです。生きている義人は「イスラエル12部族」出自の144,000人軍勢（黙7：4～8）と、「あらゆる国民、部族、民族、国語」（バビロン）出自の「数えきれないほどの大勢の群衆」（黙7：9～11）の、二つのグループから構成されています。時系列的には144,000人軍勢が「後の雨の慰め」を受けて発する警告メッセージ「大いなる叫び」に導かれ、「あらゆる国民、部族、民族、国語の内から」（バビロン）「数えきれないほどの大勢の群衆」が呼び出されて、神の民に加わることを示しているのです。

そして、メッセージを受けた順番に「大勢の群衆」も「大いなる叫び」に加わります。㊦の「天来の力」は㊦の「後の雨、すなわち神のみ前より来る慰め」を受けることによって「神の民」、すなわち選び抜かれた144,000人軍勢に与えられるでしょう。それは、イエスの弟子たちが体験したペンテコステの聖霊降下の再来です。そこには死に至るまで忠実である信徒の「生ける証」が復活しています。ヨハネは同じ期間に起こる迫害の場面を黙6：9～11（香壇の下から叫ぶ殉教者の叫び「いつまであなたは、さばくことをなさらず、」）と黙12：17（「17 龍は、女に対して怒りを発し、・・・神の戒めを守り、イエスのあかし・・・出て行った。」）に預言として書きあらわしています。

【黙6：9～11 第五の封印】

黙6：9～11「9 小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。10 彼らは大声で叫んで言った、『聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか』。11 すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、『彼らと同じく殺され

れようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように』と言い渡された」

黙12:7「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、**戦いをいどむために、出て行った。**」

＊第5封印の殉教者は生ける義人です。

第5封印において、香の祭壇の下から叫んでいるのは、生ける義人の裁きに移ってからの殉教者のことです。なぜなら、死んだ義人は調査審判で**無罪の確定判決を受けている**ので、「わたしの裁きはどうなっていますか」と、叫ぶはずがありません。(初文 p 453「・・・各人の判決はきまり、宝はかぞえられた。・・・」参照)

＊黙12：17の「龍が」牙をむいて「戦いを挑む」のは生ける義人、すなわち144,000人候補が淘汰され、144000軍勢になる時です。

やがて、ごく近い将来に「女の残りの子ら」であると、自称してきたセブンスデーアドベンチストは「龍が」「怒りを発し」「戦いを挑むために、出て行った」と、預言されている事件を目の当たりにするでしょう。彼らは「龍」の勢力が自分らに戦いを挑み、多くの忠実なものが迫害され殉教するのを目の当たりにして、恐れおののき大半がその信仰を捨てる、と予告されています。インターリニヤギリシャ語聖書の「**イエスの証言を保っている人々**」は口語訳より意味が鮮明です。現代のセブンスデーアドベンチストの多くは「**イエスの証言を保っている**」でしょうか？「否、否、否」です。彼らの多くは証の書を嫌い捨てようとしているのが現状です。本棚にエレン・ホワイトの書物を持っていたとしても、その教えを心の内に保っていない者に何を期待することが出来るのでしょうか？「**最後の大きい警告**」とは何でしょうか？それは、神の民と称されてきた者、すなわち命の書にその名が記されている者達に、ふるいの時が迫っていることを「警告」することです。

＊「ふるい」は「命の書」にその名が残されるか残されないかを決定します。

ウィリアム・ミラーの再臨運動に呼応して、墮落したプロテスタント各教会から出てきた**5万人の再臨信徒**の内、1844年10月22日の大失望の後にも、再臨信仰を捨てなかったのは **50数人**でした。彼らが今日の残りの民「**神の戒めを守り、イエスの証を持つもの**」として選ばれ、セブンスデー・アドベンチスト教会の礎（いしづえ）を築きました。しかしこの教会も最後のふるいの時が来るとき「教会員名簿の20人に1人も」あるいは「100人に1人も」残らないと預言者エレン・ホワイト氏は述べています。

クリスチャンの奉仕 p 52（世界総会公報1893年 p 132,133）「わたしは教会に、厳粛な訴えをしたい。それは**教会名簿に名前が載っている人々の中で、地上の生涯を終る備えができている人は20人に1人もなく、**その他の人々は普通の罪人と全く同じに、世にあって、神もなく望みもないということである。彼らは口では神に仕えると言っているが、それよりももっと熱心に富に仕えている。この半々の働きは、キリストを告白するよりも、キリストをたえず拒むことになる。自分自身の克服されていない精神を洗練しないままに、教会に持ち込む人が非常に多い。彼らの霊的な味覚は彼ら自身の不道德で墮落的な腐敗によって毒され、精神においても心においても目的においても世を象徴し、肉欲的な慣習はますます強くなり、彼らの自称クリスチャン生活は、幾度もくりかえされる欺瞞（ぎまん）に満ちている。罪人として生活しながら、クリスチャンと称しているのである。クリスチャンと称しキリストを告白する者は、罪人の中から出てきて、けがれたものにさわらず、離れていなければならない。」

預言者と王 p 626「クリスチャンは、まもなく**圧倒的な驚きとして世を襲うところのもの** に対して、備えなければならない。この備えは、忠実に神のみ言葉を学び、生活をその戒めに一致させるように努力することによってなされるべきである。……神は、リバイバルと改革を要求しておられる。」

この二つの引用文の言葉は厳しいものですが明確なものです。私たちはエレン・ホワイトが予告した「**圧倒的な驚きとして世を襲うところのもの**」が襲ってくることを目前にしています。それを感知している者は少数です。多くの教会員たちは「日曜休業令」などいつの日か遠い日のことで自分たちの世代には関係ないと思っています。

現在キリストは、まだ至聖所において贖罪の業をしておられますが、やがてキリストは至聖所の贖罪所の前の裁きの座から「立ちあがられ」、第2の幕を通られて聖所第1室の金の香壇の前で最後の贖いの業をなされます。この時から、残りの民は神のふるいに掛けられるでしょう。各時代において神様が何か決定的な戦いを始めようとされる時は、いつも、ふるいの期間があり最精鋭の戦闘員を選別してこられました。

- ・カナンを目前にしたイスラエルの12人の斥候の内、神の御心を理解し前進しようとしたのはヨシュアとカレブだけでした。
- ・ギデオンの精鋭300人の兵はギデオンの招集に応じた32,000人から2度のふるいに掛けられ300人が選別されました。
- ・ウィリアム・ミラーの再臨運動に呼応して、墮落したプロテスタント各教会から出てきた5万人の再臨信徒の内、1844年10月22日の大失望の後にも再臨信仰を捨てなかったのは50数人だけでした。彼らが今日の残りの民「神の戒めを守り、イエスの証を」持つものとして、選ばれたセブンスデー・アドベンチスト教会の礎（いしづえ）を築きました。しかしこの教会員も最後のふるいの時が来るとき「教会員の20人に1人も」あるいは「100人に一人も」残らないと預言者エレン・ホワイトは述べています。

エレン・ホワイトは、黙12:17の「**神の戒めを守りイエスの証を持つもの**」すなわち、144000人軍勢の誕生とその働きを幻のうちに見せられました。12章冒頭の産み月が迫って泣き叫ぶ女は一義的にはイエス・キリストを生んだマリヤですが、それは、「**傷もシミもない**」144,000人軍勢を産もうとして、**苦しみもがいている近未来の教会を象徴しています**。6,000年に及ぶキリストとサタンとの大争闘の争点は、神の律法（**十戒**）です。サタンは天地創造のはるか前から「我々には律法はいらない。我々は自分自身が生まれつき持っている理性（**フォース**）で正しい道を歩むことが出来る。」と、言って天使の3分の1を味方に引き入れ天での戦いを起こしました。天地が創造されてからは「神は守ることのできない律法を人に与えたひどいお方だ」と人類を惑わしてきたのです。

同様に、サタンは今日「**律法主義から福音主義へ**」と題して新神学の提唱者であるジョージ・ナイト神学博士

を通して律法と福音を分断させようとしています。これはサタンの働きです。これらのサタン側からの巧妙な働きかけに対して書かれたエレン・ホワイトのコメントを見てみましょう。

RH 1902年4月22日「律法と福音は完全に調和していて、互いに支えあっている」

MS11 1893年「敵(サタン) はいつでも、律法と福音を分離するために働いてきた。それらは切っても切れない関係にある。」

ジョージ・ナイト博士の大ファンである、山形謙二ドクターの「主よ御国へ」はSDAの中で最も良く読まれている書物の一つです。彼は「律法主義から福音主義へ」をテーマに、我々は十字架のイエスが成し遂げて下さった救いの功績を信仰によって受けとるのです。律法を行うことによって救いは得られないのです、と説きます。一見、まともな理解であると思われるでしょう。しかし、読み進みますと、これは律法と福音を分断する働きをしていることに気付きます。用いられている証の文の言葉の「てにおは」を巧みに変えて、その意味を別のものにしたりしていますので要注意の書物です。私は初版の「主よ御国を」の全文を検証しました。

それらの働きに合わせて、日本SDA教団のリーダーから「日曜休業令はやってこない」という出版物が出されるほどです。それほどではなく「日曜休業令が間近に出るだろう」と言っている方でも実際にそのふるい (迫害) の時に備えて田舎に移ろうとする方が少ないのは寂しい限りです。

【封印された】 ②そこで 聖徒の数がかぞえられて封印された。

エレン・ホワイトはp95の初文 p 452,453の引用文 ①で黙12：17の「神の戒めを守りイエスの証を持つもの」すなわち144000人軍勢の誕生とその働きを見せられました。12章冒頭の産み月が迫って泣き叫ぶ女は、一義的にはイエス・キリストを生んだマリヤですが、それは「シミも傷もない」144,000人軍勢を産もうとしてもがいている近未来の教会を象徴しているのです。6,000年に及ぶキリストとサタンとの大争闘の争点は神の律法 (十戒) です。

サタンは天地創造のはるか前から「我々には律法はいらない。我々は自分自身が生まれつき持っている理性（フォー
ス）で正しい道を歩むことが出来る。」と、言って天使の3分の1を味方に引き入れ天での戦いを起こしました。天
地が創造されてからは「神は守ることのできない律法を人に与えたひどいお方だ」と、人類を惑わしてきました。

エレン・ホワイトは幻で144,000人軍勢がペンテコステの再来である、イエスの弟子たちが受けた「後の雨の慰
め」に与り、「天来の力」を受けて強力な証を全世界に示している様子を見せられました。そして、雅歌6：10に
予言された「**恐るべきこと旗を立てた軍勢のような者達**」すなわち144,000人軍勢の働きによって、現代の真理を初
めて耳にした者達が、短期間の内にバビロンから呼び出されるのを、ヨハネと同じように見せられました。彼らは
提示される現代の真理を短期間のうちに理解し、神の御前に罪を告白し、神の民に加わります。全世界に派遣され
る「墨坪を持った天使」が、無罪判決を受ける生ける義人の一人一人に印をつけて行きます。厳粛な瞬間です。そ
して、最後の一人に印をつけ終わったことが報告されると、生ける義人の全ての罪が除去されます。そして彼らと
時を同じくして、死せる義人の罪も除去されるのです。そして、罪を除去された義人全員に神の印が押されて「封
印」されるのです。

大争闘下P 395,396「われわれの前にある苦悩と苦悶の時は、疲労と遅延と飢えに耐えることのできる信仰、
すなわち、激しく試みられても落胆しない信仰を要求する。その時に備えるために、すべての者に恩恵期間が
与えられている。」

【**香炉を投げ捨てる**】 p95の初文 p 452,453の引用文 ③すると、それまで**十戒の納められている箱の前**で奉仕してお
られた**イエスが、香炉を投げ捨てられるのをわたしは見た。**

黙 8：3～5「**3** また、別の御使が出てきて、金の香炉を手にとって**祭壇の前**に立った。**たくさんの香**が彼に与
えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであつ
た。**4** 香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちのぼった。**5** 御使はその香炉をとり、

これに祭壇の火を満たして、地に投げつけた。すると、多くの雷鳴と、もろもろの声と、いなずまと、地震とが起った。」

Revelation 8:3～5 ”3 And another angel came and stood **at the altar, having a golden censer**; and there was given unto him much incense, that he should offer *it* with the prayers of all saints upon the golden altar which was before the throne. **4** And the smoke of the incense, *which came* with the prayers of the saints, ascended up before God out of the angel's hand.” **5** And the angel took the censer, **and filled it with fire of the altar**, and cast *it* into the earth: and there were voices, and thunderings, and lightnings, and an earthquake. ”

③の引用文と黙8：3～5は同じ恩恵期間終了の場面を取り扱っています。しかし、一見、香炉を投げ捨てる場所が異なっているように見えます。それで初代文集の「**十戒の納められている箱の前**」という文言から香炉を投げ捨てるのは至聖所の中であると主張する方が多いのかも知れません。

黙8:3～5のヨハネの聖句の方は「金の香炉を手にとって**祭壇の前**に立った」となっています。この「**祭壇**」は聖所第1室に設置された金の香壇の祭壇のことです。なぜなら、至聖所にある贖罪所は契約の箱の蓋の部分でしたが、そこは決して「祭壇」とは言いません。さらに贖罪所のはるか上方に神の「御座」があります。だからヨハネは「御座の前の金の祭壇」と言ったのです。また「たくさんの香（**贖罪日には両手一杯の香が用いられた。平日は片手一つまみの香が使われた**）が」「御座の前の金の祭壇の上にささげるため」に「彼に与えられていた。」とあります。大祭司は炭火と香の入った香炉を贖罪所の上に置くことはありましたが、贖罪所の上で直接香を焚くことはしませんでした。贖罪所には炭火が置ける祭壇はありません。黙8:5にはっきりと「御使はその香炉をとり、これに**祭壇の火**を満たして、地に投げつけた」と書かれています。炭火は金の香壇にはありますが贖罪所にはありません。

この聖句は「もう一人のみ使い」が「炭火を香炉に満たして地に投げつけた。」、と述べています。炭火は聖所

第1室の金の香壇にありました。聖徒からの「わたしの罪を取り除いて下さい」と言う、祈りが上がってこなくなる時。大祭司イエスは香炉に香の祭壇に残っている炭火を、香炉に満たして地球に投げつけられます。そして、「事終われり」と恩恵期間の終了宣言をされるのです。これらの事実から③の引用文は以下の様な（）の意味を含んでいることを念頭において読むべきです。

「それまで（隔ての幕を挟んで）十戒の納められている箱の前（の金の香壇）で奉仕しておられたイエスが、香炉を投げ捨てられるのをわたし（エレンホワイト）は見た。」

これでこの初代文集の p 452,453の引用文の矛盾と見える部分の半分は解決しました。もう一つの矛盾と見える部分を考察して見ましょう。

【『ちょっとの間』で罪が除去される】

⑥ 各人の判決は生か死かのいずれかにきまっていた。イエスが聖所（the sanctuary 両室）で奉仕しておられた間に、⑦ 審判（さばき）は死せる義人から次に生ける義人へとつづけられていたのである。キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの罪を消し去り（罪の除去第1段階）、み国を受けておられた。⑧ み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった。「国と・・・全天下の国々の権威とは」みなイエスと救いを継ぐ者 とに与えられ、イエスは王の王、主の主として治められることになった。

⑨ イエスが至聖所から歩いてこられると、衣の鈴が鳴るのが聞こえた（大祭司の正装の青上着の裾に金の鈴が縫い付けられていた）。そして外へ出られると、暗黒の雲が地上の住民をおおった。⑩ その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間には仲保者がおられない。⑫ 「各人の判決はきまり、宝はかぞえられた（ST13~16,17-A）。イエスは天の聖所の第一室に、ちょっとの間とどまられた（ST17-A）。イエスが至聖所におられる間に告白された罪は、罪の創始者であるサタンの上に置かれ（ST18）、彼が その刑罰を受けねばならなかった。」

“Every case was decided, every jewel numbered. Jesus tarried a moment in the outer apartment of the heavenly sanctuary, and the sins which had been confessed while He was in the most holy place were placed upon Satan, the originator of sin, who must suffer their punishment.”

⑥、⑨、⑫の引用文の □ で囲まれたところをよく考察しますと、一つの儀式が隠されていることが判明します。それは大祭司が至聖所を出た後、聖所第1室で行った雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉獻儀式です。それはアロンとイエスの御働き表のST17-Aに該当します。そこでは混ぜた雄牛の血によって祭司群の罪が除去されました。そして混ぜた雄山羊の血によって贖罪日当日に罪を告白した会衆一人一人の罪が除去されました。至聖所において贖罪所に注がれた雄山羊の血は、基本的には会衆全体が犯した罪の除去に用いられました（レビ16：5、4：13～21参照）。こうして当日そこに参加したイスラエルの会衆全体が犯した罪と祭司群と会衆の個々人の罪を合わせて儀式に参加した全員の罪が除去されました。

ここで⑥の イエスが聖所 (the sanctuary 両室) で奉仕しておられた間に ⑫の イエスは天の聖所の第一室に、ちょっとの間とどまられた という文言を比較検討する時、エレン・ホワイトは至聖所での雄山羊の奉獻儀式の後に、金の香壇での混ぜた血の奉獻儀式があることを認識していたのでしょうか。なぜなら「聖所」の原語は“the sanctuary”が使われており、それは、至聖所と聖所第1室を合わせた両室を意味するからです。

⑨イエスが至聖所から歩いてこられ・・・そして外へ出られると、⑩その時は、もう、不義な人類と神の怒りの間には仲保者がおられない。

大祭司イエスが最後の贖罪の業、すなわち霊的イスラエルである神の民の罪の除去を執り行う為に、天の至聖所に移られてから179年の長い年月が経過しました。その期間に比べると ちょっとの間とどまられた と表現された期間は適切な表現だと思われます。これらの期間が短いことはこれまでの学びから判明しています。初文452、453の引用文は恩恵期間終了間際の非常に短い期間について述べられたものです。これらの期間はダニ

エル12章の3タイムライン、黙示録13章の42か月と連動し、日曜休業令を契機とする特別な罪の除去の期間を示しています。エレン・ホワイトはその期間を「**ちょっとの間**」と表現したのです。ダニエルはその期間を「ひと時とふた時と半時（3年半）（ダニ12:7）」と予告しました。その期間は「アロンとイエスの御働き表」ではST17-Aです。

⑥～⑧の引用文は「イエスが聖所（the sanctuary 両室）で奉仕しておられた間にと」、そこに、至聖所の贖罪所での贖い（ST13～16）と恩恵期間の終了（ST17-B）との間に聖所第1室の金の香壇での儀式があることを暗示しています。そしてそこでは「各人の罪は除去された」とは書かずに「**各人の判決は生か死かのいずれかにきまっていた。**」と書いたのです。その後、彼女は⑦で「キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの**罪を消し去り**、み国を受けておられた。」と書いています。至聖所の贖罪所への雄山羊の血の奉献が象徴する贖いは、厳密に言えば、会衆すなわち神の民全体が犯した罪の除去が対象です。そうするとまだ祭司群と会衆個々人の罪の除去が残されていることになります。贖罪日の儀式は完ぺきに構成されています。至聖所の贖罪所では取り扱われなかった祭司群の罪と会衆個々人の罪は、聖所の金の香壇への雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式によって消し去られたのです。

イエス・キリストは現在天の至聖所におられます。1844年10月22日以来大祭司イエスは、天の至聖所において死せる義人の調査審判と無罪判決の確定を行ってこられました。同じ贖いの働きが生ける義人に対しても行われます。彼らもまた、順次、調査審判と無罪判決の確定を受けるでしょう。だから彼女は「イエスが聖所（the sanctuary 両室）で奉仕しておられた間に、⑦審判(さばき)は死せる義人から次に生ける義人へとつづけられていたのである。」と過去形で書いたのです。

イエスキリストを迎える生ける義人には2種類の義人がいる事が黙7章の記事から判ります。イスラエル出自の14万4千人軍勢と、彼らが戦い勝ち取ると約束されているバビロン出自の「数えきれないほどの大群衆」がそれです。贖罪日の儀式における雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式が象徴するイエスが十字架で流された血の適用がそこに示されています。

混ぜた罪祭の雄牛の血

イスラエルの大祭司と祭司群

「十四万四千人軍勢」黙7: 4~8) 彼らは祭司と呼ばれる

混ぜた罪祭の雄山羊の血

贖罪日当日罪を告白し罪祭を屠った者達

「白い衣を着た数えきれないほどの大群衆」(黙7:9~10)

初文p120「聖徒は聖なる都にこい、千年の間王として祭司として支配する」

【 7つの災害発生タイミング 】

初文 p 453の引用文の「イエスが至聖所から歩いてこられ」(ST16)と「そして外 (ST20) へ出られると」の間には4つの儀式がありますが、この文章ではそれについて言及していません。⑩に書かれているのは「仲保者がおられない」こと、その結果「抑制されていた」「地上の住民は」「サタン」に「最後まで悔い改めない人々を完全に支配」されるようになることが書かれています。

そして⑪で「イエスが聖所 (the sanctuary 両室) の中で奉仕しておられる間は、7つの災害を地上に注ぐことはできなかった。」と、7つの災害発生タイミングに言及し、その間は「イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた。」と聖徒たちと大祭司イエスの関係が明らかに示されています。いずれも「聖所」と訳された所は原文で”the sanctuary ”となっています。それは、至聖所と聖所第1室の両室での働きが、贖罪日の最も大事な儀式であることを示しています。「仲保者なしで」の意味するところは、大祭司イエスが「わたしの罪を取り除いて下さい」と言う聖徒からの祈りが上がらなくなった時点で、香炉に香壇の祭壇にある炭火を詰めて地に向かって投げられる(黙8:3~9)、すなわち仲保者の座を離れられることを意味します。それは恩恵期間の終了(ST17-B)を意味します。そこにはロドリゲス神学の「聖徒はキリストが再臨されるまで人は罪を犯し続ける罪への傾向が残る」と言う誤謬(ごびゅう)が入り込む隙間はありません。

【ST18 会衆と祭司の罪をアザゼルの山羊に移す】

レビ16:20~22 「20 こうして① ~~聖所~~ 至聖所と ② 会見の幕屋と ③ 祭壇 とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならない。21 そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。22 こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう。すなわち、そのやぎを荒野に送らなければならない」

Leviticus 16:20~22 KJV 20 "And when he hath made an end of reconciling ① ~~the holy~~ **place**, the most holy place and ② the tabernacle of the congregation, and ③ the altar, he shall bring the live goat 21 And Aaron shall lay both his hands upon the head of the live goat, and confess over him all the iniquities of the children of Israel, and all their transgressions in all their sins, putting them upon the head of the goat, and shall send him away by the hand of a fit man into the wilderness 22 And the goat shall bear upon him all their iniquities unto a land not inhabited: and he shall let go the goat in the wilderness."

KJVの翻訳者は①を **the holy place** と記しています。翻訳者は①が **the holy place** か **the most holy place** か判断が確定しなかったので **place** を斜字の **place** としました。ST18の儀式は恩恵期間が終了し、イスラエル、すなわち全聖徒から彼らが犯した罪を「アザゼルの山羊」すなわちサタンに移すことを象徴しています。ST13~17-Aの儀式は、至聖所の贖罪所に雄山羊の血を注ぎ、至聖所を清め、雄牛と雄山羊の混ぜた血を聖所の金の香壇の角に塗り、香壇の祭壇に、至聖所の贖罪所に雄山羊の血を7回スピंकフルしたように、混ぜた血を7回スピंकフルしました。このようにして、至聖所と聖所と聖所にある金の香壇の祭壇が清められました。これらの事実を勘案する時、KJVの① "**the holy place**" は "**the most holy place**" が正解です。

したがって口語訳の「聖所」は「至聖所」が正解です。口語訳聖書「20 こうして① 聖所と② 会見の幕屋と③ 祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、」を読むとき、おや？①と②はどちらも聖所第1室ではないか？と誰しも思うでしょう。レビ16:20~22はイスラエルが犯した罪を取り除き「アザゼルの山羊」に移す儀式 (ST18) です。イスラエル人は過去1年間に犯した罪を全て大祭司に「拭い去って」もらい、それらの罪を「アザゼルの山羊」移すことによって清められる、と受け止めました。儀式が終わると、イスラエル人は犯した罪が許されたばかりでなく取除かれたことを喜び祝いました。

③の「祭壇」は「外庭の燔祭の祭壇」でしょうか？それとも「聖所第1室」に設置されていた金の香壇の祭壇のことなのでしょうか？贖罪日の儀式は、天の聖所と至聖所で行われている、死せる義人と生ける義人の、調査審判と罪の除去を儀式化したものです。それらの儀式は実際には、天の聖所と至聖所で行われてきた神の民を贖う働きの型です。幕屋の中の聖所第1室と至聖所第2室に設置されている構造物 (柱や梁) と器具類 (契約の箱、パンの机 7 つの燭台、金の香壇、香炉) はすべて純金を鍍金した物か純金で造られていました。聖所儀式において、金は天の事物又は天で行われることを表しています。一方、外庭の燔祭の祭壇、洗盤は全て青銅で造られていました。青銅は地上の事物又は地上で行われることを表します。

前半の外庭で行われた贖罪日の儀式ST0~7はキリストの誕生から十字架、そして、よみがえられて40日間弟子たちを再教育された後、昇天され天の聖所に入られるまでを型として表していました。

「⑨イエスが至聖所から歩いてこられ・・・そして外へ出られると」の間に隠された儀式の詳細

- ① ST16 「イエスが至聖所から歩いてこられ」は大祭司イエスの至聖所から聖所第1室への移行を表します
- ② ST17-A レビ16：18、19 金の香壇での雄牛と雄山羊の混ぜた血の奉献儀式 週末諸事件の開始から恩恵期間終了までを表します
- ③ ST17-B 恩恵期間終了 黙 8：3~5「他のみ使い」香炉を地に投げ捨てる (この項目は贖罪日の儀式の中には見いだせない)。

- ④ST18 アザゼルの山羊への罪の移行、すなわちサタンへの罪の移行を表す
- ⑤ST19 大祭司は正装を脱ぎ全裸になる
- ⑥ ST20 外庭の洗盤で体を洗い聖所に戻る 大祭司の洗盤でのからだの洗いは「ヤコブの悩み」を象徴している。
- ⑦ ST21 純白の祭服を着て外庭に出てきて民を祝福した。「そして外 (ST20) へ出られると」7つの 災害が始まる。この時点でキリストは神の民を 迎えに天の宮廷を出発されます。

「そして外 (ST20) へ出られると」7つの災害が始まる

【ST18 「サタンへの罪の移行」アザゼルの山羊に罪を移す】

- ③ ST17-B 聖所 「わたしの罪を拭い去ってください」と言う祈りを表す香壇の煙が上がらなくなると、大祭司イエスは薫香が尽きた香炉に祭壇の炭火を香炉にいれ、地に向かって投げつけられる。(黙8:3~5)

恩恵期間終了
{

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い」
「義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ」

黙 22 : 11 「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ」。

- ④ ST18 聖所 聖所第1室の入り口の中からアザゼルの雄山羊の頭に手を置き、全イスラエルの罪をアザゼルの山羊に移した。
天の大祭司イエスも聖所の中から、死せる義人、生ける義人から除去した罪をサタンに移される。

【ST19~21 大祭司は正装を脱ぎ全裸になり、洗盤で身をすすぎ、白衣に着換えて聖所から出てくる】

レビ16：23 「そして、アロンは会見の幕屋に入り、**聖所に入る時に着た亜麻布の衣服**を脱いで、そこに置き」

レビ16：4 「**4 聖なる亜麻布の服を着、亜麻布のももひき**をその身にまとい、**亜麻布の帯をしめ、亜麻布の帽子をかぶらなければならない。これらは聖なる衣服である。**彼は水に身をすすいで、これを着なければならない。」

レビ16：23は「アロンとイエスの御働き表」のST19です。

レビ16：4 は「アロンとイエスの御働き表」のST 1です。

レビ16：23 の「**聖所に入る時に着た亜麻布の衣服**を脱いで」の「**亜麻布の衣服**」は、レビ16：4の「**4 聖なる亜麻布の服**」のことです。すでに、大祭司はイスラエルの罪を消し去り（除去し）その罪をアザゼルの山羊に移し終わっています。定められた人がアザゼルの山羊を荒野に放逐するために外庭から連れ出そうとしています。そこで大祭司は正装と「**聖所に入る時に着た亜麻布の衣服**」を脱ぎ、全裸になって洗盤で身をすすいだのです。

ST19の大祭司が正装と**亜麻布の衣服**を脱ぐ儀式の前後すなわち、ST13~24の儀式が象徴する、天の大祭司イエスの御働きを、エレンホワイトは初代文集 p 452,453に詳しく記述しています。この引用文の大事な箇所に（ST〇〇）と挿入して、彼女の記述が贖罪日の儀式における大祭司アロンの行動に該当するかを精査してみましょう。

初代文集 p 452.453 「イエスが**至聖所**から歩いてこられると、**衣の鈴**（大祭司の正装には鈴が縫い付けてある）が鳴るのが聞こえた（ステップ16）。そして外（外庭）へ出られると（ステップ21）（ステップ17-A~ステップ20は省いてある）、暗黒の雲が地上の住民をおおった。

その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間には**仲保者がおられない**。イエスが神と不義な人類との間に立っておられた時（**アダムの罪以降～17-B 恩恵期間終了直前**）には、地上の住民は抑制されていた。しかしイエスが、人類と天父との間からしりぞかれた時（**ステップ17-B 恩恵期間終了時**）に、その抑制はとり除かれ、サタンは、最後まで悔い改めない人々を完全に支配するようになった。

イエスが**聖所**（the Sanctuary 聖所と至聖所の2室）の中で奉仕しておられる間（**ステップ13～17-B**）は、7つの災害を地上に注ぐことはできなかった。しかし**聖所**（the Sanctuary 両室）におけるイエスの働きが終わり、その執り成し（**ステップ13～17-A 金の香壇での血の注ぎ**）が終わると、もう神の怒りをとどめる何ものもなく、それは、これまで救いを軽んじ、譴責(けんせき)を憎んできた不義な罪人の、おおいなき頭上にはげしく破裂した。

イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時（**ステップ17-B～22**）に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた。各人の判決はきまり（**ステップ13～17-A 個々人の無罪判決が決定した後恩恵期間終了間際に罪は除去される**。したがって**至聖所**では「罪の除去」はなされない。レビ16：15～16には「贖いがなされ」とある）、宝はかぞえられた。

イエスは天の聖所の第一室に、**ちょっとの間**とどまられた（**ステップ17-A 聖所の金の香壇での罪祭の血の注ぎが象徴する「罪の除去」**レビ16：18・19 聖所の金の香壇での記述には「**イスラエルの人々の汚れを除いて**」とある）。イエスが至聖所におられる間に告白された罪は、罪の創始者であるサタンの上に置かれ（**ステップ18**）、彼がその刑罰を受けねばならなかった（**ステップ24**）。

それからわたしは、イエスが**祭司の服**（His priestly attire 大祭司の正装）をぬいで（**ステップ19**）、**王の衣を身に付けられる**（**ステップ21**）のを見た。イエスの頭上には、幾つもの冠がかさなり合っていた。イエスは天使の万軍にとりかこまれて、**天を出発された**。（黙8：1第7封印）黙1:10～16「諸刃の剣が口から出ていた」イエスは天を出発されるイエスである）**Then I saw Jesus lay off His priestly attire and clothe Himself with His most kingly robes.**

前頁の初代文集 p 452.453の引用文の最後の段落は、ST19の大祭司の行動が、天の大祭司イエスの御働きを象徴していることをよくあらわしています。

「イエスが祭司の服（His priestly attire 大祭司の正装）をぬいで（ステップ19）、王の衣を身につけられる（ステップ21）のを見た。イエスの頭上には、幾つもの冠がかさなり合っていた。イエスは天使の万軍にとりかこまれて、天を出発された。（黙8：1第7封印）黙1:10～16「諸刃の剣が口から出ていた」イエスは天を出発されるイエスである）」

この引用文は非常に興味深い。エレンホワイトは「祭司の服をぬいで（ステップ19）、王の衣を身につけられる（ステップ21）」と「イエスは天使の万軍にとりかこまれて、天を出発された。」と記述しています。

それは贖罪日の終盤の儀式、ST19（祭司の服を脱ぐ）、ST20（洗盤でに前身のすすぎ、ヤコブの悩み）ST21（白い祭服に着換えて聖所から出てくる）は、イエスキリストが再臨の主として地球に向かって出発されるタイミングを明らかにしています。

再臨のイエスが天の都（聖所）を出発されて地球に到着されるまでの日数は七日半とされています。

黙 8:1 「1 小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。」

預言において1時間は15日を意味します。したがって半時間は七日半を意味します。

罪の除去第2段階 聖徒から罪の記録が取除かれる

「ヤコブの悩み」

- ⑤ ST20 外庭 大祭司は外庭の洗盤で体を洗い聖所に戻る 洗盤でのからだの洗いは「ヤコブの悩み」を象徴している

エゼキエル42：14「祭司たちが、聖所にはいった時は、そこから外庭に出てはならない。彼らは勤めを行う衣服を、その所に置かなければならない。これは聖だからである。彼らは民衆に属する場所に近づく前に、他の衣服を着けなければならない」。

人あ上 p 422、423「真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された。」

初文p458「彼らは、ヤコブのように、ひたすら神と格闘していた。天使たちは彼らを救いたいという思いに駆(か)られたが、もうしばらく待たねばならなかった。神の民は杯を飲み、バプテスマを受けねばならなかった。」

大争闘下p 406、407「もし人々の目が開かれて、天の幻を見ることができたならば、力強い天使の一団が、キリストの忍耐の言葉を守る者たちの回りに駐屯(ちゅうとん)しているのを見るであろう。天使たちは、優しい同情の念をもって、彼らの苦悩を見つめ、彼らの祈りを聞くのである。彼らは、人々を危機から救出せよという指揮官の言葉を待っている。しかし、彼らは、もう少し待たなければならない。神の民は、杯を飲み、バプテスマを受けなければならない。」う1つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた』と言っている(黙示録 20:12)。命の書には、神の働きをしたすべての人の名が記されている。イエスは、弟子たちに『あなたがたの名が天にしるされてい

ることを喜びなさい』と言われた。(ルカ 10:20) パウロは、忠実な同労者の名が『いのちの書に……書きとめられている』と言っている(ピリピ 4:3)。ダニエルは、『かつてなかったほどの悩みの時』を予見して、「あの書に名をしるされた」すべての神の民は救われると言っている。」

大争闘下P212「天には、人々の名と行為を記録した書物があって、審判の決定は、それによってなされる。預言者ダニエルは、「審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた」と言っている。ヨハネも、この同じ光景を描写して、「かずかずの書物が開かれたがもう1つの書物が開かれた。これは**いのちの書**であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」と言っている。
(黙示録 20:12)

大争闘下P218「型としての奉仕において、大祭司は、イスラエルのために贖罪をなし終えたと、外に出て来て(ST21)、会衆を祝福した。そのように、キリストも、仲保者としての働きを終えられると、「罪を負うためではなしに……救いを与える」ために来られて、彼を待っている人々に永遠の生命をお与えになる(ST22)(ヘブル 9:28)。祭司が聖所(the Sanctuary)から**罪を除去**した時(ST15~17-A)に、アザゼルの山羊の上にそれを告白した(ST18)ように、キリストは、罪の創始者であり煽(せん)動者であるサタンの上に、これらの罪をすべて置かれるのである。アザゼルの山羊は、イスラエルの罪を負って、「人里離れた地」に送られた(レビ 16:22)。そのように、サタンは、自分が神の民に犯させたすべての罪を背負って、1000年の間、この地上に監禁される。地上はその時、荒れ果てて住む者もない。そして彼は、ついに、すべての悪人を滅ぼす火の中で、罪の刑罰を余さず受ける(ST24)。こうして、**罪は最終的に除去され、進んで悪を捨て去った人々**がすべて救われて、贖いの大計画は完成するのである。」

✻ 調査審判は1844/10/22日以来天の至聖所で始められ、いにしへの、金の香壇での混ぜた血の奉獻儀式が象徴する天の聖所第1室での総括的な贖いをもって、恩恵期間が終了するまで続けられます。

「調査審判と罪の除去」のタイミングまとめ

「調査審判」と「罪の除去」はセブンスデー・アドベンチストに与えられた「現代の真理」の根幹です。その意味とそのタイミングは理解できたでしょうか？以下にそのまとめを記します。

- * 1844/10/22日以来現在まで天の至聖所で「死せる義人の調査審判」が行われており、審判に合格した者にはワンバイワンに「無罪判決」が確定してきました。またそれは、これからも続けられます。ごく近未来に、調査審判はその対象が「死せる義人」から「生ける義人」に移るでしょう。
- * 「生ける義人の調査審判」は「日曜休業令」を合図に、黙示録7章の14万4千人と白い衣を着た大群集の「無罪判決」の確定を行います。それらの、「無罪判決」の確定はワンバイワンに行われると思われませんが、まだ定かではありません。
- * 「わたしの罪を取り除いて下さい」と言う、聖徒からの祈りが大祭司であられるイエス様の御もとに上がらなくなりますと、総括的な、最後の罪の贖いを金の香壇の前で行われる、大祭司イエスは香炉に香壇に組み込まれた祭壇の炭火を満たし、地球に向かってその香炉を投げられ「事終われり」と恩恵期間の終了を宣言されます。
- * 調査審判に合格し「無罪判決」が確定している「死せる義人」と「生ける義人」は「命の書」に記されている全ての罪が一時に除去され、「主に聖なる者」と言う印が全聖徒の額に押されます。

ただし、全世界に展開している14万4千人候補（約1000倍いるかも）については、先に「主に聖なる者」と言う印が押されるのかも知れません。何故なら14万4千人候補は淘汰されて144000人軍勢になる時、「白い衣を着た数えることができないほどの大群衆」（黙7:9~11）より先に神の倉に入れられる（黙14:4, 5）と書いてあるからです。14万4千人候補は、銀のルツボに投げ込まれ、不純物が取り除か

れ「恐るべきこと旗を立てた軍勢のようなもの」としての軍隊となるのです。

- * ゼカリヤ 3:8,9 マラキ 3:1~3の「銀のルツボ」預言、と黙 6:9~11「香壇の下から叫ぶ殉教者」黙11:1~3と黙13:5の「42か月」は連動しており14万4千人候補の多くが殉教するでしょう。彼等の血の証が「白い衣を着た大群集」を呼び集めるのです。
- * したがって「罪の除去」は至聖所ではなく、聖所第1室での金の香壇での混ぜた血の奉献儀式が象徴している、天の聖所第一室で完成すると思われます。

黙11:1~3「1・・・「さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々とを、測りなさい。2・・・彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう。3そしてわたしは、わたしのふたりの証人(第1次適用——旧約、新約聖書 第2次適用——144000人と白い衣を着た大群衆)に荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう」。

まとめに関連した引用聖句、エレンホワイトの引用文

黙 6:9~11「9 小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。10 彼らは大声で叫んで言った、『聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか』。11 すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、『彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように』と言い渡された。」

黙 14:4「4 彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。5 彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。」

ゼカリヤ 3:8,9 「3 ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、4 み使は自分の前に立っている者どもに言った、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」。またヨシュアに向かって言った、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」。5 わたしは言った、「清い帽子を頭にかぶらせなさい」。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。主の使はかたわらに立っていた。6 ……主の使は、ヨシュアを戒めて言った、7 「万軍の主は、こう仰せられる、あなたがもし、わたしの道に歩み、わたしの務を守るならば、わたしの家をつかさどり、わたしの庭を守ることができる。わたしはまた、ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる。8 大祭司ヨシュアよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちもききなさい。彼らはよいしるしとなるべき人々だからである」

「彼の汚れた衣を脱がせなさい」は、大祭司イエスが天の至聖所で我々人類の罪を取り除き、創造当初の罪を知らない身分に回復働きをしておられることを知りながら、いまだに罪を捨てきれない私たちに対する恵みの言葉です。「彼らはよいしるしとなるべき人々」とは、144000人候補が「汚れた衣を脱ぐ」働きに参加し、「身を悩ませながら」「主よ私の罪を取り除いて下さい」と祈り求め「わたしの道に歩み、わたしの務を守」りなさいと言う勧告に従う時「彼の汚れた衣を脱がせなさい」と言う命令があなたに対して発せられるのです。

マラキ 3:1~4 「1 ……炉のように燃える日が来る。……その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。2 しかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。3 ……4 あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。」

「しかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。」と言う、み言葉の約束を信じましょう。そして「彼に命じた定めとおきてとを覚え」る時、神の約束が実現するのです。

それが罪の除去です。その恵みに与った者は「神の戒めを守り、イエスの証を持つ」「傷も、しみも、そのたぐいのものがない」144000人軍勢となるのです。